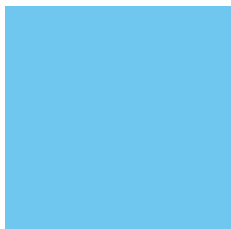
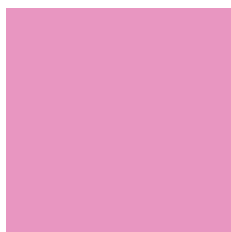
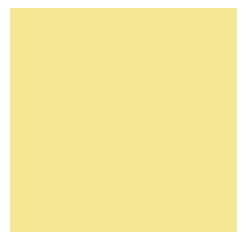


教育保育研究所 保育子育て研究所 年報

桜花学園大学教育保育研究所／名古屋短期大学保育子育て研究所

2013年度

—第11号—



目 次

はじめに	【野津 牧】	2
2013年度 第11回夏季保育研究セミナーの報告	【岡林恭子】	3
2013年度 講演会報告		
「子どもの命を守る保育園の役割を考える」	【猪熊弘子】	9
「子どもの命を守る保育園の役割を考える」 ～猪熊弘子氏の講演を聴いて～	【太田早津美】	18
研究報告		
国際ボランティアを通しての保育学生の学びと成長 —ベトナム・ホーチミン市における児童福祉施設のボランティア活動報告—	【野津 牧・原田明美・山下直樹・小川絢子】	20
カナダにおける保育・子育て資料センターと保育者現任研修について —ウエストコーストチャイルドケアリソースセンターを訪問して—	【田端智美】	30
スウェーデンの環境教育、「森のムッレ教室」を実践して2	【嶋守さやか・伊藤夏実・加藤由美】	43
子どもの生きる力を育むリズムのある生活 ～シュタイナーの治療教育における「食べる・寝る・遊ぶ」生活リズムから学ぶ～	【山下直樹】	53
実践記録		
保幼小の連携のあり方を探る	【奥村紀子】	62
資料		
2013年度 事業報告		
1. 第11回夏季保育研究セミナー		72
2. 2013年度冬期講演会のまとめ		74
3. 子育て支援講座		76
4. 子育て交流会の経過・参加人数・内容		76
奥付け（執筆者）・編集後記		

はじめに

2013年度は、夏季保育セミナーと冬の講演会を中心に企画を組みました。

夏季保育セミナーは、宮城県石巻市において被災した子どもたちの支援を続けている NPO 法人にじいろクレヨン代表の柴田滋紀氏をお迎えし、「震災被災地の保育に学ぶ―石巻の子どもたちと関わって―」の講演をしていただきました。

柴田氏は、ご自身も東日本大震災で被災され、震災の 11 日後から避難所で子どもたちの支援を開始し、現在は仮設住宅を巡回し移動学童保育の活動などを展開されています。遊びの中で見せる子どもたちへの震災の影響について語っていただきました。

午後は、乳児保育、幼児保育、特別支援保育などの分科会と屋台村・手遊び村に、卒業生を中心に多数参加していただきました。

また、冬の講演会は、ジャーナリストの猪熊弘子氏をお迎えし、「子どもの命を守る保育園の役割を考える」をテーマに講演をしていただきました。実際の死亡事例などを取り上げて解説されるとともに、規制緩和の中で危ない保育施設が存在することを紹介されました。子どもの命を守るという保育施設の役割について、あらためて考えさせられました。

子育て支援室は、前年度に続き平日開催を続けると共に 4 つの講座を開催することができました。

児童虐待の相談件数の増加や 2014 年 4 月からは消費税の増税など子育てを巡る環境は厳しい状況が続いています。今後とも桜花学園大学の教育保育研究所と名古屋短期大学の保育子育て研究所が協力し、研究所の活動を充実させていきたいと思ひます。

2014 年 3 月

保育子育て研究所長 野津 牧

2013年度 第11回夏季保育研究セミナーの報告

本学卒業生を中心とした若手保育者対象のセミナーを、次のように開催いたしました。卒業生が日ごろの思いを先生や仲間存分に聞いてもらうことで、我が家に戻ったような気持ちになり、元気が取り戻せるようなセミナーになることを願って企画いたしました。

日 時 2013年8月4日（日）

場 所 桜花学園大学 名古屋短期大学

主 催 教育保育研究所 桜花学園大学

保育子育て研究所 名古屋短期大学

対象者 保育者

参加者 127名

（桜花学園大学 33名 名古屋短期大学 63名 学生 26名 その他 5名）

<午前プログラム>

1 開会式 10:00～

あいさつ 野津 牧（保育子育て研究所長）

2 講演会 10:15～

「震災被災地の保育に学ぶ ～石巻の子どもたちと関わって～」

NPO 法人にじいろクレヨン

代表 柴田滋紀さん

昼食・休憩 12:00～13:00

<午後プログラム>

3 1限 分科会 13:10～14:40（場所） <担当者>

A 実践屋台村+手遊び村 （食堂） <浅野・高田・田中・田端・中川・水谷>

B 乳児保育 （721教室） <高須・原田>

C 幼児教育① （722教室） <岡林・小川（雄）・鏡>

D 幼児保育② （723教室） <大澤・嶋守・布施>

E 特別支援保育 （724教室） <小川（絢）・今野・中村・山下>

4 2限 分科会 14:50～16:20（場所） <担当者>

F 手遊び村 （食堂） <浅野・高田・田中・田端・中川・水谷>

G	乳児保育	(721 教室)	<太田・布施>
H	幼児保育①	(722 教室)	<石月・寺島・豊田>
I	幼児保育②	(723 教室)	<神谷・平野・吉見>
J	保護者支援	(724 教室)	<上野・中村・橋本・ブストス>
K	小学校・学童などの関係者	(725 教室)	<杉浦・辻岡・吉田>
☆	職場相談	13:10～16:20 (管理棟1階)	<野津・藤田>

講演会の記録

本年度は講師に石巻市在住の画家、柴田滋紀さんをお招きし、「震災被災地の保育に学ぶ ～石巻の子どもたちと関わって～」をテーマに講演会を開催いたしました。柴田滋紀さんは、2011年3月11日、東日本大震災で被災され避難生活を送りながらも、いち早く被災した子どもたちのために移動学童保育を開始されました。現在はNPO法人「にじいろクレヨン」代表として、仮設住宅の子どもたちを対象とした保育活動を続けられています。

柴田さんの講演より

1 震災直後

(1) 東日本大震災の発生

2011年3月11日14時46分、マグニチュード9.0の地震発生。津波がくる…とにかく逃げようと、消防団長と門脇地区の住民に避難をうながして回りました。津波とともに車や家屋等が押し寄せ、避難所となっていた門脇小学校では火災が発生しました。消火活動を朝方までしながら、石巻高校の避難所に入ったわけです。



門脇小学校の被災直後の様子

(2) 震災直後の生活

2人で1畳ほどの居場所ではありましたが、そこにはストーブが1台ありました。その暖かかったことは今でも忘れません。こうして生きていることにほっとしていました。

しかし避難所は人であふれ、生活のすべてに不安がぬぐえませんでした。大人は疲れはて、子どもからは笑顔が消えていきました。

2 石巻子ども避難所クラブの設立

(1) 子どもたちとの出会い

子どもたちが元気をなくしていく様子を見るにつけ、子どもたちがストレスを発散できる場所をつくりたいという思いがつのり、2011年3月22日、「石巻子ども避難所クラブ」（現にじいろクレヨン）を立ち上げました。幸いにも被災されなかった家庭にあった画材をいただき、お絵かきをしたり、フィンガーペイントをしたり、粘土で遊んだりしました。ストレスは子どもの作品にも表れていました。



(2) 避難所から仮設住宅へ

6月には、仮設住宅での生活が始まりました。曜日ごとに行く仮設住宅を決めて、定期的な活動に行きました。遊び場があるわけではなく、炎天下の中、駐車スペースで遊びました。「車とおるよー」「気をつけて」と叫ぶこととなりました。



仮設住宅の駐車場で遊ぶ子どもたち

3 石巻の子どもたちについて ～震災後、子どもたちが直面した変化と現状～

(1) 心とからだの間診表

☆子どもの項目（3歳6ヶ月）の間診表によると

「親にしがみついで離れなかったり、後追いが激しくなった。」「必要以上におびえたり、小さな物音にびっくりしたりする」の項目に○が付けられていました。

☆保護者の項目では

「いらいらしたり、怒りっぽくなった」「色々不安だ」「ちょっとした物音や揺れにひどく驚いてしまう」の項目に○が付けられていました。

(2) 子どもたちが経験した外傷的出来事

大震災が子どもに与えた影響として、

- ・ 強烈的な緊張
- ・ 自分を圧倒する恐怖感や悲しみなど
- ・ 一時的ではあれ、親との分断による強烈的な不安を経験
- ・ 転居・転校により、故郷の喪失や孤立
- ・ 新たな環境での負担の多い再スタートなどがあげられています。

(3) 子どもたちはこの強烈な心理的状态にどのように取り組むか

- ・愛着を求める（親とくっついて不安や落ち着かない気持ちをなんとかコントロールしようとする）
- ・自分の感情を忘れようとする、気づかないようにする
- ・遊びの中で手に負える出来事に変換する
- ・心の症状を出す などがあります。

(4) 子どもの支援になること

- ・安心安全な環境づくり
- ・日常生活の建て直し
- ・活動の機会を提供
- ・感情を出せる配慮

泣いていいよ、感情をだしていいんだよと語りかけていきたい。この4つをしっかりとっておけばPTSDにはならないと思うのです。



仮設住宅の集会所で友達と遊ぶ子どもたち

5 まとめ

こうした活動を通して、子どもたちに変化が見られるようになりました。能面のような子どもたちが笑顔を見せてくれるようになりましたし、人の話がきけるようになりました。そして自ら家庭の話や学校生活の話をするようになりました。ありのままの姿を見せるようになってきました。

またこうした変化は子どもだけでなく、保護者や地域の方にも見られます。保護者の目つきが変わってきましたし、地域の人たちの子どもへの接し方が変わってきました。

今後も、子どもたちに寄り添い見守りながら、子どもたちの心を豊かにする活動に取り組んでいきたいと思います。

午後のプログラム 分科会の報告（担当者報告書より抜粋）

○実践屋台村+手遊び村

実践屋台村では、手作りおもちゃ・泥団子・いやし棒などを作って楽しみました。また、手遊び村では新しい手遊びの紹介に真剣な表情で取り組む姿から、明日からの保育に役立てようとする気持ちが伝わってきました。





○乳児保育

45名の参加者でした。子どものかみつき、少食やアレルギーの対応、保護者との関わり方などについて話し合いました。臨時採用の先生が多く、正規の先生は1年目であっても担任を持たなくてはならないことの大変さが話し合われました。これらの問題に対して6年目の保育者からは、周りの先生に相談すること、新卒でもしっかりと意見を言って保育の見直しをしていくこと、保護者への労いの言葉かけを忘れないこと、保育者の楽しそうな雰囲気作りが大切であることなどのアドバイスがありました。1年目の参加者からは先輩からのアドバイスがとても勉強になったという感想が述べられました。

○幼児保育

参加者は29名でした。1年目ならでの悩みとして、先輩の先生のクラスと自分のクラスを比較してしまい、子どもが育っていないのではないかと不安になるという悩みや、職場における人間関係の難しさ、要支援児への対応などの話し合いをしました。6年目の先輩からは、具体的な事例をあげてのアドバイスがあり、参加者からは力づけられた、参加してよかったとの感想が聞かれました。



○特別支援保育

参加者は9名でした。加配の先生が少ない中での保育が難しいことや、危険なことが分からない子どもにどのように対応したらよいか、話し合いがなされました。また子どものかみつきが多いことや、多動の子どもとどう関わっていけばよいか、活発に話し合いがなされました。

○保護者支援

参加者は2名でしたが、保育士と保護者との思いのギャップ、保護者との連携のあり方などについてじっくりと話し合うことができました。教員からは、ベテランの先生と若い先生が、お互いに話し合うことが大切なことや、自分が困っていることを保護者に伝え、ノウハウを教えてもらうこともよいのではないか、また園の中だけではわからないこともあるので大学を利用してほしいとのアドバイスがありました。



○小学校・学童などの関係者

小学校講師2名と幼稚園5歳児担当の3名の参加でした。職場の現状、今後の方向性、人間関係の悩みなどについて話し合いました。悩みを語りながらも、3名とも明るく前向きに頑張っている様子がみられました。

「子どもの命を守る保育園の役割を考える」 ～事故・災害から子どもの命を守るために大切なこと～

ジャーナリスト・東京都市大学客員准教授 猪熊 弘子

1. はじめに

15年間にわたり、4人の子どもを0歳から保育園に預けて働いてきました。毎日、保育園に子どもを送り迎えし、保育士さんたちや他の保護者との関わりを深めていきました。「父母の会」の役員を引き受け、会長として連絡会の役員になったこともあります。3人の子どもが通った公立保育園が民営化された時には、保護者の代表として法人の選定委員も務めました。保育園に子どもを預けながら働いてきたことで、まさに私自身が、「親」として保育園に育てられたという思いがあります。

第一子が生まれたのは1996年5月でした。保育園に入園申請しましたがすぐに入園できず、したのは翌年の1997年4月から、0歳児クラスへの入園でした。ちょうど「少子化」が日本の将来の問題として考えられ始めるようになった時期で、日本で初めての少子化対策施策である「エンゼルプラン」のすぐ後のことでした。以来、少子化、民営化、待機児童、企業参入など、社会の中で「保育」の位置づけが次第に大きくなっていく時代の流れの中で子どもを育て、同時にフリーの記者として、その「保育」のあり方について取材し、報道してきました。

この18年を振り返ると、社会における「保育」の位置づけが随分変わってきたと感じます。かつてはほとんど報道されなかった「保育」のニュースが、今は新聞や雑誌、インターネットなどのメディアに載らない日はないほどになりました。「子どもは女性が育てるもの」という旧来の価値観から、「子どもは社会で育てるもの」という新しい価値観に変化しつつある一方で、やはり、子育ての多くの部分を女性が担っています。その矛盾が、今の保育が抱える問題につながっているのではないかと感じています。たとえば、保育士不足の問題や、保育士の処遇の問題、待機児童の問題などはすべて、日本における子育ての理想と現実の間の矛盾によるものなのではないかと感じるのです。

今回は、保育が社会的に注目されているという社会的な背景をふまえ、だからこそ、決して起こしてはならない「事故」について考えていきたいと思います。

2. 毎日の保育は「くり返し」と「積み重ね」

(1) 「まあ、いいか」と思う瞬間が予期せぬ事故のきっかけに

一昨年、飛行機で青森に行く機会がありました。飛行機に乗る時、私はいつもトランクを預け、手持ちのバッグだけを機内に持ち込むようにしています。バッグはいつも前の座席の下に入れてあります。何気なく前の座席の下にバッグを入れたのですが、回ってきた客室乗務員に「お客様、前の座席の下にもう一度しっかり入れ込んでください」と言われました。私の近くに座っていた老婦人は前の座席

の下にバッグをうまく入れることができず、客室乗務員が床にひざまずくようにして荷物を椅子の下に入れ込んでいました。

いつもあまり気にしたことのない、客室乗務員のフライト前の準備の様子に、その日は釘付けになっていました。

「なぜ、そこまでやる必要があるのだろう？」

そのとき漠然と思いだしたのは、1985年8月に起きた日航機墜落事故のことでした。操縦不能となった日本航空123便のジャンボジェットが群馬県の雄鷹山に墜落し、520名の方が亡くなった、世界の航空史上最悪の事故でした。悲惨な事故を起こした過去と、事故を検証した教訓があるからこそ、やはり安全対策が徹底されているのだろうと感じました。

航空機の客室乗務員のいちばんの任務は、お客様の命を守ることです。にこやかに乗客に対応している時の笑顔だけ見ていると、ともすればただの乗客サービスを行うのが任務だと思いがちです。しかし、客室乗務員の友人たちによれば、万が一の事故が起きたときに乗客の命を守るため、徹底的な訓練を受けるのだそうです。

荷物の置き方も乗客の命に関わるのです。定められたマニュアル通りに荷物を前の座席の下に入れていなくても、そのフライトで何もなければ問題は起こりません。しかし、もしマニュアル通りに荷物が収められていないのを見過ごした時に、たまたま激しい乱気流に巻き込まれれば、荷物は機内に飛び散り、凶器になります。乗客がケガをするか、最悪の場合、命を落とすことさえあるかもしれません。だからこそ、いつでも確実に荷物を収納しなければならないのです。

客室乗務員の仕事は「サービス」であり、保育の仕事とは違います。けれども、客室乗務員の仕事というのは、保育の仕事に似ているところがあるな、と感じました。もっともよく似ているのは、人の「命を守る」という仕事であるという点です。客室乗務員は乗客を、保育士は子どもを守るのがいちばんの仕事です。そう考えると、保育士も「やらなければならない」と決められていることをキチリ守ることがもっとも大切だと思ったのです。

とはいえ、人間は、頭では理解していても、心や身体が疲れていて、「まあ、いいか」とか「気になるけれど、きっと大丈夫だろう」とやり過ごしてしまうことがよくあります。そういった瞬間が、予期せぬ事故につながってくるのです。

(2) 自分1人だけでは避けられないことも、「チーム」でカバーできる

自分一人ではカバーできない「まあ、いいか」「うっかり」「きっと大丈夫」というやり過ごしや思い込みをなくし、事故を防ぐために助けになるのが「チーム」のチカラです。チームでお互いにカバーすることができれば、事故にはつながらないのです。

たとえば、体調が悪い日もあるでしょう。家族に心配ごとがあって「心ここにあらず」という日もあるはず。そういったことを含めて自分だけでどうにかしようとせず、出来る限りチームで共有することが必要なのではないのでしょうか。「今日はちょっと体調が悪くて、ボーッとしてしまうかもしれない」「実は今、家族に心配ごとがあって、気が気でないんです」と、素直に誰か他の人に告げ

ておきたいものです。逆にそういったことをチームの他の人から言われた場合、いつもよりも相手の行動に気を配るようにしようと思うことが必要です。

もちろん、子どものこと、保護者のこと、その他、保育において気になることについては、最優先で共有しなければなりません。自分だけで抱え込んでどうにかしようと思うと、破綻する場合があります。誰かほかのひとに告げて、共有することが必要です。そして、「共有」するためには、誰もが気軽にそういったことを告げることができるような職員同士の関係ができていなければならないはずです。「こんなことを言ったらなんとと思われるだろう」「〇〇先生にはこのことは絶対に言えない」。そんな風に心をセーブしてしまうような関係性しか持てない職場や、「自分には関係ないこと」と仲間の困難な状態に目をつぶるような職場では、危機管理も十分にできないはずです。

大切なのは、毎日の保育を確実にくり返し、積み重ねていくことです。保育というのは、当たり前のことを当たり前にくり返し、それを毎日積み重ねていくことです。ひとつひとつは小さなことであっても、それぞれに大きな意味があります。ルーティーンにやるべきことを「まあ、いいか」とやり過ごすことなく、きちんと積み重ねていくこと。それが子どもたちの命を守り、保護者との信頼関係につながっていくのだと思います。

3. 実際の事故事例から考える

(1) 平成 24 年 1 月 1 日～ 12 月 31 日までの保育施設での事故事例

毎年 1 月に厚生労働省から「保育施設における事故」についての報告があります。前年 1 年間に厚生労働省に報告のあった、認可および認可外の保育施設でのケガ（全治 30 日以上）と死亡事故についての報告です。保育事故で子どもを亡くした遺族が結成している「赤ちゃんの急死を考える会」が中心になり、厚生労働省に事故報告を義務づけるように言い続けた結果、ここ数年、ようやくこうした報告書が出ていますが、未だに「義務」にはなっていません。

これらの保育事故の事例を詳しく調査していくと、なぜ事故が起きたのか？ どうすれば防ぐことが出来たのかを考えるきっかけになります。もっとも重大な死亡事故について、ひとつずつの事例を見ていきたいと思います。

<平成 24 年 1 月 1 日～ 12 月 31 日までの保育施設での事故>

【年齢別死亡数】（年齢は満年齢。かっこ内は平成 23 年の報告数）

	0 歳	1 歳	2 歳	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳	計
死亡	10 (7)	4 (5)	2 (2)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	18 (14)

(2) 事故原因と考察

まず、亡くなった子どものうち 6 歳児の 1 名についてです。この事故は、24 年 3 月、埼玉県東松山市で起きました。亡くなったのは年長の子どもの、まもなく卒園式を控えていました。その日は強風注意報が出ており、園の近くのマンションの外壁工事の現場を通りかかったときに工事の足場が崩れ、運悪くちょうど下を通りかかった子どもたち、先生たちがその下敷きになったというものです。

この事故について考えるポイントは2つあります。ひとつは「強風注意報」が出ていたこと、もうひとつは工事現場の近くをお散歩ルートに選んだことです。強風注意報が出ている日に、わざわざ工事現場の周囲をお散歩する必要があったのでしょうか。危険を避けるためには、気象情報をチェックすることが必要です。加えて、園の近くが今、どんな状態にあるのか、お散歩ルートは本当に安全か、といったことを、普段からきちんと確認していくことです。園に通勤する際などに、近隣の様子を把握し、職員で共有しておくことが必要だと思います。

3歳の子どもが亡くなったのは、茨城県五霞町の認可外保育所でした。個人が経営している認可外保育所で、学童保育所も併設していました。夏で、亡くなった3歳の子どもは職員が見ている場所で、1人でプールに入っていました。ちょうど別の子どものお迎えの人がきたため、職員はその対応のためにその場を離れました。離れた時間は5分。その短い間に子どもはプールに浮いているのを発見されました。プールはよくあるビニール製で、水深は24cmだったそうです。きっと職員は目を離しても「大丈夫」と思ったのかもしれませんが、しかし、子どもは10cmの深さの水があれば溺れます。24cmの水であれば、足をすべらせて水に顔をつけてしまったら、起き上がれず、そのまま溺れてしまうことが十分に予測できます。「大丈夫」という一瞬の気持ちで、水遊びをしている子どもから目を離してはいけないという当たり前の原則を破った結果、悲しい事故につながったのではないかと考えられます。

2歳の子どもが亡くなったのは、栃木県栃木市の公立保育所。白玉団子を喉に詰まらせたのが原因でした。栃木市では、事故の直後に調査委員会を立ち上げ、なぜ、この事故が起きたのか調査をしました。その結果、白玉団子については、「必ず調理室で切ってから保育室に持ってくる」と決まっていたにもかかわらず、この事故を起こした園だけが、そのルールを守っていなかったことがわかりました。他のすべての園できちんとルール通りにしていたにもかかわらず、この園だけがなぜか守っていませんでした。決められたルールを守りさえすれば、このような事故は起きなかったはずで、悔やまれます。

東京都あきるの市で亡くなった1歳児も、白玉団子を喉に詰まらせたことが原因でした。本来、職員が白玉団子を切って食べさせなければならなかったのに、職員がお皿を子どもの目の前に置いたままその場から離れてしまいました。その際に子どもが自分で団子をつかみ、口に入れてしまったものです。なぜ、そのときに他のスタッフに声をかけなかったのでしょうか。その場から離れたのは体温計が必要だったからと言われていますが、食事中にその場を離れてまで体温計を取りに行く必要があったのでしょうか。

そして、今事例を挙げた以外の0歳児10名、1歳児3名、2歳児1名は、すべて午睡中に亡くなったものです。実は保育園での死亡事故で最も多いのが、午睡中です。平成23年の数字は特徴的で、亡くなった子どもは0～2歳までで、全員が午睡中でした。特に0歳児の事故はほとんどが午睡中です。避けるためには、絶対にうつぶせに寝かせないこと、定期的に呼吸を確認することなど、当たり前のルールを守ることが重要です。「くり返し」と「積み重ね」を確実に行うことこそが、保育事故を防ぐためにもっとも重要なことなのです。

(3) 事故をふせぐためにやっておきたいこと

昨年、一昨年の事例を踏まえると、保育事故の傾向がわかります。保育園で亡くなるのは0～2歳がほとんどで、多くが午睡中だということです。3～5歳は滅多に死亡事故がなく、園外で事故にあうことがほとんどです。もし園内で3～5歳が亡くなったとしたら、それは何か特殊な事情があるのではないかと考えられます。

そういった傾向を踏まえ、事故を防ぐために園でやっておきたいことが明らかになってきます。まず、園外保育やお散歩を安全に行うために欠かせないのが「お散歩マップ」です。子どもたちが歩く場所をチェックして、何か問題のあるものがないかどうかを確認し、マップに記していきましょう。車が突っ込んでくることがあるので、ガードレールのある道を選ぶ、地震などで崩れそうな建物や斜面を避ける、工事などが行われている場所を避けるなど、より安全な園外保育ができるはずですが、遠足などで遠くに行く場合には、もしそこで万が一の災害に遭遇したときのことも考え、近隣にある保育園などの公共施設の場所を確認しておくことや、交通機関が使えなくなったときの帰宅方法についても考えておくべきです。

園内では、「死角」探しが必要です。これは職員の「ヘンだな」という勘を働かせることが重要です。特に施設になれていない新しい職員ほど、「この場所は危険だな」という感覚が生まれるものです。そういった「勘」のようなものを、職員同士できちんと共有しあえる体制を作っておくことも必要です。

また、亡くなる子どものほとんどが午睡中なので、なによりも「お昼寝のあり方」を考えるべきです。うつぶせにしていないか、といった基本はもちろん、無理に寝かせていないか考えてみましょう。実は残念なことに、昨年、一昨年と、午睡中に亡くなった子どもの中には、うつぶせにされて上から布団をかけられるという、虐待のような亡くなり方をした子どももいます。狭い施設でたくさん子どもを預かっているような場合、誰か寝ずに泣いている子どもがいると、他の子が眠れません。その子を寝かせる人員の余裕もなければ、どこか別の部屋に行くというスペースの余裕もなく、さらには上手く寝かせるコツを知っているベテランがいないといった施設では、どうしてもその子を寝かせなければならない、という無理な力が働くことがあります。そういったときに、うつぶせにして上から布団をかけるという、ありえないことが行われているのだと想像できます。そういった余裕のない保育施設を作らせないような制度も重要になってくると思います。

また、衣服についても注意が必要です。衣服を遊具にひっかけて亡くなったり、ケガをしたりする子どもが、幼稚園、小学校でも起きています。子どもたちの衣服についても、保護者に指導して、安全な服を着せてもらう必要があるはずです。

4. 家庭での事故防止も保育園で喚起しよう

(1) 子どもの死因の第一位は不慮の事故

いくら保育園での子どもの安全に気を配っていても、その大切な子どもが家で亡くなったりケガをしたりしたら、やはり保育者にとっては大きなショックです。そこで、家庭での事故についても保護者に注意喚起してほしいと思います。

家庭での事故で多いのは、次のようなものです。

- ・階段・ベッド・ソファからの転落
- ・風呂場での転倒、溺水
- ・調理器具や食料品、暖房器具等によるやけど
- ・タバコ、電池等の誤飲・誤嚥

子どもから目を離さないことはもちろん、危険な家電を置かない、使わない、タバコなどの危険なものは家に置かないなど、事故を防ぐためにできることはたくさんあります。そういった家庭での事故防止対策を、保護者とのコミュニケーションに利用するのもひとつの手です。参考になるホームページを紹介しますので、情報を集め、利用してみてください。

<*参考になるサイト>

Injury alert（傷害速報：日本小児科学会のホームページ内）

<http://www.jpeds.or.jp/modules/injuryalert/>

国民生活センター <http://www.kokusen.go.jp/>

5. 保育園で必要な災害対策

(1) 震災の場合～あらゆる想定をしておくこと＝「ルール」作りも重要

2011年に起きた東日本大震災では、東北、関東地方の多くの保育園、幼稚園が被災しました。保育中に大きな地震などの災害が起こることを、常に想定していなければいけないと再認識しました。実は私は、1995年の阪神大震災で被災した経験があります。阪神大震災のような直下型の地震であれば、最初の30秒～100秒を無事にしのぎ、その後3日間の食料や水を確保していれば、生き残れると確信しています。そのためには、まずは園舎の耐震化と、ガラスなどの飛散防止を行うこと。そして、園内の家具やピアノなどの転倒防止対策を取ることです。

津波など、その地域によって起こる可能性の高い災害については、地域別に対策を取っておく必要があるでしょう。

東日本大震災の前に導入されていたのが、地震速報のアラームです。大きな地震が起こる少し前にアラームが鳴るので、数秒であったとしても準備ができます。園には導入しておきたいものです。また、最近では、竜巻などの気象災害も増えています。同様に、気象警報についてもすぐにキャッチできるようなシステムがあるといいでしょう。

避難訓練も大切です。東日本大震災で被災した福島のある保育園では、たまたま3月11日の数日前に、初めての保護者を含めた本格的な避難訓練を行っていたそうです。そのため、東日本大震災の日にも、保護者への連絡や子どもの引き取りなどが極めてスムーズに行えた、という話を聞いています。避難訓練は形だけではなく、現実にも似た訓練にすることです。年に1度は必ず、保護者と一緒に行う訓練を行うことが重要だと思います。保護者への連絡方法についても、あらかじめ平時に考えておきましょう。東日本大震災のときには、携帯メールや電話が使いにくい状況が続きましたが、ツイッターなどのSNSを利用して連絡を取り合う方法が役立ちました。ただメールを整備するだけ

でなく、「これが使えない場合はこちら」というように、代わりの方法をいくつか設定しておくといいでしょう。

東日本大震災では、子どもたちを避難、誘導するために、地域の方の力を借りたという事例がたくさんあります。園の職員だけでは足りないことも考えられます。普段から、地域の方たちとも交流し、いざというときに大勢の子どもたちを無事に避難させるため、連携できるようなシステムを作っておくといいと思います。さらに、いざというときに助けになるのは、全く別の地域の人たちです。平常時から、さまざまな活動などを通して、他地域の保育園、幼稚園などとの交流を行っておくことで、災害が起きたときに支援をしてくれる人たちをつないでおくことができるのです。

「想定外」という言葉がありますが、子どもの命についての「想定外」はあってはならないものだと考えるべきだと思います。とにかくあらゆる可能性を考え、ルール作りをしておくことが重要です。

(2) 災害が起きたら？

実際に災害が起きたときには、次のようなことが必要です。

① 子どもを安全な場所に集め、人数を確認

まずは子どもたちを園庭の中心など、安全な場所に集めましょう。どこが安全かはそのときになってみないとわかりません。そのときの気候と災害の状況、園舎や園庭などの様子、近隣の様子などから冷静に判断する必要があります。

② 状況を確認

園舎や園庭の被害の状況や、園の周囲の地域における被害などを確認しましょう。次にどのような行動を取るかの判断基準になります。

③ スキンシップや声かけで子どもたちを安心させる

子どもたちは不安でいっぱいです。保育者が慌てふためく様子を見れば、余計に混乱するはずで、子どもたちを安心させるために、つとめて明るく、たくさんの声をかけ、スキンシップをするなどしましょう。

④ 次の行動への準備

周囲の状況から、園外へ避難するか、あるいは園内で待機するかなど、次の行動を考えます。一刻も早い冷静な判断が必要です。東日本大震災では、事前に決められていた避難所では危険だと判断した多くの園が、別の行動をとって、結果的に子どもたちの命を救った事例がたくさんありました。あらかじめ決められている避難所や避難方法が絶対というわけではありません。そのときの判断を誤らないためにも、普段から地域のことをよく知り、万が一のことを想定しておくことが必要なのです。

⑤ 連絡手段の確保

保護者や役所などへの連絡手段を確保しましょう。メールやSNSの利用といったデジタルツールは有効ですが、停電したり、電源が切れたりすれば使えなくなってしまいます。「張り紙」のようなアナログな連絡方法が有効な場合があります。特に、避難場所を移動する際には必ず次に

どこの場所に移動するのかを書いて貼っておく必要があります。最終的には張り紙や伝言などのアナログな連絡方法に頼らざるを得ないのです。

6. 子どもの育ちと安全～「命」を守る保育園の意味

(1) 保育園は子どもの「命」を守る場所であることが絶対

平成24年の1年間で、保育施設で亡くなった子どもが18人もいたことは、悲しい事実です。本来、保育園や幼稚園、その他の保育施設は子どもを守る場所であり、そこで亡くなる子どもがいてはいけないはずで、とにかく一刻も早く、死亡事故ゼロを実現することが必要です。

東日本大震災では、保育園の保育中に亡くなった子どもは3人、とされています。宮城県の公立保育所で、保育士と避難中に津波に流された子どもが3人いました。その3人以外は保育中に亡くなった子どもはいないとされています。津波に飲まれながらも、子どもを両手に抱え、泳ぐようにして必死で逃げて、奇跡的に助かったという保育士もいました。とにかく被災地の保育士さんたちの話を聞くと、DNAに「子どもを守る」ということが刻まれているのではないかとすら思うほど、とにかく子どもの命を守るということに全身全霊をかけていた方ばかりです。そこに保育士の存在意義があると感じます。素晴らしく尊い仕事です。

保育中に亡くなった子ども3人のほかに、お迎えに来た保護者に返して津波に飲まれてしまった子どもはたくさんいました。今も被災地の保育士さんの中には、保護者に返してしまったことを悔やみ続けている方が大勢います。辛い事実です。保育園にいた子どもたちがほとんど助かっていることを考えると、今後は保護者に子どもを返さずに、保護者を含めて保育園ぐるみで避難する、という方法も考えられるはずです。

震災後の保育士さんたちの行動や判断は、経験に基づいた正しいものばかりだったのだと思います。あらかじめ決められていた避難場所ではないところに避難するという決断は、その時になると意外と難しいのではないかと思います。結果的にはそういった判断が子どもたちの命を守ることにつながりました。

それは結局、普段の保育を確実にくり返し、着実に積み重ねていたからなのではないでしょうか。普段からしっかり子どもたちを見つめ、地域を見渡し、危険に敏感になり、自分たちがどのように動けば子どもたちを守ることができるのかを想定し、考え続けることで、いざというときに確実に安全な行動ができるのだと思います。日本中のすべての保育園で、毎日の何気ないことを「まあ、いいか」とやり過ごすことなく着実にくり返し、積み重ねていくことが、保育事故ゼロの第一歩につながります。

(2) 目の前の子どもに最善の保育を！

どのような場合でも、保育士は目の前にいる子どもに「最善の保育」を行うことが最も重要です。しかし、現在、保育の状況は決して良いことばかりではありません。規制緩和が行われ、保育に適さない、ある意味、劣悪な場所での保育が行われるようになってきました。都会では、認可保育園でさ

えも、必ずしもいい環境にあるとはいえない園が増えて来ています。法人組織が問題を抱えていて、現場の保育士がいい保育を行うことができない、という話しもよく聞くようになりました。それでも「施設が悪いから」「上層部が悪いから」と良い保育を放棄することは許されません。

とはいえ、そういった場所で長く保育を続けることはできないでしょう。多くの保育士が疲れ、心が折れるようにして保育の現場を離れることになってしまいます。余裕のない保育の現場で、多くの保育事故が起き、子どもの命が奪われています。

(3) 「よりよい制度」が子どもの命を守る

もはや、現場の保育士が「最善の保育」をしようと思う、その気持ちだけでは、子どもの命は守れない状況になっています。その中で、子どもの命を守るのは「よりよい制度」にほかなりません。保育所最低基準をはじめ、子どもの命や育ちを守るために決められた法律など、さまざまな「制度」が子どもの命を守っているのです。「保育の質」を支えるものは、現場の保育士たちの「最善の保育」に加え、「よりよい制度」によるバックアップです。規制緩和は子どもの命を危険にさらすことにほかなりません。

普段の何気ない保育のくり返しと積み重ねを着実にを行うこと、そしてそれが確実にできるようにバックアップしてくれる制度を守ること、それが、子どもたちの命を守ることにつながります。保育園は子どもの命を守るために存在する場所です。ひたすらそのことを突き詰めていけば、何が大切なのがきつとわかってくるはずです。

「子どもの命を守る保育園の役割を考える」～猪熊弘子氏の講演を聴いて～

保育学部 太田早津美

2013年12月8日、研究所の講演会がジャーナリストの猪熊弘子さんを招き開催された。会場の524教室には194名の参加者が集まり、1時間半の講演がわずかな時間に感じられるほど、講師の熱意のこもった話に聴き入った。

猪熊さん自身が4人の子どもを保育所に預け、15年間保育所に通う中でエンゼルプランが始まり、待機児童問題が浮上し、保育所の民営化問題に直面し、自分の生活に密着した問題として、子どもと保育の問題について考えるようになったとの事であった。保育所で起きた事故を取材し2011年に出版された「死を招いた保育」は、上尾市の保育所で起きた死亡事故について書かれており、多くの保育関係者が子どもの命を守る保育のあり方について考えさせられた衝撃の著書である。

今は、色々な意味で保育のあり方が問われている時代である。「まあいいか」と思った瞬間に予期せぬ重大な事故のきっかけになる事がある。日常の中に見過ごしてしまっている「まあいいか」はないか、見過ごしてしまったことで命に関わる事はないかを振り返りながら保育しないといけない。毎日の保育は繰り返しと積み重ねが大切である。

ミスを防ぐためにはチームで仕事をしていく必要がある。こうした事故防止の観点を航空会社のJALと全日空の機内での約束事の違いを例にとり指摘され、命を守るという事に徹する大切さを力説された。

厚生労働省の平成24年の保育施設における事故報告では、18件の死亡事故が起きている。事故原因は何か、なぜ事故が起きてしまったのかを分析して改善し、チームで毎日の保育を繰り返していくとともに、保育を積み重ねていくことが良い保育に繋がる。

事故を防ぐためにやっておきたい事として、「お散歩マップ」を作成し危険個所の書き込みをする・園内の死角探しをする・うつぶせ寝をしない・0～2歳児はお昼寝中、3～5歳児は園外での保育に気をつけるなど、実際に起きた事故を例にとりながら危機管理対策について話された。

効果的な危機管理対策の実例として、学校給食のアレルギー対策で、赤いエプロンを着用する事で作業当番者の自覚を促すとともに、誤食を防いでいる事例が紹介された。食物アレルギーが増加している中で判り易く共有できる確認方法である。

また、3.11東日本大震災の石巻の門脇小学校の震災の様子を紹介され、日ごろの避難訓練を地震と津波のセットで行っていたことで迅速に高台に避難できたことが報告された。さらに、この近くにあった門脇保育所では、第1次避難場所が小学校になっていたが、すぐに裏山に逃げた事で、保育中の全園児が助かったことも話された。危機的状況の中でのとっさの判断（第六感）が多くの子どもの命を救った事例と言える。避難路とは別のルートで助かった宮城の女川保育所の話もあった。普段から、地域の状況を見てどう逃げたらよいかを考えておく事が必要だという事である。私は、門脇小学校の震災の検証記録映画を昨年見ており、生々しい状況を語っていた映像を思い出しながら猪熊さんの話に聞き入った。

地震の場合、最初の30秒で生死を分けると言われる。30秒で倒れない保育所である事が重要である。また、3日間の備蓄がある事、園外にいる時にもここにいたらどうすればよいかを考える事など震災対策を日頃から考えておく事の必要性についても述べられた。

子どもの育ちや命を守るために考えたい事として、東京の認証保育所の事も話された。元コンビニだったところを改修し開設した保育所である。車の交通量も多い道路の角地に立地し、保育所の横の道は坂道になっているため、裏側は半地下状態になっている。コンビニを営業していた頃に2回車が突っ込んだことがあるようだ。近所の人が心配しているような場所にある認証保育所である。その道路側で水遊びをしている子どもの姿を見かけ不安がよぎるとの事であった。

横浜は待機児童対策で、2012年に74ヶ所保育所を増やした。しかし、対策を進める中には、高架下の保育所や、店舗の2階にある保育所、オフィスを改修した保育所等もあり、子どもにとってとてもよい保育環境とは言えない状況がある。川崎も同様に、産業廃棄物置き場の隣に保育所があり、毎日のように埃や重機の音の中で生活をしている子どもたちがいる。こうした環境でも保護者は預かってもらえる事に満足していると言うが、預かってもらえればどこでも良いと言うのではいけない。待機児童対策はこれでよいのだろうかとの疑問を投げかけられた。

新しい制度では認定証が必要となり、親の働き方で長時間と短時間に分けられていく事になる。これが保育と言えるのかと言うことも指摘された。保育サービスなのか福祉なのか、子どもの立場でなく親が何時間働いているかで分けられる。子どもの福祉や子どもの権利から判断できるような法律にしないといけない。もっと子どものそばにいる人が声をあげていくべきである。保育が揺れ、保育のあり方が問われる今だからこそ死亡事故を0にしないといけない。「事故を起こしません」と言えるように、どこに行っても子どもの命が守られるように、普段からの保育を繰り返し、保育を積み重ねて行く事、子どもの最善の利益を守る事をしっかりやってほしいと熱い思いを話された。

猪熊さんの子どもの命を守るために、保育を取り巻く環境をより良くしたいという熱い思いと、様々な状況を見つめる冷静な洞察力からくる話は、保育を取り巻く状況が大きく変わろうとし、保育のあり方が問われる今だからこそ私たち保育関係者に強く響いてくるのだと思う。本当にあっという間に講演会が終わってしまった気がした。

講演を終え、「子どもの立場で考える保育施策や法律でなくてはならない事」「子どもの側にいるものが、声をあげていかないといけない事」をしっかり心に留めて保育をしなくてはならないと痛感した。そして、講師が具体例に挙げて語った危機管理の重要性は、緊急事態に遭遇した時、保育の専門職として子どもの命を守るという使命を確実に果たすための基本として常に自覚しておかねばならない事である。そうした保育士の責務を学生にしっかり伝えていかねばならないと再確認した次第である。

国際ボランティアを通しての保育学生の学びと成長 —ベトナム・ホーチミン市における児童福祉施設のボランティア活動報告—

保育科 野津 牧・原田 明美・山下 直樹・小川 絢子

はじめに

名古屋短期大学保育科の学生は、2008年度より、ベトナム民主共和国ホーチミン市の児童福祉施設におけるボランティア活動を継続している。参加学生は、2008年度3名、2009年度19名、2010年度79名、2011年度108名、そして2012年度は107名が参加している。5年間の延べ参加学生は316名となっており、2013年度も110名が参加を予定している。

大学の国際ボランティア活動参加者を比較すると、2011年度以降、単年度としては全国最大の参加規模である。また、2013年は日本とベトナムとの国交樹立40周年であり、本学の訪問活動は日越友好年事業として認定された。

今報告では、活動の概要紹介と第5回目の参加者にアンケートを取り、事前の取り組みも含めた国際ボランティア活動を通して、学生たちが保育学生としてどのように学び、以後の大学生活に生かしているのかをまとめた。

I. 活動の概要

1. サークルとしての国際ボランティア活動

国際ボランティア活動を奨励している大学は少なくない。朝日新聞出版の「大学ランキング2014」によれば、国際ボランティア活動参加者数上位の大学は4年生大学であり、上位大学の特徴は、①「国際ボランティア論」などの授業を受講し、国際ボランティア活動に参加すると2単位から4単位の単位認定をしていること、②参加した学生には上限を設定して大学から奨学金や旅費の補助制度があること、である。

名古屋短期大学保育科は、ベトナムのボランティア活動を学生の自主的なボランティアサークル活動として位置付けている。そのため、大学はサークルとして認定をしており、大学からの学生への支援は活動費用として学生会より年間3千円の補助のみ出ている。単位認定は行っていないし、学生への奨学金等の補助制度もない。

活動内容も、保育科としての特徴を生かして現地の児童福祉施設での子どもたちとの遊びを柱としている。

2. 事前活動

4月に2年生が説明会等でサークルへの勧誘を行い、まず運営委員会を発足させる。

本格的にサークルとして動き出すのは秋からで、大学祭の物資販売が事前活動の柱である。前年度に訪問した学生がホーチミン市ストリートチルドレン友の会に所属する年長の子どもたちが職業訓練として作った布製品を購入し、新1年生が大学祭で販売する。

大学祭後は、寄付金・寄付物品集めと訪問活動の準備である。寄付金・寄付物品は、訪問時に施設に直接、全額を届けるもので、大学祭の売り上げを含めて10万円以上を目標としている。寄付物品は、文房具、日用品である。寄付金・寄付物品共に、訪問学生が直接施設に届けるということで、寄付する学生の理解も得やすい方式である。

訪問活動の準備は、訪問先の施設で子どもたちと交流するためのもので、手遊びなどの子どもたちに披露するものと自由遊びの準備である。

3. 2012年度第5回訪問時の活動の概要

(1) 訪問日程及び訪問者数は、以下のとおりである。

第1グループ 2013年2月20日(水)～24日(日) 学生24名、教員1名

第2グループ 2013年3月17日(日)～21日(木) 学生17名、教員2名

第3グループ 2013年3月20日(水)～24日(日) 学生20名、教員1名

第4グループ 2013年3月24日(日)～28日(木) 学生22名、教員1名

第5グループ 2013年3月27日(水)～31日(日) 学生24名、教員1名

学生計107名、教員計6名、総参加者113名

各グループ共に4泊5日で、初日と最終日が移動日、中3日間で施設での子どもとの交流を中心として、観光コースを1か所設定している。

訪問中は、第1日目と最終日前日にミーティングを行い、第1日目は施設訪問時の活動の確認と出し物の練習、最終日前日は活動を終えての感想を出し合い、成果を確認している。

(2) 訪問施設

訪問する施設は、年度によって違うが、2012年度は以下の5施設を訪問した。①ホーチミン市ストリートチルドレン友の会(FFSC)保護施設・学校、②ホーチミン市第4区障がい児施設、③ツーズー(TUDU)病院、④特別支援学校、⑤元ストリートチルドレンが働いているレストラン「フーンライ」。

施設は、ツーズー病院のみ国立で、他の施設は個人やNGOなどが運営している。施設の選定や調整は、現地の旅行社の協力を得ながら、教員が主に行っている。

4. 訪問・交流活動

ベトナムには公立の施設も一部あるが、ほとんどはNGOが運営する民間の施設で、民間施設に対する日本のような国からの補助制度はない。

(1) ホーチミン市ストリートチルドレン友の会 (FFSC)

ベトナム人のソイ氏が、貧しい家庭の子どもたちの支援を開始し、現在はホーチミン市カトリック団結委員会に所属している NGO 団体である。ホーチミン市内の貧しい地域に非正規の8つの学校と1施設を運営している。また、職業訓練として縫製作業や学校に通うことができない低所得者の家庭の子どもに対する奨学金による就学支援もおこなっている。



FFSC での交流風景

国からの運営費補助はないため、すべて国内外の寄付によって賄われており、日本人によるものが大半を占めている。

FFSC 事務所にて説明を受けた後、ビントーセンターまたはビンチュウセンターを訪問した。子どもたちの歓迎の歌、学生の歌遊びを披露した後、子どもたちと折り紙などで交流した。

(2) 4区の障がい児教育施設

1989年、ホーチミン市第4区にあるお寺が開設した特別支援学校（認可外）と障がい児通園施設に近い施設である。知的障がい、聴覚障がいの子どもたちが、午前中は学習、午後はビーズ製品作りなどの軽作業をしている。

学生は、最初にグループに分かれて、軽作業に参加した後、歌と遊びで子どもたちと交流した。



子どもたちとエビカニクスを踊った

(3) ツーズー (TUDU) 病院

ツーズー病院は、病床数600のベトナム最大の国立の産婦人科病院である。病院内に枯葉剤の被害を受けた子どもを保護する施設、60名定員の「平和村」があり、ベトちゃん、ドクちゃんが育った病院として有名である。現在、平和村にいる子どもは、枯葉剤の被害者の第2世代から第3世代に入っている。

成人したドクさんが施設のスタッフとして働いており、学生たちを出迎えてくれた。平和村の所長である医師から説明を受けた後、資料室と病棟を見学した。



ドクさんとの記念写真

(4) 特別支援学校

ホーチミン市最大のカトリック教会であるサイゴン大聖堂・聖母マリア教会が運営する私立の特別支援学校（ろう学校）で、市内や近隣市町村から聴覚障がい児が通っている。

訪問時は、中学部と幼稚園の子どもとゲームや折り紙で交流した。



聴覚障害の子どもたちと交流

(5) フーンライ

フーンライは、ホーチミン市内にあり、日本人の白井尋さんがオーナーのベトナムの家庭料理を提供するレストランである。元ストリートチルドレンや施設出身者を雇用し、職業訓練として学ばせ、育てた青年は50名を超えている。また、児童福祉施設へ食材の寄付などもおこなっており、毎回訪問している。

(6) 学びと交流の活動

クチトンネルと戦争証跡博物館は、平和について学ぶ企画として訪問している。

1) クチトンネル

ベトナムは、第二次世界戦後、フランスと戦い勝利し、民族の独立を実現したが、南北に分断され、南半分はフランスに変わりアメリカが介入し、実質的に南ベトナムを統治した。ベトナムの人たちは、再び民族の独立を求めてアメリカ軍と戦い、民衆の力で勝利した国である。

クチ地区は、ベトナム戦争当時、ホーチミン市（当時はサイゴン）近郊の民族解放戦線の拠点の一つであった。アメリカ軍は、空から枯葉剤を撒き、大量の軍隊を投入したが、解放戦線はジャングルに地下トンネルを張り巡らし戦った。現在は、トンネルのあった地域が観光コースとなっている。学生は、実際にトンネルの中に入り、当時の生活の一部を体験した。



クチトンネルにて

2) 戦争証跡博物館

ベトナムは、フランスの植民地、そしてアメリカの支配が長く続き、人民が粘り強く戦い、独立を勝ち取った国である。開放の過程では、ベトナム人だけで200万人が犠牲になったといわれている。博物館は、ベトナム戦争を記念して作られたもので、戦争で実際に使用された戦車や武器の展示や枯葉剤の被害に遭った二重胎児の標本などを見学し、改めて戦争の残虐さを学んだ。

3) メコンデルタツアー

毎回の訪問では、唯一の観光であり、ベトナムの庶民の生活にふれる機会として旅行の最終日に設

定している。

メコン川は、ラオス、カンボジア、そしてベトナムの3つの国を流れており、河口付近はいくつかの中州ができています。訪問するミトーは、河口から60キロほど上った地点にある街で、対岸の中州は、やしやガジュマルの木が生い茂るジャングルになっている。ツアーは、ジャングルの中の小川を小舟で移動したり、南国のくだものやエレファント・イヤー・フィッシュという魚料理を食べたりする。また、ニシキヘビを巻いたり、ミツバチの巣を持ったりする体験もおこない、旅行を締めくくっている。



メコンデルタでは小舟に乗った

II. 学生アンケートの結果から

今回、参加した学生に、参加の動機や学んだこと、今後の大学生活に活動をどのように生かしているのかなどについて、アンケートを実施した。回収率は、100%である。

1. 参加学生の参加の動機

107人中、入学前に国際ボランティア活動があることを知っていた学生は27名(25.2%)であり、多くの学生は大学入学後に先輩たちの説明を聞きサークルの存在を知っている。

表1) チーム・ベトナムについての理解(複数回答)

1. 大学のホームページで見た	2. オープンキャンパスで知った	3. 先輩から聞いていた	4. 高校の名短説明会で知った
8	17	2	9

また、応募した動機は、「(国際)ボランティアに興味があったから」が最も多く76名が回答しており、次いで「海外旅行に行きたかった」58名、「説明会に参加して興味を持った」50名と多かった。また、「親から勧められた」19名は、入学式当日保護者向けガイダンスの中で担当教員がベトナムの国際ボランティアについて説明しており、保護者自身が興味を持ち学生に勧めたものである。

表2) 国際ボランティア参加の動機等(複数回答)

1. (国際)ボランティアに興味があった	2. ベトナムに興味があった	3. 海外旅行に行きたかった	4. 説明会に参加して興味を持った	5. 友だちに誘われた	6. 先輩から勧められた	7. 親から勧められた	8. 就職に有利だと思った
76	39	58	50	8	13	19	14

2. ベトナムについての理解

ベトナムについての理解は、ベトナム戦争があったことやベトちゃん、ドクちゃんについては多く

の学生が訪問前から知っている。

表 3) 入学前に以下のことを知っていましたか

1. ベトナム戦争があったこと	2. ベトちゃん、ドクちゃん	3. 社会主義の国であること
103	93	11

3. 費用の負担

旅行の参加費用は、航空料金、ホテル費用（朝食付き）、施設訪問と観光費用、昼食3回、夕食1回を含めて、約9万円である。前述のとおり大学からの補助制度が無いいため、全て参加者負担となっている。

費用の捻出としては、52名（48.6%）の学生が全額アルバイトなどでお金を貯めて参加している。費用の半分程度を自分で出した学生も多く、「必死でバイトをしてお金を貯めた」という学生も多い。費用面で努力していることも、参加意欲の向上にプラスにつながっていると思われる。

表 4) 参加費用はどのように確保しましたか

1. 全額自分で用意した	2. 一部、保護者・親族が負担	3. 全額、保護者・親族が負担
52	41	14

4. 事前活動

(1) グループ別活動

サークルは、全体としてのミーティングも数回行っているが、現地での活動も含めて参加グループ別単位で企画準備や活動を行っている。

グループ別の活動で「よかったと思うこと」としては、第1位が「今まで知らなかった学生と出会えた」の85名で、次いで「子どもの接し方など他学生から刺激を受けた」65名、「旅行への問題意識が高まった」41名となっている。意欲的な学生が多いことがうかがえる。

表 5) グループ別の行動・企画準備等について、よかったと思うこと

（現地での活動も含む・複数回答可）

1. 旅行への問題意識が高まった	2. 今まで知らなかった学生と出会えた	3. 子どもの接し方など他学生から刺激を受けた
41	85	65

(2) 物資販売・募金・寄付物品集めの活動

サークルの特徴の一つとして、訪問施設の一つである FFSC の子どもたちが作成した布製品の販売を大学祭においておこなうと共に、学内での募金や寄付物品集めをおこなっている。ベトナムは、国からの補助制度が整っていないことから、寄付や物資の提供は貴重である。

表6) 大学祭における物資販売・学内での募金や寄付物品集めの活動について(4以外は複数回答可)

1. ベトナムの子どもたちに貢献できると思った	2. 旅行への問題意識が高まった	3. 多くの人が物資購入で協力してくれてよかった	4. 参加しなかった(できなかった)
86	21	38	8

(3) ベトナム人留学生による説明会について

桜花学園大学大学院に在学中のベトナム人留学生ニューさんによるベトナムについての説明会を各グループ単位で開催した。内容は、ベトナムの歴史や文化、国民性、ホーチミン市の案内などである。彼女はホーチミン市出身であることから、生の現地情報だけでなく、人柄に触れることで旅行に対する安心感が出たものと思われる。

表7) ニューさんの説明会について

1. ベトナムに興味を持った	2. ベトナム人の人柄が知れてよかった	3. あまり参考にならなかった	4. 参加しなかった
92	31	0	7

(4) ベトナム人留学生によるベトナム語講座について

ベトナム人留学生ニューさんに協力してもらい、ベトナム語の初級講座を5回開催した。実際の訪問では、あいさつ、お礼などの基礎的な単語を話す程度であったが、ボランティア参加の意欲は高まったようである。

表8) ニューさんのベトナム語講座について

1. ベトナムに興味を持った	2. 子どもとの交流でベトナム語が少し使えた	3. 子どもとの交流に積極性が出たと思う	4. 参加しなかった
72	15	20	30

5. 今回のボランティア活動で学ぶことができたこと

今回のボランティア活動で学ぶことができたと思う点については、第1位が「子どもたちとの交流の基礎は笑顔であること」の99名、第2位が「国際的な(広い)視野で見ることの大切さ」の88名、第3位が「自分自身が子どものことが好きだということ」の79名、第4位が「チームワークの大切さ」の64名である。

ベトナムのボランティア活動は、保育実技を高めるためというよりも、保育の原点である子どもたちと笑顔で接することの大切さと、グローバルな視点を身に着けることを目的としているが、その目標を学生自身が受け止めているという結果が出た。

表9) 今回のボランティア活動で学ぶことができたと思う点について(複数可)

1. 国際的な(広い)視野で見ることの大切さ	2. 自分自身が子どものことが好きだということ	3. 子どもたちとの交流の基礎は笑顔であること	4. チームワークの大切さ
88	79	99	64

6. 今回のボランティア経験を通して感じたこと

参加した学生が今回のボランティア経験を通して保育の道に進んだことについてどのように思ったかについては、86.0%の92名が「よかった」と回答している。保育に対する強い思いを持った学生は、就職活動にも力を発揮することにつながる。

表 10) 今回のボランティア経験を通して保育の道に進んでよかったと思いますか（複数可）

1. 保育の道にすすんでよかったと思った	2. どちらかといえばそう思う	3. どちらともいえない	4. そうは思わない
92	14	2	0

7. ボランティア活動を今後の大学生活にどのように活かすか

今回のボランティア活動を今後の大学生活にどのように活かすかという質問に対して、第1位は「いろいろな活動にチャレンジしたい」85名である、第2位は「これからもボランティア活動をしたい」77名である、第3位は「しっかり保育の勉強をしたい」74名である。

表 11) 今回のボランティア活動を今後の大学生活にどのように活かそうと思いますか（複数可）

1. しっかり保育の勉強をしたい	2. これからもボランティア活動をしたい	3. いろいろな活動にチャレンジしたい
74	77	85

8. このボランティア活動で何を学んだか

代表的な感想は、次の感想文に表れている。

「私はベトナム研修に行くまで、ベトナムという国がどんな国かということを知りませんでした。しかし、今回実際にベトナムに行ってみて、バイクが多いこと、ベトナム戦争のこと、そしていまでも枯れ葉剤の被害に苦しむ人がたくさんいるということを知りました。ツーズー病院に見学に行き、実際に枯れ葉剤の影響を受けた子どもや、胎児を見て、思わず目を背けたくなくなってしまう場面もありました。しかし、日本は直接ではなくても加害者であり、その事実を受け止め、これから先も忘れずにはいかななくてはいけないと思いました。また歴史上で色々なことがあったにも関わらず、ベトナムの人は日本人である私たちにとっても優しいということに驚きました。施設を訪問してたくさん子どもたちと関わったのが1番の思い出です。言葉が通じなくても、踊りやおりがみでの交流ができたのは、ほんとうに良い思い出になりました。今回のベトナム研修では、ほんとに色々なことに触れ、体験できてとても良い経験となり、ベトナムに行けて本当によかったと思いました。今回学んだたくさんのことを忘れずに行きたいと思います。」

やはり、現地に実際に訪れ、自分の体、目、耳、皮膚など全身で感じた感動は生涯忘れないものになっている。特に、ツーズー病院で見たホルマリン漬けの「胎児」には、声が出ないほどの衝撃を受けたが、どの学生も現実を受け止めなければと目をそむけず真摯な思いでまた無言で見つめていた姿が印象的だった。それは、戦争証跡博物館見学やクチトンネルの体験と重ねて「ベトナム戦争」への

理解、「戦争に勝つために人が人に対してしたことの残酷さ」への思いが深まったものとする。

そして、どの学生も異口同音にアンケートで述べていたのは、「子どもの笑顔は世界共通と言うことが分かった。」「言葉は通じなくても、笑顔や身振りで通じ、分かりあえることがわかった。」「ベトナムの子どもたちは決して恵まれた環境ではないが、その笑顔の明るさは、私たちを癒しエネルギーをもらい、反対に日本の子どもたちは恵まれた環境であるのにいじめや塾通いで暗い面を感じる」など、ベトナムでは、「ベットでは薄いゴザだけで寝ている」、「暑くても扇風機しかない」「おもちゃや教科書も満足に無い」貧困な状況での子どもたちが、返って笑顔があふれていることに衝撃を受けていた。

ある学生は次のように書いている。

「聴覚障害の子どもと関わるのが初めてで、接し方に戸惑う部分があったのですが、折り紙と一緒に遊んだ女の子がすごく素敵な笑顔で私に接してくれました。言葉は通じないし手話も分からなかったけど、身振り手振りでお互いに気持ちを通じ合わせ、会話が出来たように思います。簡単な折り紙しか出来なかったけど、すごく喜んでくれて最後まで笑顔で送ってくれました。笑顔で接すれば相手も笑顔になってくれる。聴覚障害についての知識は乏しいですが、自分の接し方がもろ相手に出るといふことを感じました。日本と違う部分もたくさんあると感じましたが、人と人が接する上で必要なのは、言葉ではないんだなあと思いました。」

「障害児の学校へ行った時、中学生の女の子と出会いました。その子どもと一緒に折り紙をして、とても仲良くなりました。手話で“I LOVE YOU”と言ってくれました。その後、何か手話で言ったのですが分からず、隣にいた学校の先生が通訳してくれましたが、ベトナム語だったので分からなかったので、ガイドさんが通訳してくれました。その女の子は“あなたと声で話したかった”と言ってくれました。その言葉を聞いた時、このような子どものために自分にできることをしてあげたいと強く思いました。」

「実習や日本でのボランティアで子どもと関わる時は、声かけをどうしようとか周りの人の保育を気にして自分が保育士に向いているのか悩んだりしていた。しかしベトナムでは、言葉が通じなくても笑顔やジェスチャーで何も気にすることなく素で楽しんでた。日本では色々と考えすぎて子どもと関わるのが億劫な時もあったが、子どもが好きで、子どもの笑顔が好きで、子どもと遊ぶ事が好きなんだという原点に戻れた気がした。」

そして自分のおかれた環境を省みて、日本での生活への感謝とか、幸せとは何か、自分はもっと頑張らなければ、自分の出来ることは何だろうと考える学生も多かった。

「ベトナムの人は自分に素直に自信があって、人と関わる事が好きな人が多いと感じました。そんな大人を見て、育っているからこそ、子ども達もフレンドリーで、純粋な目をしている子どもが多いと思いました。」

「ベトナムの人たちの人柄に感動したし、仕事を楽しんでいることに尊敬した。日本人や日本がどれだけぜいたくで自分の普段の生活がどれだけ甘えたものか考えさせられた。ボランティアとして行ったけど、何が出来たか分からないし、中途半端さを感じた。」

おわりに

名古屋短期大学保育科では、ほとんどの学生が2年間で保育の道に巣立っていく。ベトナムの訪問活動を終わるとすぐに2年生になり、保育所実習と教育実習の間に7月から公務員採用試験があるし、9月以降は私立の就職活動が本格化する。

私立園も含めて意欲的な学生、充実した大学生活を過ごしている学生は就職活動でも順調に進みやすい。今回の活動では、保育の道を選んだ事の充実感や「絶対保育者になりたい」と保育への意欲を高めた学生も多かった。

また、この経験をきっかけに国際ボランティアに興味を持ち、もっと深く関わりたい見識を広めたと思う学生もいた。

5日間の経験であったが、参加した学生は、初めてのベトナムでの体験を純粋な目で見えて考えて、人間として、保育者として成長できたと実感できた。

なお、2012年度の訪問活動は保育コンソーシアムあいちの補助事業として実施した。

カナダにおける保育・子育て資料センターと保育者現任研修について —ウエストコーストチャイルドケアリソースセンターを訪問して—

保育学部 田端 智美

2013年9月12～19日に「カナダ（バンクーバー市及びバーナビー市）における保護者支援プログラム・現任研修の調査研究および保育園の視察」の調査研究に参加した。保護者支援プログラム「ノーバディズパーフェクト」¹⁾の調査、ブリティッシュコロンビア大学大学院視察、バンクーバー及びバーナビー市内の保育施設の視察等を行ってきたが、ここでは、バンクーバー市における保育者の現任研修の場でもあるウエストコーストチャイルドケアリソースセンターについて報告する。

ウエストコーストチャイルドケアリソースセンター Westcoast Child Care Resource Center（以下WCRCと略す）は、バンクーバー市西部にある保育・子育て資料センターである。バンクーバー市が所属するブリティッシュコロンビア州にはChild Care Resource & Referral（以下CCRRCと略す：保育・子育て資料紹介所いわゆる日本でいう子育て支援ひろば・センター）が400以上ある。CCRRCに共通することであるが、保護者支援プログラム（ノーバディズパーフェクト等）・ドロップイン（一時預かり）・保育所に入る情報・図書やおもちゃの貸出等を提供することにより地域の保育・子育てを助ける役割を果たしている。WCRCは、それに加え、保育者のための施設でもあり、求人・資料の貸し出し・保育者研修会等も開かれており、バンクーバー市内のCCRRCのまとめ役も果たしている。

今回の訪問の質疑応答に答えてくださったLinda Wheeler（リンダ ウィーラー）はWCRCの情報アドバイザーである。リンダさんは質疑応答の際、カナダは「ダイバーシティ（多様性）を受け入れる国家」であることを強調していた。ダイバーシティについては、今回視察したどの保育施設、大学でも強調していた言葉である。ここでは保育者の研修に焦点を当て、多様性を受け入れたバンクーバーの保育について、WCRCの視察・資料提供・質疑応答を踏まえて報告する。



図1：センターの外観

ウエストコーストチャイルドケアリソースセンター
住所：2772 East Broadway, Vancouver BC V5M 1Y8
<http://www.wstcoast.org/>

1. WCRC について

WCRC は昨年 25 周年を迎えた。リンダさんは 1987 年の設立当初に Early Childhood Educator (ECE と略す：カナダの保育資格者) がカフェに集まって、バンクーバーには今何が必要か話し合ったそうである。その際、DayCare (保育所)・Preschool (幼稚園) の情報が一か所に行けばすべてが集まっているまとめ役が必要だということになり、保育者・家族のために、このセンターを開設したそうである。

リンダさんはセンターの任務について、WCRC のパンフレットを用いて、次の 8 項目を説明した。

- ① 使命として、地域や行政と連携して情報提供を行う。また保育・子育てについての研修を家族・保育者に提供する。
- ② 毎年 20000 人以上の家族と保育者の質問に答えるようにしている。
- ③ 毎年 5000 人以上の家族に様々な言語で情報提供を行うようにしている。また、家族向けに子育てに関する研修を行う。
- ④ 保育・子育てに関する図書の貸し出しを行う。図書館には、15000 冊以上の蔵書がある。その他に教材・スポーツ用具・楽器等もある。
- ⑤ 保育者の研修プログラムを行う。子どもの発達や行動について・多様性や異文化理解・2 歳～5 歳のいじめ防止プログラム・英語以外の言葉の育児トレーニング等の科目がある。
- ⑥ 保育者の求人情報の提供また派遣を行う。
- ⑦ 出張サポートを行う。研修・家庭訪問・ドロップイン・ネットワーク (友達) 作り・おもちゃ・育児用品レンタル等を出張して行っている。
- ⑧ 移動図書館を行う。(本・ビデオ・おもちゃ・育児用品)

ここで補足説明をすると、③については、英語・中国語 (広東語・普通語)・韓国語・スペイン語・ベトナム語、日本語など 15 の言語での情報提供・研修が行われているとのことである。公用語の英語ではなく、母国語 (いわゆる家族が話す言葉) で情報提供を行うことにより、保護者も子どもも安心感を得るであろう。今回訪問した際も、インドのサリーを着た親子がヒンドゥ語で保育所探しの件で情報提供を受けていた。WCRC の活動は、ダイバーシティ (多様性) を実践している場でもある。

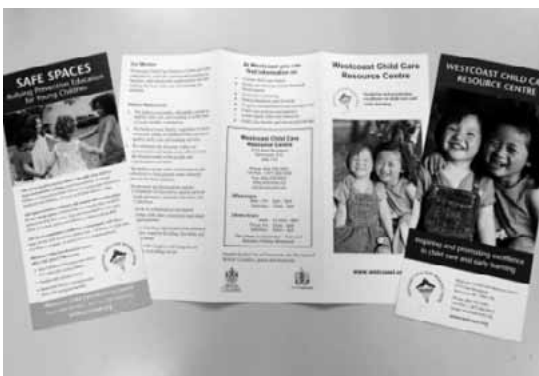


図 2 : WCRC のパンフレット

パンフレットは英語・中国語 (広東語・普通語)・韓国語・スペイン語・ベトナム語、日本語など 15 の言語に訳されている。

英語版

http://www.wstcoast.org/about/westcoast_broch_nov08.pdf

日本語版

[http://www.wstcoast.org/pdf/multilingual/ChoosingChildCare_](http://www.wstcoast.org/pdf/multilingual/ChoosingChildCare_Japanese)

Japanese

2. 図書館について

WCRCの図書館は、ブリティッシュコロンビア州の中で最も広範囲の保育・子育てに関する図書を所蔵している。保育者はもとより、保育を学ぶ学生・家族・保育に興味を持っているすべての人が借りに来ることができる。例えば、祖父母や高校生のベビーシッター、Nanny（住み込みの乳母）が借りに来ることもあるという。水曜日は8時まで開館しており、保育者が仕事を終えてから借りに来ることができる。ここには、保育に関する図書（15000冊以上）のほか、雑誌・定期刊行物・ビデオ・パネルシアター・ポスター・楽器・スポーツ用具・教材（遊びや学びのキット）があり、すべて借りることができる。保育に関する図書の分野として、様々な言語の絵本・子どもの発達・保育政策や調査・カリキュラム・施設や遊び場のデザイン・健康・保育所経営・親学や家族・多様性・移民の子どもの保育と資料等がある。

図書館には、様々な言語の絵本が置いてあり、日本語の絵本のコーナーもあった。また、子どもが多様性を感じることができるように、様々な国の習慣を紹介している。例えば、『The carrot seed』²⁾という1945年に出版された絵本がある。この本はにんじんの種に根気よく水やりをした少年の話であり、カナダでは1945年以来再版されているよく知られた絵本である。この絵本の内容を、インド人の少年を主人公にして、スタッフが手作りしたパネルシアターがあった。カナダの絵本は白人の子どもを主人公にした絵本が多い。現在のカナダは移民が多く様々な人種がいる。主人公をインド人にする事で、特定の社会でつくられた価値観を子どもに押し付けることなく、絵本で理解する目的があるという。



図3：日本語の絵本コーナー

様々な言語の絵本コーナーがある。英語・中国語（広東語・普通語）・韓国語・スペイン語・ベトナム語、ペルシャ語、ヒンドゥ語、パンジャブ語、フランス語、アラブ語、タガログ語、ロシア語、クロアチア語、日本語等の絵本コーナーがある。



図4：手作りのパネルシアター棚

カナダでは、日本で言うパネルシアターのことをFeltboard theater（フェルトボードシアター）という。フランネルボードに、フェルトを貼りつけて使用している。WCRCでは300以上所蔵している。ビニールに入れハンガー掛けに陳列してある。ほとんどがスタッフ手作りのものである。



図5：スタッフ手作りのおもちゃ

木製のスプーンに、雑誌のグラビア写真をニスで貼りつけたものである。スプーンには袋状の布が巻きつけてあり、パペットになっている。保育者が簡単に作ることでできる教材例として掲示してあった。



図6：『The carrot seed』絵本とパネルシアター

カナダでよく知れた絵本『The carrot seed』のパネルシアター。インド人の子どもを主人公にした、スタッフ手作りのパネルシアターである。スタッフが描いた絵をもとにカラーコピーを掛け、パウチ加工してある。裏面にマジックテープが付いている。これは量産できる手法である。



図7：カナダの伝承民話のパネルシアター

カナダでは、伝承民話を保育の中に取り入れ、子どものころからカナダ人としてのアイデンティティを育てる。このパネルシアターはカナダ先住民のパネルシアターである。渡りカラスが川で鮭を先導する。鮭は陸に上がって大地の使者の熊に変身する。熊は、その後長老になって、海の守り神シャチとなる。カナダで見られるトーテム（祖先神）ポールはこのような伝承民話を示した塔である。



図8：保育教材としての世界の靴

世界の国の靴が置いてある。日本のげたのほか、カナダのモカシン、オランダのサボ、イスラム諸国のバブーシュ、手編み毛糸の靴、運動靴など様々な靴が遊び道具として置いてある。子どもがこれを履いて遊び、多様性を知る。その他に世界の楽器、服（布）、人形などが置いてあった。

3. 保育者の研修について

バンクーバーの所属するブリティッシュコロンビア州では、ECEは専門性を高めるために現任研修として5年ごと40時間の研修が必要とされている。この研修を受けなければ、ECEの資格を更新することはできない。WCRCでは現任のECEを対象とした研修を行っている。スキルアップのための造形、音楽、遊びのプログラムのほか、幼保小連携・若手保育者の燃え尽き症候群対策などの講座が用意されている。日本の現任研修と共通する部分もあるが、それ以上に発展的なプログラムが用意され、その充実ぶりには目を見張るものがあった。

以下、10月～12月に提供する10プログラム³⁾の紹介を行う。

- ① 「保育教材を作ろう：保育・子育てにおけるフェルトの効用」2時間 ワークショップ形式
40ドル
- ② 「元気にあそぼう：晴れた日と雨の日の屋外あそび&子どもヨガ（猫・橋・木）」4時間トレーニング形式 65ドル
- ③ 「感覚と感性：社会と感情の発達を理解する」7時間 ミニ会議形式 65ドル
- ④ 「保育環境における信頼できる大人とは」4時間×5日＝20時間のコース形式
- ⑤ 「アートの時間」ワークショップ形式 2時間 ワークショップ形式 35ドル
- ⑥ 「子どものデジタル世界を育てる」4時間 講義形式 65ドル
- ⑦ 「ウールで不思議な絵を描こう」4時間 ワークショップ形式 70ドル
- ⑧ 「読み書きゲーム」ワークショップ形式 2時間 ワークショップ形式 35ドル
- ⑨ 「保育環境における信頼できる大人とは」2日 指導者養成講座
- ⑩ 「社会スキルの発達：赤ちゃんと幼児のいじめにおけるサイン」トレーニング形式 4時間
65ドル

ここでは、①の内容の詳細を紹介する。

「保育教材を作ろう：保育子育てにおけるフェルトの効用」の講師はChristine Moore（クリスティンムーア）である。彼女は20年間ECEとして、保育士・幼稚園教師（主任）を経験し、現在はバンクーバーのECEのリーダーシップを取るべく研修会の講師をしたり、ウェブ上での情報を提供⁴⁾したりしている。

カナダでは、日本で言うパネルシアターのことをフェルトボードシアターという。日本のパネルシアターは、トイクロスやパネル布を張った板に、マジックテープをつけたフェルトやPペーパーを貼ることが多い。カナダの場合、起毛したフランネルを張った板に、フェルトを貼る場合が多い。日本ではパネルシアターに使うパーツとして、Pペーパーに絵の具を使って絵を描くことが多いが、カナダではパーツとしてフェルトを切るだけで形取ったものが多い。目や口を描く場合は布用ペンを使っていることが多い。中には、修正液で白い線を描く場合もある。パーツを簡単に作ることができるので、保育者がより多くの機会に使っている。このフェルトボードシアターは、教会の日曜学校で子どもに

聖書を語るときに使われることが多かったそうである。現代の保育の場では、iPad や DVD・CD などのデジタル機器も使われているが、昔ながらのアナログ的なフェルトボードシアターは、今の時代だからこそ必要な視覚的に優しい教材である。

この研修では、パネルシアターの効用について学ぶ。効用として、以下の8つをあげる。

- ① 視覚的—空間認知・色の認知
- ② 触覚的—やわらかい感触
- ③ 手を動かす—子どもが手を使って動かす
- ④ 聴覚的—聴く力
- ⑤ 言語的—話す力
- ⑥ 数学的—パターンニング・配列・数
- ⑦ 精神的—お話の面白さ・感情
- ⑧ 想像力—音楽・演劇・美術
- ⑨ 衛生的—耐久性・安価

研修では、日々の保育に使えるフェルトボードシアターを実際に作る。フェルトボードシアターを使うことで Storytelling（素話）ではなく、視覚的に物語を語り、楽しさを伝える実践を学ぶ。ここでは『Five Little Ducks』⁵⁾ という絵本の内容を、歌と手遊びを交えて、子どもを楽しませる技術を磨く。

筆者はこの講座を実際に受けていないが、WCRC の図書館に所蔵されているパネルシアターをもとに、日本の保育で使えるように訳詞した歌・手遊び・パネルシアターを紹介する。

材料は日本で購入できるもので構成した。フランネルは、日本ではネル布（綿100%）として手芸店で購入できる。1m 400円程度と安価である。ネル布を、スプレーのりを用いて段ボールに貼り付けボードとした。スプレーのりがない場合はぬるま湯で研いだ木工用ボンドを刷毛でぬってもよい。ボードには、フェルトで形取ったものを貼り付けて使う。起毛したネル布にフェルトが張り付く。簡単に取り外すことができるので、子どもも安易に取り扱うことができる。布製ペンは日本でも購入が可能であるので、色に合わせて揃えるとよい。油性ペンよりもすべりがよく布に描く場合は扱いやすい。日本で購入できる布製ペンは150円程度である。詳細は次頁に掲載する。

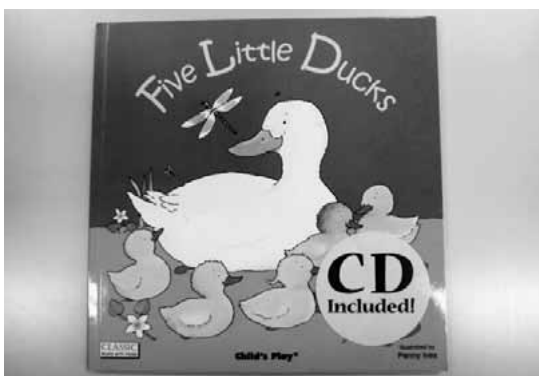


図9：『Five Little Ducks』の絵本

筆者がカナダで購入した『Five Little Ducks』の絵本。たくさんの作家が作画している人気の古典絵本である。また学芸会などで子どもたちが演じる人気の演目でもある。

カナダに学ぶ
簡単!!

FIVE LITTLE DUCKS (5ひきのあひるさん)

フェルトボードシアターと手遊び

カナダのフェルトボードシアターを紹介します。フェルトを用いて簡単につくることができます。歌いながら指で数を確認しましょう。歌と手遊びは元気よく。あひるの鳴き声は大きな声で。子どもと一緒に声をそろえて歌いましょう。

材料 (日本で購入できるものでアレンジした)

段ボール：厚口 (40 × 60cm 2枚) ネル布：白 (70cm 幅 90cm)

のり：スプレーのり (55タイプ) を使用

フェルト：薄い黄・黄・白・茶・桃・薄い緑・濃い緑・黄緑

布用ペン：黒 木工用ボンド

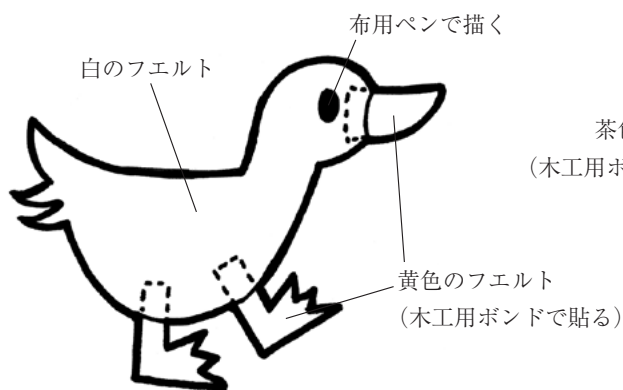


図10：材料

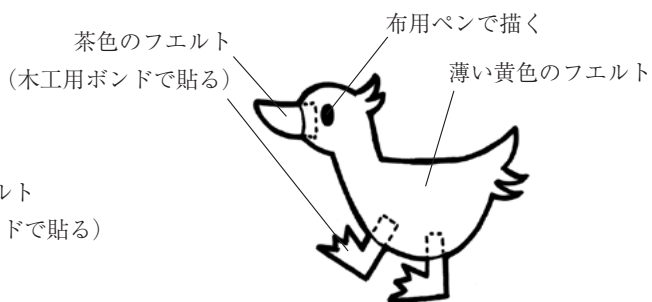


図11 カナダで購入した布用絵の具 (左)
日本で購入した布用ペン (右)

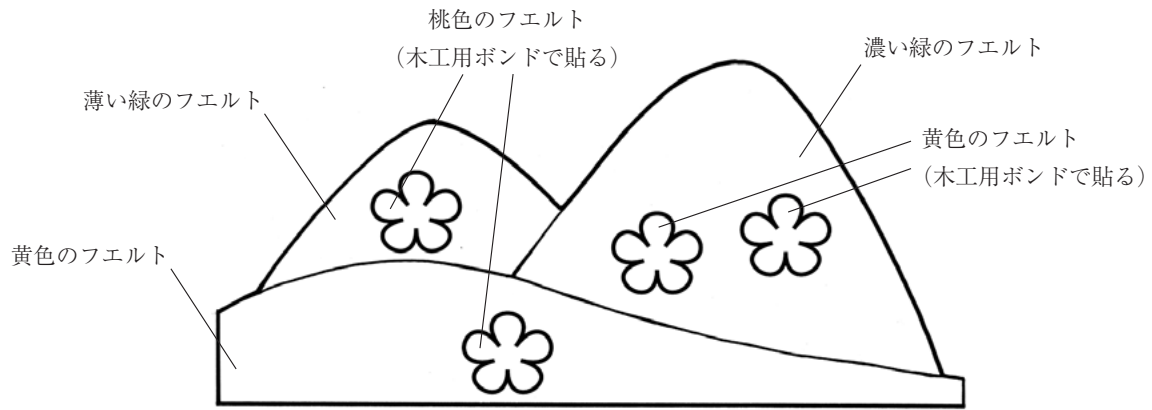
型紙



おかあさんあひる
(400%に拡大)



子どもあひる 5匹
(400%に拡大)



おやま (400%に拡大)

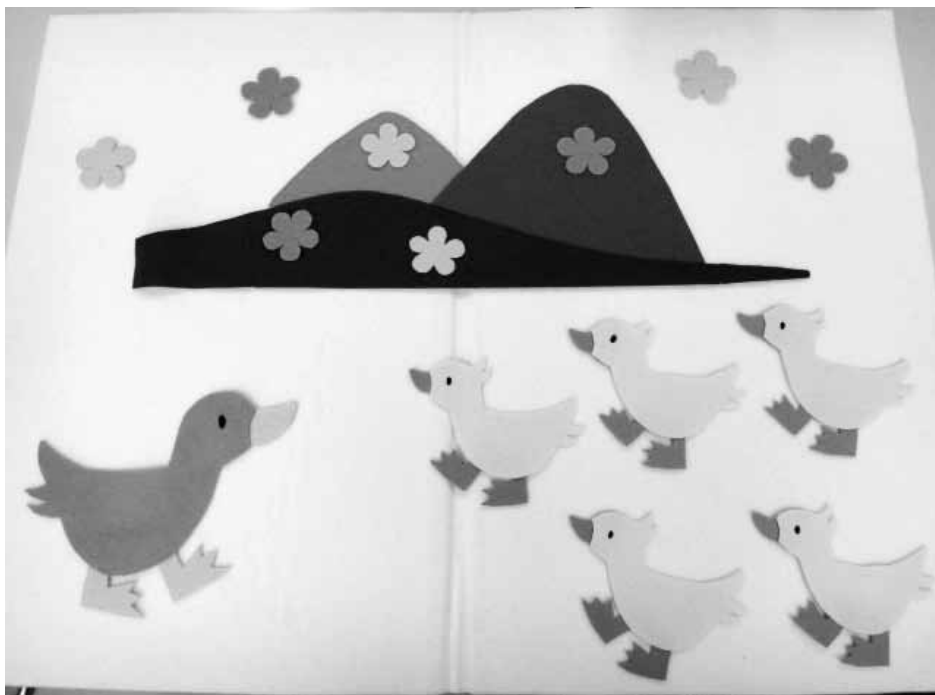


図 12：完成したフェルトボードシアター

フェルトボードシアターの作り方



①間隔を 1cm ほどあけて段ボール 2 枚を置き、ガムテープを用いて繋げる。



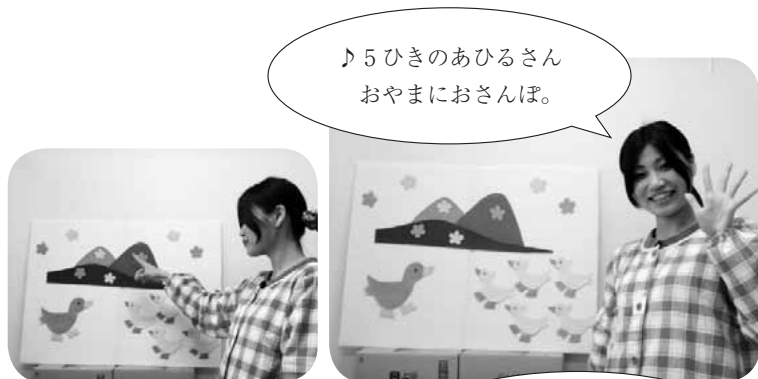
②スプレーのりを用いてネル布を段ボールに貼り付ける。しわができないように定規を用いて、空気を抜くとよい。



③裏面は折り返して、ガムテープで貼る。

フェルトボードシアター進行

①



5匹の子どもあひるさんが今日は
遠足に出かけるよ。
おやまのむこうには何があるかな？
では、いってきます!!
皆も言ってみよう。
「いってきます!!」



♪ (1番を手遊びしながら歌う)
5ひきのあひるさん
おやまにおさんぽ
おかあさんあひる
クワックワックワッ
4ひきだけおかえり♪

②



(1ひきの子どもあひるをはずす)
あー楽しかった。あれれ？
子どもあひる、4ひきになったね。
今度は4ひきの子どもあひるさんが
おやまにおさんぽに行くよ。
では、いってきます!!
「いってきます!!」



♪ (2番を手遊びしながら歌う)
* 3～5番くりかえし。

③



♪おかあさんあひるは
悲しんで～



♪5ひき なかよく
おかえり♪

あれれ？

子どもあひるさん、みんないなくなっちゃたね。

おかあさんあひるはさみしくなって泣いてしまいました。

(♪6番を手遊びしながら歌う)

おかあさんあひるは悲しんで

おやまにおさんぽ

おかあさんあひる

クワックワックワッ

5ひきなかよくおかえり♪

やったー！みんなかえってきたね。

子どもあひるさん、おさんぽ楽しかったな？

今度はおかあさんあひるもいっしょにいこうね。おしまい。

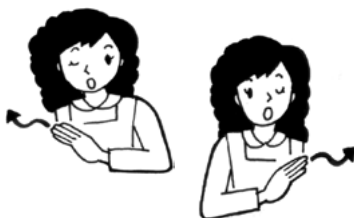
歌と手遊び

①



♪5ひきのあひるさん
(子どもあひるの数を示す)

②



♪おやまのむこうにおさんぽ
(山を越えるように手を動かす)

③



♪おかあさんあひる
クワックワックワッ (あひるの口のように手をパクパクする)

④



♪4ひきだけ おかえり
(子どもあひるの数を示す)

* 2～6番くりかえし(子どもあひるの数を減らしていく)

♪ 「5ひきのあひるさん」の楽譜

5ひきのあひるさん

アメリカ民謡
訳詞：田端智美

Five lit-tle ducks went out one day o-ver the hill and far a-way. Mo ther
ご ひー き の あひるさん お やー ま に お さんぽ。お か

duck said "Quack quack quack quack quack" But on-ly four-lit-tle ducks came back
あ さん あーひる クワックワックワッー よんひきだーけー おーかえり

Five Little Ducks (英語歌詞)

1. Five little ducks Went out one day
Over the hill and far away Mother duck said
"Quack, quack, quack, quack."
But only four little ducks came back
2. Four little ducks Went out one day
Over the hill and far away Mother duck said
"Quack, quack, quack, quack."
But only three little ducks came back
3. Three little ducks Went out one day
Over the hill and far away Mother duck said
"Quack, quack, quack, quack."
But only two little ducks came back
4. Two little ducks Went out one day
Over the hill and far away Mother duck said
"Quack, quack, quack, quack."
But only one little duck came back
5. One little duck Went out one day
Over the hill and far away Mother duck said
"Quack, quack, quack, quack."
But none of the five little ducks came back
6. Sad mother duck Went out one day
Over the hill and far away The sad mother duck
said "Quack, quack, quack."
And all of the five little ducks came back

5ひきのあひるさん (日本語訳詞)

1. 5ひきのあひるさん おやまにおさんぽ
おかあさんあひるクワックワックワッー
4ひきだけ おかえり
2. 4ひきのあひるさん おやまにおさんぽ
おかあさんあひるクワックワックワッー
3ひきだけ おかえり
3. 3ひきのあひるさん おやまにおさんぽ
おかあさんあひるクワックワックワッー
2ひきだけ おかえり
4. 2ひきのあひるさん おやまにおさんぽ
おかあさんあひるクワックワックワッー
1ひきだけ おかえり
5. 1ひきのあひるさん おやまにおさんぽ
おかあさんあひるクワックワックワッー
だーれも かえらない
6. おかあさんあひるは悲しんで
おやまにおさんぽ
おかあさんあひるクワックワックワッー
5ひき なかよく おかえり

4. まとめとして

カナダにおいて、保育・子育てをめぐる状況は日本と類似している。2012年の出生率1.7である（日本は1.4）。カナダは、2004年において出生率が1.5と落ち込んだが、現在は移民の受け入れにより人口をキープする政策をとっているため、安定した出生率を保っている。

日本と同じくカナダも、子どもを産み育てる環境は依然として厳しい状況である。具体的には①仕事と家庭の両立が難しい・育児休暇を取りにくい ②保育所の入所が難しい ③保護者支援の必要性といった3つの問題点があり、社会的な課題となっている。しかし、カナダは現在「子育て支援都市」として世界的に注目されている。前述の①②に関しては、日本と同じような環境であるが、③に関しては充実したプログラムが実施されていることが注目されている要因である。

日本において保護者支援は、保育者が担う役割として重要視されている。しかしカナダでは、WCRCやCCRRなどの保育・子育て支援施設において独立した専門職としてのスタッフが担当している。WCRCにおいては、専任スタッフが24人従事しており、その他にボランティアがいるそうである。保育・子育ての相談の際にも、日本のように曜日や日時を気にすることなく、門戸を開いていて相談にあたっている。どの施設にも子どもの遊び場があったり、おもちゃや絵本が置いてあったりして、保護者が出かけやすく、相談がしやすい環境が整備されていた。こうした充実した環境が「子育て支援都市」として注目を浴びている理由であると感じた。

我が国の平成20年改定の保育所保育指針では、昨今の家庭や地域の養育機能の低下により、子どもの保育だけでなく、保護者に対する支援及び地域の子育て家庭への支援を行うことが努力義務とされている。保育者養成においても、子どもの発達を学ぶだけでなく、保護者への援助を行うことを業とする、いわゆる保護者支援を修学することが求められている。カナダに倣うと、日本も保護者支援において、専門職としての育成が必要とされている。子どものことだけではなく、保護者（これはもちろん母親だけでなく父親についても）の発達・心理、子育ての実際について、それを主業として保護者支援することのできる専門性が必要である。

また、カナダは「ダイバーシティを受け入れる国家」として、保育・子育て施設は様々な言語での対応をしていた。人種を超えて、ともに保育・子育てに参加する姿を見ることができた。ダイバーシティについては、今回視察したどの保育施設、大学でも強調していた言葉である。国籍・人種・年齢・性別・障がいなどの属性にとらわれず、それ以上に地位・婚姻関係・職業・価値観などの違いを尊重して受け入れ、積極的に違いを生かして国民が暮らすというライフスタイルに感銘を受けた。そこはやさしさに包まれた国であった。日本でも今後、ダイバーシティを尊重し、浸透させる意識改革が必要であると考えられる。

最後に、カナダで体感した「ダイバーシティ」精神を紹介する。カナダを訪問した際、コロンビア大氷原を訪れた。ここは厚さ300mの300km³にわたる氷の世界である。ここでは雪上を走る特殊車両バスで大氷原まで移動する。その際、脳性まひの子どもがツアーに参加していた。特殊車両バスにはその子どもが車椅子ごと乗車できる油圧式のリフトが備え付けられていた。その後、子どもは、車椅子に乗ったまま大氷原におり、氷の世界を楽しんでいた。スタッフは車椅子を押して援助しており、

笑顔で氷の感触を一緒に楽しんでいた。

バンクーバーでは、至る所で車椅子対応のマークを見ることができた。どんな小さなレストラン・カフェにも車椅子対応のマークがあった。車椅子対応のトイレがあることが義務化されているそうである。また、すべての路線バスで車椅子対応を行っていた。車椅子の人が乗車すると、前方に座っている人は座席をたたんで立ち、スペースを空ける情景を見た。また「ハンディダート」と呼ばれるバスも見ることができた。油圧式のリフトがついた障がい者・年配者用バスで、路線バスと同じ料金で利用できるそうである。その他にも、ロッキー山脈のトレッキングなどのアクティビティにも車椅子対応マークを見ることができた。

このように、車椅子生活者だけを見ても「受け入れる」という精神がカナダでは見受けられた。我が国日本においては「法律や制度で決まっているから」「そのような習わしであるから」と一度立ち止まって考える傾向があると感じる。すべての人がやさしさをもって他者に接することこそがダイバーシティの精神である。保育者養成に関わる筆者はこの精神を学生に伝えたいと感じた。この経験を授けてくれたカナダと、そこで出会ったすべての方々々に感謝申し上げる次第である。

注釈

1) 小嶋玲子「カナダから学ぶ子育て支援プログラム」保育子育て研究所年報（2006）p37-43

「ノーバディズパーフェクト」については小嶋が2004年桜花学園大学保育学部海外幼児研修で調査しており、その様子を年報にまとめているので参考にされたい。今回の調査研究は10年後にあたり、保護者支援の変容と責務について調査するものであった。

2) Ruth Krauss「The Carrot Seed」（1945）HarperCollins 出版

3) WCRC「ワークショップ&トレーニング」<http://www.wstcoast.org/training/westcoast.html>（2013/10/3 取得）

4) クリスティン ムーア「フェルトボードアイデア」feltboardideas.blogspot.com/（2013/10/14 取得）

5) Penny Ives「Five Little Ducks」（2002）Child's Play 出版

スウェーデンの環境教育、 「森のムツレ教室」を実践して2

保育学部 嶋守さやか
同4年生 伊藤夏実・加藤由美

はじめに

昨年度、嶋守4年ゼミの学生達と行ったスウェーデンの環境教育、森のムツレ教室の実践について、この『保育子育て研究所教育保育研究所年報』で報告した。森のムツレ教室とは1956年にスウェーデンの野外生活推進協会が開発した5-6歳の子どもを対象とした自然教育プログラムである。本年度も、嶋守ゼミの4年生メンバーと長良川自然学校のスタッフとともに実践した森のムツレ教室の内容について報告したい。本年度は、筆者とともに伊藤夏実と加藤由美が中心となり森のムツレ教室を企画・運営した。当初は10月20日、11月17日の2日間で森のムツレ教室を実践する予定であった。しかし、10月の実践日が台風のために中止になった。森のムツレ教室は森に暮らし、子どもたちにエコロジーを教える架空の存在、妖精のムツレと参加する子どもたちとの出会いをファンタジックに演出することがプログラムの山場となる。その山場は、昨年と同様であれば、森のムツレ教室を開催する2日間で創り出していくことができた。しかし、前述した通り、森のムツレ教室を開催する予定としていた1日目が台風により中止となるアクシデントに見舞われてしまった。

よって、本年度の森のムツレ教室は11月17日の実践のみとなった。本稿ではゼミ生とともに作成した指導案とその指導案をもとにした台本、そして実践したゼミ生の感想を示し、来年度の森のムツレ教室開催の課題を示したい。本稿が森のムツレ教室実践でお世話になった方々や参加者へのお礼のご報告と、スウェーデンで行われている幼児環境教育プログラムの紹介となればとても幸いである。

1 2013年度、森のムツレ教室を実践したゼミ生たちによる研究報告—2013年10月20日分

本節では、伊藤夏実の卒業論文「自然の中での環境教育—森のムツレ教室からの考察」から2013年度に行った森のムツレ教室の研究報告を示したい。

1-1 森のムツレ教室とは

森のムツレ教室は、1957年、スウェーデンの野外生活推進協会が開発した5・6歳の子どもを対象にした自然教育プログラムである。スウェーデンの野外生活推進協会は104年前、野外生活を促進する目的で発足し、「アクティブな野外生活を推進することによって国民の健康を促進し、生きる喜びを得ることに貢献する」という目的を掲げて、これまで活動を行ってきた。創始者は、当時の野外生活推進協会の事務局長ヨスタ・フロム氏とスティーナ・ヨハンソン氏である。彼らのモットーは、①

自然を発見すること、②自然の中で遊ぶこと、③自然を大切にすることであった。

ムッレ教室の目的は、まず、子どもたちに「自然に出かけるのは楽しい」ということを知らせることである。そして、子どもたちは五感を使って様々な生物と触れ合うことにより、エコロジー（生物界の共生）を知る。こうして、子どもたちは、一緒に生きている他の生物や依存している環境への気遣いを学ぶことができるのである。また、ムッレ教室の最大の特徴は、これらの目的を達成するために、「ムッレ」という架空の妖精が登場することである。ムッレは、子どもたちと自然との橋渡しの存在で、植物や動物の言葉を伝え、自然の法則を人間が変えてはいけないことを教えてくれるのである。「ムッレ」の語源は、スウェーデン語の「ムッレン」（土壌）である。土は地球上の全ての生物の命の根源であり、人間もまた土と繋がっているのだということを伝えたいという願いが「ムッレ」の名前には込められている。

野外生活推進協会のプログラムとしては、森のクノッペン教室（1～2歳）、森のクニユータナ教室（3～4歳）、森のムッレ教室（5～6歳）、アルペンスキー教室（5～6歳）スケート教室（5～6歳）、森のストローバレ教室（小学校低学年）、フリールフサレ教室（小学校高学年）がある。これらは、①一年を通して自然に出かける、②自然の中で楽しむ、③自然を大切にするという共通の目標を持っている。これらの教室で共通していることとして、子どもと一緒に「発見」をしてくれる大人が必ず付き添うことが挙げられる。

現在、野外生活推進協会の活動において、最も広く普及しているのが、ムッレを教育とした野外保育園である。現在、全国に186の保育園がムッレ教育を取り入れている⁽¹⁾。

1-2 事前打ち合わせと森のムッレ教室実施前の下見の概況

2013年9月25日水曜日、JR岐阜駅内にあるハンバーガーショップにおいて、午後6時半から8時まで長良川自然学校のスタッフにこちゃん、よっしー、嶋守ゼミ生の加藤由美と伊藤夏実で打ち合わせを行った。初めに、昨年度の嶋守ゼミの先輩方のムッレ教室の活動の内容をお聴きしたり、写真を見せて頂き、活動の流れやイメージをつかんだ⁽²⁾。その後、10月20日のムッレ教室では、一部分を、11月17日のムッレ教室では活動の全てを私たちが行いたいことを伝えた。

長良川自然学校のスタッフのこちゃんから、森のムッレ教室を行う日程が秋であるため、どんぐりが落ちていたり、葉っぱも紅葉している。自然に親しむことが森のムッレ教室の目的であるため、それらを使った活動を行ったり、10月に何かを埋めて、11月に掘り出してもよいのではないかと提案された。また、10月のムッレ教室は私たちが行う11月の内容につながるようなプランを立てていただけるとのことであった。

その後、2013年9月29日日曜日の午前10時～12時にかけて、森のムッレ教室を行う岐阜市少年自然の家にて下見を行った。下見は、長良川自然学校のスタッフのよっしー、ゼミ指導教員の嶋守、そして来年度の森のムッレ教室を主催する嶋守ゼミ3年生の守田秀加と伊藤夏実とで行った。

下見を行う中で森のムッレ教室の最初の導入は広場で行うことに決めた。実際に森のムッレ教室に参加する子どもたちの年齢は当日までわからず、また年齢層が幅広いことが予想されるとのことであ

った。そのため、どんな子どもたちでも楽しめるよう、導入では手遊びや絵本を読むことにした。内容は森に行くという期待感が持てるよう秋のものや、森にあるものが出てくるものにしようと考えた。

森に入り、探索するルートを決めながら、森にはどのような植物があり、何ができるのか考えることにした。当日、蜂の巣があることが予想されるため、二通りのルートを決めた。

まず、一つ目のルートは坂が多かったため、小さい子どもでは登るのが大変だと考えられた。しかし、スタッフのわっしーから、「子どもにとっては坂を登ることだけでも楽しいんだよ」と言われ、「楽しい」という思いを抱く子どもの好奇心も大切にしなければならないことを知った。ルートには色々な色の葉っぱやどんぐりがたくさん落ちていた。葉っぱを触ってみると、柔らかいもの、パリパリしたものなどがあつたため、それらの感触の違いが楽しめると思った。また、茶色と言ってもたくさん種類があることが分かり、グラデーションのように並べてみたり、茶色を何種類見つけられるかというゲームもできると思った。どんぐりも小さいものから大きいものまで様々あり、下見を行っていた私たちも夢中になって拾った。その際、ただ拾う、見つけるのではなく、例えば男の子は大きいものを見つけてみよう、女の子は小さいものを見つけてみようなどと、声を掛けたり工夫することで、より楽しめると感じた。そして、森のムツレ教室のプログラム内容を行うのにふさわしい場所、ムツレが登場する場所を決め、一つ目のルートの下見を終えた。

二つ目のルートにはどんぐりがあまりなかったが、葉っぱや花がたくさんあつた。遠くまで進むと遊具が見えてしまい、気持ちが遊具の方へ移ってしまうため、遊具が見えない位置までで行うことに決めた。また、こちらのルートは、日なたの場所と日影の場所があつたので、お菓子として提供する食べ物を埋め、一か月後の森のムツレ教室にてそれらを掘り出すときに、日なたと日影ではどのような違いがあつたかが比較できると思った。下見を終え、わっしーから、こちらから何かしようと提案、言葉掛けをするのではなく、森の中にあるものを見つけているうちに自然と生まれるゲームや遊びが、ムツレ教室においては大切であるとのアドバイスを受けた。

1-3 2013年10月20日実施、森のムツレ教室の活動結果

10月20日のムツレ教室当日の朝、にこちゃんから、今日のムツレ教室は台風のため中止になったとの連絡があつた。通常、ムツレ教室は雨や雪といった天候に関係なく行われる。しかし、中止になったことで、ムツレ教室を企画した私たちは、当日が晴れている前提でプログラムを考えていたことに気づいた。また、雨の日しか体験できないこともあることや、配慮しなければならないこともあることが分かった。そのため、晴れの日も雨の日も楽しめるような活動を考えたり、その活動を雨の日に行う場合、どのように進めていくのかについても考えていく必要があることが分かった。

2 2013年度、森のムツレ教室を実践したゼミ生たちによる研究報告—2013年11月18日分

2-1 2013年11月18日実施、森のムツレ教室の指導案

第1回目の森のムツレ教室を実施する予定としていた10月20日が中止になったために、11月17日のムツレ教室に向けて嶋守と加藤由美と活動の流れ、内容を新たに考え直し、指導案を作成した。

10月20日のムッレ教室が中止になったことで分かったことを踏まえ、11月17日のムッレ教室では雨の日でも楽しめるような活動を考えた。3人で話し合った結果、秋の森を五感で感じることに、リーダーやムッレが秋の森や自然についての話を参加する子どもたちへとたくさんしていき、それらの話を子どもたちが集中して聞くことをねらいとして活動を進めていくこととした。

当日のムッレ教室は、嶋守ゼミ4年生で活動を分担して行うため、ムッレ教室を進める教室班と、ムッレ役の人とサポートする人のムッレ班に分かれて行っていくこととした。森の中での活動は自己紹介、手遊び、森の妖精ムッレを説明するピクチャーシアター、森の中で子どもたちが行動するために気をつけなければならない3つの約束を確認することとした。それは、ピクチャーシアターの内容を知った上で子どもたちは森の中で活動をした後でムッレが登場するため、ムッレに親しみを持つことができる考えたためだった。また、「ムッレのうた」をみんなで歌う機会も設けることにした。

森の中で行う活動として、私は、自然のものを使って楽しい遊びを行いたいと考えた。下見の時に、森の中には様々な色や種類の葉っぱがたくさん落ちていたことから、葉っぱを使った遊びとして、「葉っぱの串ざし⁽³⁾」というゲームを行うことにした。「葉っぱの串ざし」でははじめに、子どもたちと一緒に串となる長い枝を探す。その後、「枝に葉っぱを何枚さすことができるか競争」。そして、葉の色が異なる葉っぱを串に刺す、「何色さすことができるか競争」をすることとした。それぞれのゲームを2回ずつ行うこととした。その後、私は、遊ぶだけではなく、子どもたちが、遊びをきっかけとして自然に興味を持ったり、関心が高まるようにしていきたいと考えた。ムッレ教室を行う上で基本となる、五感を使って様々な視点から気付いたり、考えたりすることができるように、串に刺した葉っぱの手触りや匂い、握った時の音などを比べていく。一つひとつの葉っぱの違いや特徴を子どもたちと一緒に考え、共有していけるようにした。

その後、森のムッレ教室でリーダーを行うゼミ生が、なぜ秋になると葉っぱの色が変化するのかという、紅葉の仕組みを子どもたちに話をすることにした。この時に、リーダーからの一方的な知識の伝達とならないよう、「子どもたちの不思議だな、どうしてだろう」という気持ちを大切に、子どもたちと一緒に考えながら話をしていくことにした。その後、子どもたちと秋の食べ物でできたおやつを食べることとした。山から主活動を行う広場へと移動してからムッレ鬼を行い、体を動かして遊んでいる中でムッレを登場させることにした。ムッレが森に帰る前に、ムッレが秋の森の中の様子について話をする。森の中の生き物や動物たちが冬眠をするために、秋の森の中では、餌を集めるといった冬眠の準備が行われているといった内容の話をしてもらったこととした。秋の森の様子や変化について知ることで、子どもたちの自然やエコロジーについての理解を深めたり、関心や想像力を高めていくことへと繋げていくことを目的とした。

ムッレが森へ帰った後、ムッレからの手紙を森のムッレ教室のリーダーを務めるゼミ生が読み、ムッレからのプレゼントがあることを伝え、プレゼントが入った袋を探す。今日のムッレ教室で葉っぱを使って遊んだという思い出が、いつまでも子どもたちの心に残るように、葉っぱで作ったしおりをプレゼントとして用意することとした。最後の振り返りの時として、子どもたちに今日一日の感想や、何をして遊んだかを子どもたちに問い掛けていくこととした。そこでは子どもたち一人ひとりの言葉

に耳を傾けながら、楽しかった、面白かったという気持ちを共有していけるようにした。

以上の内容を長良川自然学校のスタッフのにこちゃんに連絡をした。にこちゃんからは前回（10月20日分）、森のムツレ教室を開催せず、初めての開催でムツレが登場すると子どもの空想感が削がれるため、ムツレ登場時間を短くした方が子どもの印象に残りやすいのではないかとという指導を受けた。にこちゃんからの指導を踏まえ、嶋守と加藤由美と指導案を修正し、最終的な指導案を作成した。

指導を受ける前は、おやつの時にムツレを呼び、ムツレが配ってくれたおやつをみんなで食べる予定としていた。それは子どもたちができるだけ長い時間、ムツレと関わる時間を設け、ムツレとの楽しい思い出をたくさん作ってもらいたいと考えていたためだった。しかし、ムツレはあくまで空想上の存在であるため、一緒に遊べるのが奇跡的な雰囲気になりたいというにこちゃんの考えを受けたことで、ムツレに出会えたという子どもたちの夢やファンタジーの世界を大切にしたいと感じた。子どもたちへの関わり方や環境構成について改めて考え直すことができた⁽⁴⁾。

2-2 2013年11月18日実施、森のムツレ教室の活動結果

ここでは、実際にどのように森のムツレ教室が行われたのかを当日のプログラムを实践する学生たちの台本で示したい。ムツレ教室のリーダーは子どもたちが親しみやすいように、それぞれのニックネームを子どもたちに名乗る。ここでも本名ではなく、ニックネームで表記することにする。

教室班

全体の進行（なっちゃん、ゆみ、先生） ムツレ班との連絡（ゆみ） 手遊び、活動（みほ、なみん）

補助（つだ、ちん） カメラマン・記録（きみか）

ムツレ班 ムツレ（神さま） ムツレサポート（もちゃん、ひめ） 教室班との連絡（ひめ）

自己紹介 13:15～13:20

（なっちゃん） こんにちは。私達はだいがくっていうお勉強するところから来ました。今日はみんなと森の中へ遊びに行くのをとても楽しみにしています。今日は一緒に体を動かしたり、歌を歌ったり元気に遊ぼうね！じゃあまず一緒に歌ってね。

手遊び どんぐり・きのこ・おいも 13:20～13:25

（みほ） じゃあみんな今からお姉さんがやることを真似してね。《どんぐり・きのこ・おいもの手遊びをする》じゃあ今から楽しいお話をするから聞いててね。

ピクチャーシアター 13:25～13:35

（なっちゃん） 今からするお話しは森の妖精のムツレと動物さん達のお話しだよ。まずお話しの前にムツレさんの歌があるからみんなも一緒に歌ってね。《歌（みほ）が中心となってみんなで歌う》

みほ：ほくはもりのムツレだよ であったことありますか 全員：あなたは もりのムツレ

みほ：もりのなかは まいにちたのしいよ 全員：とつてもたのしいよ

全員：コリコック コリコック コリコック コリコック もりにおいで

コリコック コリコック コリコック コリコック ムツレといこう

ぼくらは はなと きと みんなと ともだちだよ さあ いっしょにいこう きれいなもりへ
 (なっちゃん) みんな歌ってくれてありがとう。ムツレの歌覚えられたかな？次はいよいよムツレのお話だよ！それで、お話には森にいるたくさんの動物さん達が出てくるんだけど、その動物さん達が元気に出て来られるようにみんなにお手伝いをしてもらいたいんだけどいいかな？みんなにひとつずつ動物さん達を渡すから、大事に持っててね。何をもらったかはおとなりのお友達には内緒だよ。そーっとひとりで見てね。《なみん、みほ、ピクチャーシアターに使う物を配る。物語をゆみが読む》
 (なっちゃん) みんなお話は楽しかったかな？今からみんなもこの森に行くんだよ。楽しみだね。でもね、森には今出てきた動物さん達やお花さん達もたくさんいるから行く前にお約束してほしいことがあるんだ。今からお姉さんがそのお約束を教えてくれるからみんなよく聞いてね。

3つの約束 13:40～13:45 《なっちゃん、ゆみ、先生がポスターを用意し、順番に見せる》

(つだ) 今から森に行くためのお約束をお話するよ。じゃあまずはこの絵を見てね。《「大きな声を出さない」のポスターをゆみが持つ》この絵の中の動物さん達、どんな顔してる？ そうだね。男の子が大きい声でお話ししてるから動物さん達びっくりしてるよね。大きい声でお話しすると動物さん達びっくりして森から逃げて行っちゃうかもしれないから、お話しする時は優しい声でお話ししてね。

《「根っこから抜かない」のポスターを先生が持つ》じゃあ次はこの絵を見てね。この絵もお花さんが悲しい顔してるね。どうしてかな？ そうだね。お花さんの体を土から全部抜いちゃうとお花さんはごはんが食べれなくなって死んじゃうんだよ。このお花さんの1番下のところを根っこっていうんだけど、その根っこが土から出ちゃうと死んじゃうから、みんなは絶対こんなことしないでね。

《「ごみを捨てない」のポスターをなっちゃんが持つ》じゃあ次はこの絵を見てね。この絵はどうか？ また森の動物さん達が悲しい顔をしてるね。どうしてかな？ そうだね。みんなもお家にこんなゴミがたくさん落ちてたら悲しいよね。森は動物さん達のお家だよ。ゴミは捨てないでみんなのお家のゴミ箱に入れようね。あとね、どうしてゴミを捨てちゃいけないか、もう一つ理由があるの。ゴミは土の中に入っていけないからずっと森の中に残っちゃうんだ。だからみんながゴミを捨てるとゴミだらけの森になっちゃうんだよ。それは動物さん達かわいそうだよ。だからゴミは捨てないでね。

(なっちゃん) みんなお約束わかったかな？お約束守れる人ー？じゃあ森に何があるか、どんな生き物がいるか見に行こうか。ムツレさんにも会えるといいね。じゃあいよいよみんなで森へ行くよ！

活動① 葉っぱの串ざし 13:45～14:00

(なっちゃん) みんな、今からゲームをするよ！どういうゲームかお話しするからみんな座ってね。

今からするゲームにはこの枝と落ちてる葉っぱを使うよ。どんなゲームだと思う？落ちてる葉っぱをこうやってお団子みたいに枝にさします。でも、こうやって木についている葉っぱをぶちってちぎってさしてもいいかな？ だめだよ。こうやって下に落ちてる葉っぱを拾ってさしてね。

あと、こうやって枝を持ってぶんぶん振り回したり、枝を持って「わー」って走ったりしてもいいかな？だめだよ。上手に持ってゆっくり歩いてね。じゃあ今から誰が1番たくさんの葉っぱをさせるか競争しようか。「おわり」って言ったらまたここに帰ってきてね。

《一緒にゲームをする人：みほ、なみん、つだ、ちん、子ども達を見守る人：ゆみ、先生、きみか》

(なっちゃん) おわり！ みんなたくさんさせたかな？じゃあ1枚ずつ取って並べて、何枚させたか数えてみようか。《白い布に子どもたちが串に刺した葉を並べて、葉の数を数える》みんなたくさん集められたね。じゃあもう1回やってみようか。次は今よりたくさんさせるように頑張ってみてね。

《もう一度、子どもたちに串に葉を刺してもらおう》おわり！ 《白い布に子どもたちが串に刺した葉を並べて、葉の数を数える》さっきよりたくさん集められたかな？みんなたくさん集められたね。

じゃあ次のゲームをするよ。次もたくさん葉っぱをこの枝にさして欲しいんだけど、ただたくさん葉っぱじゃなくて色々な色を集めてね。どんな色があるかな？また、おわり！って言ったらここに戻ってきてね。《子どもたちに、できるだけたくさん色をした葉を串に刺してもらおう》

(なっちゃん) おわり！ みんないろんな色、集められたかな？ みんなでどんな色があったかこの上に並べて見てみようか。《白い布に子どもたちが串に刺した葉を並べて、葉の色を観察する》色々な色が集められたね。じゃあこの緑色の葉っぱと黄色の葉っぱを手で触ってみようか。まず緑色を触ってみようか。触るとどんな感じかな？《子どもたちに葉を触ってもらおう》つるつるしているね。じゃあ次は黄色の葉っぱを触ってみようか。緑色と比べてどうかな？

次は匂いを嗅いでみようか。まずは緑色の葉っぱの匂いを嗅いでみるよ。こうやってちょっと手でちぎるとたくさん匂いがするよ。やってみてね。今度は違う色の葉っぱの匂いを嗅いでみようか。さっき緑色でやったみたいに手でちぎって匂いを嗅いでみてね。どんな匂いがした？ 緑色と比べて、匂いはどうかな？《それぞれの色の葉の匂いをリーダーと一緒に子どもたちにかいでもらおう》

どうして秋になると葉っぱの色が変わるか知ってる？ 秋から冬になると寒くなるよね。そうすると木は葉っぱに栄養をためるんだ。するとね、たまった栄養から紅い色が作られて緑色が減っていくんだ。黄色い葉っぱはね、今まで目立たなかった黄色いところがね、緑色が減ったおかげで出てこられるようになったから黄色に見えるようになったからなんだよ。

おやつ 14:00～14:10

(なっちゃん) みんなでたくさん森の中を歩いて少しお腹が空いてきたよね。おやつ食べようか！おやつを配るから座って待っててね。《リュックの中からおやつを出し、一人ひとりにおやつ（甘栗やいもけんぴ、乳児はたまごボーロ）を配って、みんなで食べる》

おいしかったね。おいしいおやつを食べて元気が出たところで今度はたのしいゲームをしない？

ムッレ鬼 14:10～14:20

(なっちゃん) まず、みんなで大きな円を作って座ろうか。《円を作って座る》今からするゲームは「ムッレ鬼」というゲームだよ。どうやってやるのか説明をするね。まず一人鬼を決めます。《なっちゃんがゆみにタッチし、ゆみが鬼役になる》鬼はみんなの周りを歩いて、誰にタッチするかを選びます。選んだ人のところで「トントントン、ムッレさんいますか」と聞きます。トントントンとされた人は「いません」と答えるか「います」と答えるか自分で決めます。《ゆみが先生に「トントントン、ムッレさんいますか」と言う。先生は「いません」と答える》

(なっちゃん)「いません」と言われたら、また違う人のところへムッレさんを探しに行きます。また「トントントンムッレさんいますか」と聞きます。《ゆみがなみにタッチし、「トントントンムッレさん

いますか」と聞き、なみんが「います」と答える》今のように「います」と言われたら言った人と反対周りでみんなの周りを1周走ります。《ゆみ、なみんがやってみせる》そして、2人がすれ違う時に手と手を合わせてタッチし、「コリコック」と言います。《ゆみ、なみんがやってみせる》それからまた走って、先に元の場所へ戻った人の勝ちです。負けてしまった人はムッレさんを探しに行きます。わかったかな？お姉さん達と一緒にやってみようか。《子ども達も交えてムッレ鬼をする》

14:15 ある子どもが「ムッレさんいますか」と言った時にムッレ（神さん）登場！

ムッレ（神さん）呼んだ？「ムッレさんいますか」っていい声が聞こえたから来ちゃった。

（先生）ムッレさん来てくれてありがとー！どこから来たの？

ムッレ（神さん）森から来たんだよ。今森の中はとっても忙しいんだよ。

（先生）どうして忙しいの？

ムッレ（神さん）あのね、冬になると寒くなるでしょ。その寒ーい冬を乗り切るために、くまさんやリスさんは穴を掘って土の中で暖かい春が来るまで眠っているんだよ。そのためには寒い時に穴の中で食べる物がたくさん必要でしょ？だから秋の森の中では動物たちが一生懸命食べ物を集めているんだよ。動物さんたちが一生懸命働いている音が聞こえるかな？みんなで目をつぶって、静かに音を聞いてみようか。しーしー。《しばらく音を聞く》どんな音が聞こえた？ 葉っぱのカサカサっていう音は聞こえた？ 鳥さんの鳴く声は聞こえた？耳をすましてみるといろんな音が聞こえたね。みんな、森の中でどんぐりを見つけたかな？

子どもたち 見つけた！

ムッレ（神さん）そのどんぐりも動物たちのご飯になるんだよ。あそこやって落ちている葉っぱは小さい動物さんたちのふかふかの毛布やベッドになるんだよ！ごはんを集めたり、ベッドの準備をしたり秋の森は大忙しなんだよ。僕はその動物さんたちのお手伝いや、森の掃除で大忙しなんだ。今からまたお掃除をしに行くからみんなとはそろそろお別れだよ。また森へ遊びに来てね。

（なっちゃん）ムッレさん、みんなのところへ来てくれてありがとう。

ムッレ（神さま）僕もみんなと遊べてとても楽しかったよ。お手紙書いたからみんなで読んでね。あと、みんなにプレゼントを持ってきたからどこにあるか探してね。

（なっちゃん）ムッレさんありがとう。みんな、ムッレさんからのプレゼントを探しに行こうか。

みんな行こう！ じゃあムッレさんさようなら。

プレゼント探し 14:20～14:40

（なっちゃん）プレゼントがあるんだって。みんなで探しに行こうか。《事前にプレゼントを隠しておいたあたりを探す。子どもたちにプレゼントの入った袋を見つけてもらう》

（なっちゃん）この袋の中にムッレさんのプレゼントが入っているみたいだよ。見てみるね。あ、葉っぱのしおりだ！ みんながさっき見つけたみたいな緑色と黄色の葉っぱが入ってるね。きれいだね。みんなにもひとつずつあるみたいだから順番に配るから座って待っててね。《順番に配る（ゆみ）》

振り返り（なっちゃん、ゆみ）14:40～14:45

（ゆみ）みんな、今日お姉さんたちとどんなことしたか覚えている？《子どもたちに答えてもらう》

そうだね。森の中を歩いて色んな物を見て、触ってみたり、匂いを嗅いでみたり、音を聞いてみたりいろんなことをしたね。楽しかった？

(なっちゃん) 楽しかったね。あと、みんな森の中に入る前に3つお約束したことがあったよね？

どんなお約束だったか覚えている？ そうだね。大きな声を出さないと根っこから抜かないとごみを捨てないだったね。どうして大きな声を出したらいけないか覚えている？ 《子どもたちに答えてもらう》 そうだね。大きい声でお話ししたら動物さん達がびっくりしちゃうもんね。お話しする時は優しい声でお話ししようね。

じゃあ根っこから抜いちゃいけないのはどうしてかな？ 《子どもたちに答えてもらう》 そうだね。お花さんの体を土から全部抜いちゃうとお花さんはごはんが食べれなくなって死んじゃうんだったよね。根っこからは抜かないようにしようね。

じゃあごみを捨てちゃいけないのはどうしてだったかな？ 《子どもたちに答えてもらう》 そうだね。ゴミは土の中に入っていけないからずっと森の中に残っちゃうんだったよね。だからみんながゴミを捨てるとゴミだらけの森になっちゃって動物さん達がかわいそうだよ。だからゴミは捨てるようにしようね。この約束を守って森へ行ったらきっとまたムッレさんに会えるよ。またみんなで森へ行こうね。

2-3 森のムッレ教室を实践しての学び

森のムッレ教室を实践したゼミ生たちはその学びとして、それぞれの言葉でレポートを作成してくれた。ここでは、当日の实践を行った伊藤夏実を補助した加藤由美の感想を示したい。

「私（加藤由美）はムッレ教室リーダー養成講座に参加し、リーダー資格を取得した。そして実際に子ども達に向けてムッレ教室を实践し、様々なことを学んだ。準備の段階では、子ども達の様子を予想し、どういうねらいを持ってどういう内容の教室にするのかを丁寧に考えた。しかし、どのような年齢の子どもが何人参加するのか、ということを知ることが出来なかったため、活動を考えるのはとても難しかった。また、森の様子は常に変わっているため、紅葉しているのか、どんぐりは落ちているのかなど、どのような題材を使うことが出来るのかを把握することも難しく、苦戦した。苦戦しながらも森の中で五感を使って遊ぶ活動を考えた。また、90分の教室の中でそれぞれの活動にどのくらいの時間をかけて取り組むのかなども細かく考え、当日の予想をもとに計画を立てた。

そして、当日子ども達や長良川自然学校のスタッフの方々を前に教室を行うのはとても緊張した。また、実際に教室を行ってみると予想外な子どもの反応や発想に驚かされた。子どもの中には人見知りでなかなか私達と関わろうとしない子どももおり、どう関わるか悩んだ。しかし、手遊びを担当していたゼミ生が手遊びを通して積極的に関わりを持ってくれたことがきっかけで人見知りをしていた子どもの笑顔を見ることができ、その後も楽しそうに活動へ参加してくれた。また活動に飽きてしまい、教室とは離れたところで遊び始めてしまう子どももいた。しかし、今回はゼミ生5人と先生2人、さらに長良川自然学校のスタッフの方々2人で教室を行ったため、それぞれ気づいた時に子ども達へ声をかけてくれたこともあり、子ども達が自然に活動へ戻る援助をすることが出来た。

普段のムッレ教室ではリーダー2人で行うこともあると聞き、驚いた。私なりに子ども達に関心を持って活動へ参加することが出来るように心掛けたことがある。活動の説明をする時は落ち着いて聞くことが出来るように子ども達に座るように声を掛けたり、「今からたのしいゲームをするよ」と期待を持って話を聞くことが出来るようにしたりということを中心掛けた。このような声掛けは効果があったと感じたが、このような声掛けにさらにその時の様子を見て子ども達の個性や特徴を捉え、もっと子ども達の興味関心を引くような語りかけや手遊びなどの引き出しを持って取り組むともっといい教室になるのではないかと感じた。

しかし、一緒にムッレ教室を行ったゼミ生や先生方がそれぞれサポートしてくれたこともあり無事教室を終えることが出来た。今回の教室では自分以外の人の子どもへの関わり方を見て学ぶことがたくさんあった。自分では気づくことが出来なかったことに気づき、声を掛けてくれるゼミ生もおり、もっと広い視野で子ども達と関わり、子ども達の様子に気づき、適切な援助、声掛けが出来るようになりたいと感じた。長良川自然学校のスタッフの方々の指導を受けながら、ムッレという架空の妖精のイメージを大切にしながら、森のムッレ教室を行ったため子ども達はファンタジーの世界に入り込み、ムッレ教室を楽しんでくれているように感じた。今回の教室で評価して頂いた点やご指摘して頂いた点はこれからの保育に生かしたいと考えている。」

おわりに

本年度の実践には1歳から5歳までの子ども10名とその保護者10名の参加があった。実践後、長良川自然学校のスタッフのこちゃんからはその環境構成についての指導を受けた。坂の傾斜、太陽の向きも考慮しながら、子どもたちがのびのびと自由に自然のなかで遊ぶことの重要性についての指摘は非常に有益であった。来年度以降も、森のムッレ教室を嶋守ゼミの主活動として取り入れていきたいと考えているが、より良い実践が可能となるようにゼミ生とともに尽力していきたい。

謝辞 本稿で示した嶋守ゼミ生による森のムッレ教室開催には日本野外生活推進協会の高見豊会長、西躰通子先生、特定非営利活動法人長良川自然学校のスタッフ、森のムッレ教室をご紹介下さった新評論社長、武市一幸氏に多大なるご尽力をいただいた。ここで厚く感謝の意を述べさせていただきます。本当にありがとうございました。

注

- (1) 岡部翠 (2007) 『幼児のための環境教育—スウェーデンからの贈り物「森のムッレ教室」』 新評論
- (2) 嶋守さやか他 (2013) 「スウェーデンの環境教育、『森のムッレ教室』を実践して」『保育子育て研究所教育保育研究所年報』 23-31 頁
- (3) 高橋和敏 (1986) 図解・ゲームの指導事典 不昧堂出版 178 頁
- (4) 伊藤夏実 2013 年度卒業論文「自然のなかでの環境教育—森のムッレ教室からの考察」を加筆修正

子どもの生きる力を育むリズムのある生活 ～シュタイナーの治療教育における「食べる・寝る・遊ぶ」生活リズムから学ぶ～

保育科 山下直樹

1 はじめに

(1) 生きる力を育む

筆者は保育カウンセラーとして、幼稚園や保育園における子どもの発達を見てきたが、近年昼寝をしない子どもや、何事にも飽きっぽく集中力のない子ども、疲れている子どもなど気になる子どもに多く出会う。前橋(2004)によると、「物事に熱心になれない」、「意欲がない」子どもたちの生活実態は、「運動をしない」、「睡眠時間が短い」、「朝食をしっかり摂っていない」、「室温調整のなされた室内でのテレビ・ビデオ視聴やゲーム遊びが多い」という。生活習慣の乱れと睡眠リズムのずれ、活動内容の質の悪さが共通した問題として確認されている。

本来子どもは、多少の疲れがあったとしても、それに気づかないほど元気よく遊びまわり、眠くなれば眠ってしまい、翌日になればまた元気いっぱい遊びまわるのが自然な姿であった。しかし、近年のこうしたいわば子どもの生きる力というべき、元気さや意欲が低減しているのはいったいなぜなのか。そして子どもの生きる力を育むためには、どうすればいいのだろうか。こうした問いが本稿の問題意識であり、出発点である。

(2) 本稿の目的

本稿では、子どもの生きる力を育むために、どのような配慮を必要とするのかについて考察することを目的とする。特にシュタイナーの治療教育における「食べる、寝る、遊ぶ」というリズムのある生活から、どのようにして子どもは生きる力を育んでいくのかについて考える。

なお本稿では、シュタイナーの提唱した思想を、「人智学」と記し、人智学に基づいた障がいを持つ子どもたちへの教育を「シュタイナーの治療教育」または単に「治療教育」と記す。

2 人智学的人間観と治療教育

(1) 治療教育とは

『心理臨床大事典』(1992)によると、治療教育とは、もともとドイツ語圏で使われていた用語で、Heilpaedagogik という語が用いられていた。しかし、その概念は研究者によって見解の違いがあり必ずしも統一されたものはなかった。

R.シュタイナー(1861～1925)は、人智学を説いたが、その教育思想の根底には、「精神(Geist)の進化とその地上回帰」という思想がある。精神は永遠性を持ち、地上での生活を送るときに、心

(Seele) や肉体 (Kaelper) と結びつくと思われる。体との結びつきがうまくいかない時に、何らかの「障がい」が生ずる。その「障がい」を治癒するためには、障がいを持つ子どもの中に眠っている「固有の本性」をよびさまし、これに働きかけることで子どもの自己治癒力を活性化させるのである。これがシュタイナーの治療教育の根幹であるとされている。したがって、シュタイナーによる治療教育における「治療」とは、身体医学で言い表されるような単なる疾病や傷害（けが）の除去や改善、障がいの除去や軽減を指すわけではない。

(2) 人智学的観点からの人間本性とは

シュタイナーの説いた理論は、壮大な体系を成している。認識論（学問的方法論）に始まり、人間論、教育論や医学論、宇宙形成論に至るまでさまざまであり、さらにそれらが相互に関連し合った有機的な理論体系である。ここでは、障がいを持つ子どもとの関連から、人間論の一部を取り上げ、エッセンスとして人間本性を述べる。

① 体・心・精神

人間とは、何によって構成されているのか、というのがここでの問いである。その問に対してのシュタイナーの答えはいたってシンプルである。それは、「体」と「心」と「精神」であるという。「体」「心」「精神」という言葉は、それぞれドイツ語の“Leib（体）”“Seele（心・魂）”“Geist（精神・霊）”の翻訳である。本稿では、“Leib”を「体」「Seele」を心、“Geist”を精神と訳し記した。

「体」とは、目に見える肉体のことである。手、足、頭や髪の毛、骨、血液など外側から見て、もしくは切り開いた時に目に見えるもの、のことを言う。人間の第1の構成要素は、体である。

人間の第2の構成要素は「心」である。心は目に見えないが、うれしい、悲しい、楽しい、悔しいなど様々な心の営みを感じることができる。心は主観的な営みであり、他人の心を正確に理解することは難しい。一方で「心と体のバランスを整える」などと言われるように、人間には心という構成要素が存在し、さらに心と体は結びついているのだということが理解できる。

次に人間の第3の構成要素である「精神」について考える。日本語の意味からすると、先にとらえた心と混同しそうであるが、ここでは以下のように精神を定義する。シュタイナーによると精神とは、主観的なものを客観化する主体であるという。精神は、永遠性をもち、地上生活を送る際に、体、心と結びつく。分かりやすくいうならば、「自我」であるともいえる。心や体に指令を出す位置に「自我」はある。体や心からは離れ、冷静に自身をとらえる。自分自身で考え、決断し、実行していく力を自我は持つ。これがシュタイナーの言う人間の第3の構成要素、精神である。

(3) 治療教育的アプローチ

治療教育では、障がいを持つ子どもは、体においてのみに障がいを持つと捉えられる。同時に、障がいを有する体は心にも影響を与える。したがって、治療教育的なアプローチでは、体に働きかけることが第1であり、次に、心の働きかける。心と体は結びつきが強いため、体への働きかけは、次第

に心へも影響を与える。そして、最後に精神にまで響いていくのだと考えられる。治療教育的アプローチは、「体に働きかけ、心を育み、精神に響かせる」ことであると言える。

体と心に働きかけるものとして重要なのは、リズムのある生活である。毎日の規則正しい生活は身体の調子を整え、心を育てていく。治療教育を実践する施設ではこのことが重視されている。

次章では、治療教育施設において実践されるリズムのある生活について詳述することにする。

3 シュタイナーの治療教育施設の実際

本章では、筆者が滞在した、スイスにあるシュタイナーの治療教育施設“Sonnenhof（ゾンネンホーフ）”での経験を記しながら、子どもの生きる力がどのように育まれているのかについて述べる。

(1) 一日のリズム

ゾンネンホーフは、スイス、バーゼル市近郊にある知的な障がいを持つ子どもや大人の入所施設である。入所者数は、子ども約 100 人、大人約 50 人、合計 150 人程度の施設である。150 人ほどの障がいを持つ人たちが約 10 人ずつのグループに分かれて、ゾンネンホーフの本部敷地内にある家や、街の中に点在する家々で暮らしている。

表 1 ゾンネンホーフの一日の流れ

7:00	起床（子どもたちを季節の歌とともに起こす） 洗面、着替え
7:30	朝食（食事の前のお祈り）
8:00	登校
8:30	始業（始まりのお祈り）
12:00	下校
12:30	昼食（食事の前のお祈り）
13:30	昼寝
15:00	おやつ セラピー
15:45	散歩 遊び
17:00	夕食
18:00	入浴・洗面
19:00	夕べの集い（1日の振り返りとお話、歌） 図 1
20:00	就寝（眠る前のお話や、歌など）

子どもたちの学校は、ゾンネンホーフ本部の敷地内にあるため、施設から数分歩いて学校に登校する。また、授業は基本的には午前中のみで終了し、午後は必要な子どもだけがセラピーを受ける。

ゾンネンホーフでは一日の生活リズムを整えることによって、子どもたちの体と心を育てることを目的としているので、規則正しい生活を送ることが出来るように一日の生活は設定されている。子ども一人に対して、原則として一人の介助者が付く。正規の職員であることもあれば、パートの職員や実習生が付くこともある。

朝、子どもが目覚めてから、夜子どもが眠るまで、おおよそ表 1 で示したような流れで毎日が進ん

でいく。祝祭などの行事が入らない限り、毎日続く。1日の流れが、1週間の流れとなり、1ヶ月そして1年が過ぎていく。まるで呼吸が一定のリズムでなされるようにゆるぎない生活のリズムは、着実に続いていく。

以下に、治療教育におけるリズムのある生活について2点述べる。一つは、「体に働きかけるリズムのある生活」であり、もう一つは、「心に働きかけるリズムのある生活」である。

(1) 体に働きかけるリズムのある生活

体に働きかけるリズムのある生活とは何か。治療教育のもっとも基礎となる体に働きかけるリズムのある生活とは、「食べる、寝る、遊ぶ」であると考えられる。ここでは、生活の中で直接身体に影響を与えるものとして、「眠りと目覚め」、「食べること」、および「遊び」の3つの視点から述べる。

① 眠りと目覚めのリズム

まず目覚めについて述べる。トビアスハウスの一日は朝7時から始まるが、子どもたちを起こす際、スタッフが季節にあった歌や朝の歌を歌う。子どもたちが眠る部屋の前や家のホールに集まり、スタッフみんなで歌を歌う。一人がフルートなどの楽器を演奏する場合も多い。

治療教育では、目覚めの瞬間は非常に大切であると捉えている。意識が体と結びつく瞬間が目覚めであるため、心地よくスムーズに眠りの世界から目覚めの世界へ移行することが重要であると捉えているのである。障がいは体においてのみ生じると捉えられている。つまり障がいを持つ子どもたちは、意識と体との結びつきに困難が生じている。したがって、目覚めの際にスムーズに意識と体が結びつくための工夫が非常に大切になる。

次に眠りについてであるが、眠りを助ける工夫としては、眠るための一連の「儀式」がある。夕食後の「夕べの集い」(図1)から、ベッドへ行き、眠るまでの流れを整え、それを毎日繰り返す。

夕食を食べ、歯磨き、洗面などを終わると、子どもたちはスタッフと一緒に一度リビングルームに集まる。時刻は19時ごろである。そこでは、みんなの顔が見えるように丸くなって座り、中央のテーブルにはろうそくが灯される。カーテンは閉められ、静かな環境の中で、子どもたちは順番に、今日一日どのようなことがあったのか、みんなに話す。

言葉をうまく話せない子どもについては、子どもの気持ちをスタッフが代わりに話す。それが終わると、ライアー(シュタイナーの治療教育施設で生まれた豎琴のような弦楽器)をスタッフが弾きながら、みんなで歌を歌う。

2～3曲みんなで静かに歌った後、夕べのお祈りをし、テーブルの上に灯っているろうそくの火



図1 夕べの集い

をそっと消す。あとは子どもたち一人ひとりのろうそくをスタッフが持って、各自の部屋に一緒に行く。

スタッフは、ベッドサイドに座りながら、子どもが布団をかぶるのを待ち、静かに歌を歌ったり、場合によっては、お話を聞かせたりする。子どもたちの中には、睡眠に障がいを持つものもいて、なかなか寝付けられないこともあるが、こうした眠りの「儀式」を毎日繰り返すことで、ほとんどの子どもがスムーズに眠りの世界に入っていく。日本では、睡眠にトラブルが生じている子どもに対して、睡眠導入剤などを用いて薬物療法を行うこともあるが、治療教育施設では、このような眠りのための一連のリズムを作ることで、薬だけに頼ることなく、成長を促すことが可能となる。人間本来の生活リズムを取り戻すことで、体に働きかけ、子どもの自己治癒力を呼び覚ますこと、これが治療教育の原則である。

② 食事のリズム（消化と吸収のリズム）

体に働きかける生活リズムのもう一つは、食事のリズムである。食事のリズムについては、食べる前のお祈りと、毎日規則正しい時間にゆっくりと集中して食べることの2点について述べる。

ゾンネンホーフでは、食事の前に必ず食事のお祈りをする。ゾンネンホーフはスイスにあるためこうしたお祈りは、生活の中にキリスト教的習慣が根付いたものであることは確かである。一方、それだけにはとどまらずこうした食事の前の一定の決まりごとは、毎日のリズムを刻んでいくという意味がある。さらに、そのお祈りの言葉も、子どもに深い影響を与え得ると言える。食事の前のお祈りは数多くあるが、そのうちでもっともシンプルでベーシックなお祈りをここに記す。

食事の前のお祈り

大地がもたらし	Erde die uns dies gebracht
太陽が実らせた	Sonne die es reif gemacht
愛する太陽	Liebe Sonne
愛する大地	Liebe Erde
お前たちのことを決して忘れはしない	Euer nie vergessen werde

食事の前に毎日こうした言葉を唱えることで、食物やそれを育む自然、そしてそれを与えてくれた親を始め周囲の人々への感謝の気持ちが生じ、さらには食事の場が静かで厳粛な雰囲気となる。自閉症スペクトラム障がいの子どものみであれば、毎日のこうしたお祈りは、食事が始まる際の一定のルールとなり、安心感をもたらす。

安心できる静かで厳粛な雰囲気の中で、子どもたちは毎日規則正しい時間にゆっくりと時間をかけて食べる。ゾンネンホーフで生活している学齢期の子どもたちは、すべてゾンネンホーフ本部にある学校に通学しているため、朝食の時間は多少慌ただしくなる。しかし、決して「早く食べなさい」という言葉は聞かれない。毎日の食事は、口から体に取り入れるもの、つまり子どもたちにとっては「薬」

と同等のものとして捉えられている。必要な時間をかけて食事をすることは、子どもたちのさまざまな「障がい」を治癒していく、大切なプロセスである。ゆっくりと意識して食べることで、体に働きかけるのである。

(ア) 遊びについて

治療教育施設では、遊びについても毎日の生活の中に自然な形で組み込まれている。午前中は学校に行っているため、各自学校での活動があるのだが、昼食後の昼寝が終わると、体を動かして遊ぶ時間となる。体力のあまりない幼児や障がいが重く体の自由がつきにくい子どもも、スタッフと一緒に散歩に出たり、広い庭で遊ぶ（図2・3）。



図2・図3 ゾンネンホーフ（トビアスハウス）の庭で遊ぶ子どもたち

午後も体を思いっきり使って遊ぶことで、体が成長していく。また、毎日体をしっかりと使って遊ぶことで、自律神経が整っていき、お腹がすけば空腹を感じ、夜になれば心地よい疲労を感じ眠くなる。さらに朝はすっきりと目覚めてまた元気に活動できる。

(2) 心に働きかけるリズムのある生活

前述した体に働きかけるリズムのある生活に加えて、本節では心に働きかけるリズムのある生活について述べる。

心に働きかけるリズムのある生活を端的に言い表すならば、「季節の祝祭によって、自然界に生じる変化を子どもの心に刻むこと」を言う。

心とは、うれしい、楽しい、悲しい、悔しいなど目には見えないが、主観的な心の営みのことを言う。そして、心は四季の変化を感じ取り、自然の営みや雰囲気の中でまるで呼吸をするかのように存在する。例えば、寒い冬が終わり、春になって植物が成長し花が咲き乱れる春になると、次第に心は解放され外に向かっていくのを感じる。その反対に秋になり、植物が枯れ、自然界の色が次第に失われると、開放的だった心は方向を変え、次第に自分の方へ向かっていく。秋になると物悲しい感じが

するものである。さらに冬になると心はより自分自身の方向へと向かい、自分自身と対峙するようになる。季節感という言葉以上に心で季節を感じ、また、心は世界から大きな影響を受けている。

例えば、ゾンネンホーフでは、クリスマスは単に宗教的行事としてだけではなく、人間の心に働きかける行事として行う。太陽の軌道が最も低く、日照時間も最も短いこの時期はゾンネンホーフのあるスイスは、一番寒い季節でありまた、夕方になるとすぐに真っ暗になる。そんな季節は、意識が自分へ向かう。この時期にキリストが生まれたことを祝うというとともに、ひとりひとりの心の中に新たな意識が生まれる、その喜びを祝うのである。ゾンネンホーフでは、1年の始まりはクリスマスであると捉えられている。

このように祝祭によって、外界から受けとるものを心に刻んでいくことによって、子どもの成長は支えられる。

ゾンネンホーフでの生活は、一見すると毎日同じようなくり返しのように感じられるが、リズムのある生活をとおして、まるでらせん階段を少しずつ登っていくかのように、ゆるやかに変化して行く。子どもたちもまた、ゆっくりとらせん階段を登るように成長していく。

障がいを持つ子どもたちは、ゾンネンホーフのそうしたゆるやかにもたらされるリズムのある生活によって生きる力が育まれていると言える。

4 まとめ～子どもの生きる力を育むために～

治療教育施設においては、第1に「食べる、寝る、遊ぶ」ことを中心に、体に働きかけることが重要であること。第2に祝祭の意味を改めて捉えなおし、祝うという意味で、心に働きかけることが重要であることを述べてきた。さらにこれらを実際に行う上で治療教育施設では、一貫したリズムのある生活が形成されていることを示した。本章ではこれまで述べてきた治療教育施設でのリズムのある生活をもとにしつつ、子どもがいかにして生きる力を育んでいくのかを考察する。

(1) 「食べる、眠る、遊ぶ」ことの重要性

「食べること」では、毎日朝昼夕の3回、決まった時間に時間をかけてゆっくりと、食物をしっかりと意識することが重要である。テレビを見ながら、慌ただしく食事をしたり、殺伐とした環境ではなく、安心できる静かで厳粛な雰囲気が大切である。また、食事の前に行うお祈りもまた食事のリズムを形成するもののひとつである。

「寝ること」つまり眠りと目覚めについても、一日の生活の流れを一つのリズムとしてみなし、眠りやすい環境を作ることが重要である。治療教育施設で行われているような「夕べの集い」は眠りに導くためには有効であろう。

一般の家庭で「夕べの集い」を行うための工夫としては、夕食後はテレビやインターネット、ゲームなどのメディアはなるべく消して、子どもに触れないようにすることが大切であろう。部屋の照明を落として、眠る直前には枕元で静かな歌や、お話を聞かせてあげることで落ち着いた気持ちで眠りの世界へ導くことができる。

目覚めの際は、治療教育施設ではスタッフ全員で歌を歌って起こしていたが、可能であれば家庭でそれをしてもらいたい。その他には、カーテンを開けて、外の光を寝室に入れる、窓を開けて外気を入れるなど、スムーズな目覚めに導くための工夫が考えられる。

最後に「遊び」についてである。遊びは、子どもの生きる力を育むための3つの活動～「食べる、寝る、遊ぶ」～の中で、家庭以外の施設（幼稚園や保育園、学童保育や学校など）で重点的に行うことが可能な活動である。もちろん家庭においても実践できる。

ここで大切なことは、可能な限り屋外で手足を使った遊びをすることである。自然に近い野山があればとても良い。坂道を登ったり下りたり、木登りをしたり、走ったりスキップしたり。子どもが自然に動きたくするような環境があり、それが毎日の生活のリズムの中に位置づいていることが望ましい。幼稚園や保育園などの施設では、園庭でもよい。子どもたちが時間を忘れて走り回って遊べるような環境であればよい。昨今は、「子どもの安全」に配慮するあまり、午後の活動時間に外遊びではなく、室内遊びのみを行ったり、DVDを視聴させている園も増えているようである。子どもにとって手足を使って思い切り遊ぶということがいかに重要であるかをもう一度捉えなおす必要がある。

子どもにとって遊びは、生きる力を育むための大切な活動であること、そのための環境を整えることが必要である。

(2) 心に働きかけることの重要性

心に働きかけるリズムのある生活として、季節の行事を祝い、子どもの心に刻んでいくことをあげた。単にお祭りとして楽しむのではなく、人の心に影響を与える季節の行事として祝うのである。

日本においても、正月、節分、ひな祭りや端午の節句、盆踊りなど、季節ごとに様々な祝祭がある。これらの多くは現在では本来の深い意味が失われ、単なる学校の行事やお祭りになってしまっている。さらに現在の消費社会にあって、これらの祝祭が商業主義に「汚染」されてしまっているようにも感じられる。祝祭の本来の意味を再認識し、祝い、子どもたちの心に刻んでいくこと。それは現代に生きる我々が、忘れ去ってしまった人間の持つ叡智を、もう一度取り戻すことになるのではないか。そうした大人の意識こそが大切であり、そのことにより子どもの生きる力は育まれる、筆者はそう考える。

5 おわりに

本稿では、子どもの生きる力を育むためには、第1に「食べる、寝る、遊ぶ」を中心に、体に働きかけることの重要性を述べた。第2には、祝祭の意味を改めて捉えなおし祝うという意味で、心に働きかけることの重要性について述べた。その際、人智学に基づいた治療教育施設で取り組まれている実践と理論をベースにした。

なお、本稿で述べた人智学的人間本性はその理論の一部であり、全容については示していない。家庭において、生きる力を育むための実践についてさらに論考を加えていくことが今後の課題である。

引用・参考文献

- (1) 前橋明「子どもの体の異変とその対策」体育学研究 49 pp197-208 2004年
- (2) 氏原寛、小川捷之、東山紘久、村瀬孝雄、山中康裕編 『心理臨床大事典』培風館 1992年
- (3) ルドルフ・シュタイナー『神秘学概論』西川隆範訳 イザラ書房 1992年
- (4) ルドルフ・シュタイナー『神智学—超感覚的世界の認識と人間の本質への導き—』高橋巖訳 イザラ書房 1977年
- (5) 西平直『シュタイナー入門』講談社現代新書 1999年
- (6) ミヒャエラ・グレックラー『医療と教育を結ぶシュタイナー教育』石川公子・塚田幸三訳 群青社 2006年
- (7) Rudolf Steiner *Heilpädagogischer Kurs* 1995 Ungekuerzte Ausgabe nach dem gleichnamigen Band der Rudolf Steiner Gesamtausgabe = 高橋巖訳『治療教育講義』ちくま学芸文庫 2005年
- (8) 山下直樹『気になる子どもとシュタイナーの治療教育』ほんの木 2007年

保幼小の連携のあり方を探る

名古屋市中村区 稲葉地保育園園長 奥村 紀子

I. はじめに

新保育所保育指針の改訂により「発達の連続性」「小学校との連携」がキーワードと言われ、少しずつ取り組みが始められている。子ども一人ひとりの育ちが継続していくことの大切さを感じているところである。ところが、なかなかつながりが深まらない現実やハードルの高さを感じられることがある。保育所保育指針や幼稚園教育要領が改訂されて5年経つ中で、保幼小の連携のあり方が以前とどう変わったのだろうかという疑問をもった。そこで、小学校との連携のあり方の現状を探ってみた。

II. 名古屋市内の現状

名古屋市は全国的にも珍しい、公立・私立の保育園、幼稚園で作っている「名古屋市幼児教育研究協議会」がある。その会と小学校が連携して各小学校区に「保幼小連絡協議会」がある。原則として、年2回の懇談会を開催している。

1. 保幼小連絡協議会の主なテーマ

① 保育園、幼稚園と小学校の相互理解

(例：左利きの対応、給食について、行事、子どもの生活状況等)

② 小学校に送り出した子どもの学校での生活の様子

③ 次年度に送り出す子どもの園生活の様子

④ 保育園、幼稚園、小学校を取り巻く諸問題（学校の5日制、トワイライト、連携内容）

⑤ 不審者情報、災害時の対応

こうしたテーマで懇談会を行うことで、保幼は、学校の方針を知ることができたり、園生活の子どもの姿や体験した内容を詳しく伝えることができる。

しかし、残念な実情として、対応の難しい保護者、集金状況、配慮の必要な児童の問題などの情報収集が中心になってしまい、相互理解にまでになっていない現状がある。学校の本音は、学級や学校運営の都合のために手っとり早く情報が欲しい様に思える。懇談会の趣旨の捉え方には学校区によって温度差があり、開催時間の制限もあり充実した懇談会にはなりにくい。学校長の思いに左右される現状も否めない。

2. 現在行われている小学校との主な交流の例

- ①小学校生活科でのお店屋さんごっこ、お祭りごっこで園児を招待してもらう
- ②入学前に「1年生を迎える会」を学校で開催。1年生による学校紹介の劇を観賞
- ③作品展、運動会、学芸会の見学
- ④1日入学。学校探検。給食の試食。授業の見学
- ⑤保育園、幼稚園の先生の授業参観
- ⑥入園式、卒園式、入学式、卒業式への相互の参加

上記のような交流で、園児は小学校の生活に憧れの気持ちを抱ける。小学生は先輩としての自覚や誇りが持てる機会となる。しかし、交流例の①～⑥についてどの小学校でも実施できるように懇談会で依頼するが、なかなか発展しない。



一年生の担任の先生が園のお茶会に参加



卒園式で小学校長先生がご挨拶



校長先生のお話に関心する園児たち



運動会見学



小学校の運動会を保育園児が見学

Ⅲ. 実践例

1. エピソード

作品展の見学で小学校を訪れた時、当園の園児は少し緊張したような、怖いような表情で、門をくぐった途端に無駄話がなくなり、シーンとするような姿を見せた。子どもたちにとって、学校はとても大きく不思議な世界なのか、威圧感を感じているのか、神妙だった。やがて小学生の絵に、「すごーい」「きれい！」の連発。知った児童の名前があると、「あっ！この子知ってる」と得意気だ。学芸会の時もガチガチの体操座りで膝を抱えて、可愛い姿を見せ、出し物を食い入るように見て、園に帰ってからもしきりに話題にしている。就学前検診に行く際も張り切って出かけていく。次の日は「名前がちゃんと言えたよ」と自慢する姿が見られた。

上記のような様子から、園児は小学校にとっても興味や憧れがある反面、未知の世界への不安も感じているようである。また、小学生をとっても大きな存在に感じるようだ。兄弟がいる子は、少し「小学校のことは知っているわ」と言う余裕を見せていた。このような交流は学校へのハードルを低くし、小学校への適応に効果があると思う。円滑に繋がれる第一歩ではないかと思われる。小学生も頼りにされている自分の存在を感じているようで園児への関わりは優しかった。



2. 小学校との交流事例（H保育園とS小学校）

日時	平成24年2月	午前9:30～10:30
場所	S小学校体育館	
内容	小学校の生活紹介	1年生がグループに分かれ、小学校生活を寸劇で紹介する 算数の授業風景、日課の紹介、放課の過ごし方 赤旗（天候等で校庭が使用できない合図）の説明 教室での遊び、コンピューター室、給食
	歌、伝承あそびの披露	ドラエモン「愛そのままで」・けん玉、こま回し



算数の授業風景の寸劇



小学校で毎日やることの紹介



給食の紹介 と 献立の説明



一緒に歌を歌う場面



あやとり や おはじき の伝承あそび



小学校の教室を見学



コンピューター室を体験

上記のようなH保育園とS小学校の取り組みは10年以上になるが、こうした交流の無い学区との温度差は大きいと考えられる。

3. 努力して交流が実現した保育園の事例

機会あるごとに校長先生と話し合い、2校との交流が実現した保育園の事例を紹介する。

交流内容は、スタンプラリーでの学校探検、図書館の利用、教室での勉強等を行う。交流に際しては、打ち合わせをして指導案を作成し、交流内容を確認して実施する。交流後は新聞を作成して掲示し、保護者に知らせる。こうした交流によって子どもたちは、自分たちが小学生になるイメージを具体的に持てたり、小学校に早く行きたいという期待を益々膨らませることができた。

子どもの様子	<p>年長の園児たちは保育園では一番大きくて頼りになる存在であるが、小学校では小さく可愛い存在に見える。子どもたちは、少々緊張気味で、不安や圧倒されているような様子が伺える。校庭や体育館の大きさに驚いていた。園児は一年生の子どもたちを尊敬や憧れの気持ちを持って見ていた。</p> <p>卒園児は照れながらも園長や保育士との再会を喜んでいた。</p> <p>こうした交流を通して、園児は環境が随分違う事を実感したり、勉強する意欲を抱いたように思える。</p>
--------	--

考察

交流を通し、園児は小学校に入学する事に憧れたり、学校のイメージが持てる。
 また、保幼の職員は卒園児の様子を見ることができ、その成長ぶりを見て小学校との連続性を実感できる貴重な機会となる。
 保幼の職員にとっては小学校の状況について知ることができ、相互理解に繋がると思われる。
 園児にとっては小学校に対するハードルが少し低くなったように感じた。
 子どもが経験する環境の変化が与える影響については、周りの大人たちが理解しておかないといけないと思う。



スタンプラリーでの出迎え



教室の見学



体育館の見学

行事計画表	園児	職員	保護者	関係者	備考
1学期	幼稚園入学式	入学式	入学式	入学式	入学式
2学期	運動会	運動会	運動会	運動会	運動会
3学期	卒業式	卒業式	卒業式	卒業式	卒業式

交流の計画案



教室の机と椅子の体験



図書室の体験

ゆりぐみ
 植田南小学校を
 訪問しました
 スタンプラリーを
 させてもらいました!!

1年2組の教室では席に座らせてもらい
 折り紙をプレゼントしてもらいました。
 「自分の机があっていいなあ、と子どもたちは
 嬉しそうに座っていました。」

<コンピューター室>
 コンピューターがたくさんある!! 「家のパソコンと
 似ているなあ」と興味津々の子どもたち。

<図書室>
 「本がたくさんあるね、
 本屋さんみたい!!、
 本を貸させてもらいました。」

交流後、保育園で新聞を作り掲示

IV. どうして保幼小の連携が必要なのか

幼児教育では、自分でやってみようとする「あそび」を通して学んできた。満足するまで続ける主体的な活動を大切にしている。一方で小学校教育では「教科等の学習」である。決められた時間続ける決められた活動となる。

保育園、幼稚園では生きる力の基礎を育てるため、様々な体験を通して、①人間形成の基礎となる豊かな心情 ②物事に自分から関わろうとする意欲 ③健全な生活を営むために必要な態度 を培うこととしている。

小学校では、生きる力を育てるため、学校生活全般が人間形成の場となる。

「生きる力」を培うことが保幼小全体を通じた目標と言える。加えて幼児期は生涯にわたる生きる力の基礎を培う時期と言える。

「こうしたい」、「ああしたい」というやる気と目的感を持ち達成する楽しさが分り、多様に動く・想像力を働かせたり操作したり構成したりしてあそびを楽しむということが具体的に分かっていく。これが学習の基盤となる。そうした育ちをバトンタッチしていくことが発達と学びの連続である。

小学校生活の変化に対応できにくい子どももいて（小1プロブレム）、学習に集中できず、授業がなりたたないこともあるので、対応できるように連携を活かす必要がある。子どもにとって知らない環境に飛び込むことは大きなストレスを感じているのだと思う。

どの子ども幼児教育から小学校教育に滑らかに繋がっていき、両方の教育が質の高いものになっていくことが連携の意義であると思う。

1. 交流、連携の中で出された意見

(1) 保育園、幼稚園から出された意見

- ①懇談会では交流会の機会をもっと作ってほしい事を要望し校長、教頭が理解してくれても現場の一年生の先生がやる気になってくれずに何年も保留のまま。新しいことを始めるには大変なエネルギーが必要なので手掛けない、事なかれ主義が残念だ。
- ②保育所保育指針改訂で児童要録の提出が法律で義務付けられたにも関わらず、小学校側はあまり関心を示さない印象がする。
- ③小学校の先生は保幼に指導計画、保育計画があることを知らず、ただ遊んでいるだけというイメージをもっている。
- ④入学時のみではなくその後も保育園の職員の知恵と力が必要とあらばいつでも連携の要求に応じる体制を整えておく必要がある。
- ⑤小学校によって考え方が違い保育園、幼稚園、小学校との連絡懇談会がまちまち。三団体が共通の認識をもてるような地方公共団体のような組織的な支援が必要ではないか。
- ⑥小学校側は入学後のトラブル回避の為、心配な個人情報を欲しがっているようだが、入学する子どもは心機一転新しいスタートを切りたいと思っているかもしれない。それなのに保育園、幼稚園から送った個人情報が固定観念を植え付けてしまうのはいかなものか。また保護者からの情報開示希望があって閲覧されることを考えると記入の内容が限定される。

(2) 小学校側から出された意見

- ①小学校学区に複数以上の幼稚園、保育園が存在し、公平に連携することが難しい。

②学校5日制になって教科のカリキュラムをこなすのに必死な中で交流まで考えていられない。

③児童要録は先入観が入るのでもらっても読まない、という意見の所もある。

(記入する方は言葉とかに気をつけて大変な労力を使っているにも関わらず。)

④入学してきてからが勝負だと思っているので連携の必要性を思わない、という校長先生の本音？(上記のことは小学校と中学校の連携の際に小学校の先生も感じていらっしやるそう。実際一部の校長先生に伺うと小学校と中学校も連携が取れていない現実があるそう。)

(3) 相互に共通する意見

①相互理解と言うがお互い教育要領や保育指針など知ろうとしてない。学びも必要だ。

子どもの見方を例にとっても教育の場ではまだまだ相対評価の視線が強い感じがする。保育園は絶対評価というかその子のありのままを受け止めている、そんな違いを感じる。

(4) その他の意見

①親父の会が発足して活動している園もあるが、保護者は小学校でもその活動を継続していきたく学校に無理難題を言っている。

以上、身近な現状を探り羅列してみると、保育園、幼稚園、小学校それぞれに大切にしていることや方針の違いがある事を改めて認識しなくてはならない事を感じる。

子どもの捉え方1つにしても、活動の過程を評価する保育園、幼稚園と成果を評価する学校教育とは違いがある。それを批判していても前には進まない。保幼小の連携に意義を感じ、子どものために模索しているのが私たち保育者ではあるが、熱意にゆだねられて成り立って行くのでは限界がある。もっとそれぞれを理解し合い、今後も諦めずに連携できるように取り組みを進めていく事や小学校との話し合いを続けていきたいと思う。



中村区の「保幼小連携」検討会

V. 今後の課題

相互理解

- ① 学校の理念、教育方針、教育目標を知る。
- ② 幼稚園、保育園も教育課程、保育課程を交わし合い保幼小で理解し合う。

- ③ 保幼小が同じテーマの研修を受け、共有できる知識、認識を持つ。
- ④ 要録を活かしてもらえるような記入など工夫する。「このように育っています」と責任をもってバトンタッチする。
- ⑤ 保幼小の連絡懇談会をもっと積極的に活用し連携の糸口を引っ張り出す。
- ⑥ 園の行事などに学校の先生を招待して少しでも園での生活ぶりを知ってもらう。

交流

- ① 小学校に行ける機会には積極的に訪問しよう。また、そんな機会を生み出していこう。
- ② 小学生が園に来る機会を歓迎する。給食を食べに来るなんていいのでは？
- ③ 自然との関わりを保育園、幼稚園から小学校へとつないでいこう。
- ④ 給食を通じ食育を幼児期から児童期につなげていこう。
- ⑤ 読書の習慣を保育園、幼稚園から小学校へとつないでいこう。
- ⑥ 夏休み等を活かして小学校の先生が保育を経験する。(人事交流)
- ⑦ 小学校の小動物、植物を観察させてもらう。

交流は派手なイベントでなくていいので、図書館の利用や本の貸し出し等を通して、小学校に出入りする事から、子どもには小学校への憧れが育つと思われる。

VI. まとめ

「保幼小の連携」は、「発達の連続性」を踏まえて子どもたちを理解して関わっていくことだと思う。小学校は、入学する子どもたちがゼロからのスタートではなく、すでに様々な力を蓄えている事を理解して受け入れて欲しい。そして小学校の先生と入学した子どもたちが信頼関係をしっかり築けることが望ましい。だからこそ、保幼小の連携のあり方を考えてみた。

今回は名古屋の一部の保育園、幼稚園、小学校の情報を収集したに過ぎないが、連携の状況の格差に驚かされた。対象を広げると、もっと差が著しいかもしれない。だからこそ、よりこの連携というテーマを意識するべきではないだろうか。

昨今の世界の幼児教育の状況を見ると、英米仏型「学校準備型」の認知発達を大切にする子育てから、北欧ドイツ型「人格形成」を大切にする、将来意味のある子育てに移行していると OECD が見解を述べていると聞いたことがある。

我が国の幼児教育は英米仏型で知識、技能を詰め込む、できる、できないと評価する傾向があったように思う。

保育指針が改訂されて大人が子どもを「ありのまま」に受けとめるとともに「子どもの思いに寄り添う」ということが話題になり実践されつつある。そのことは子どもが人として育つベースになるであろう。その中で子どもは主体的な行動を取りながら色々な体験や場面を通して「ひとりの人間」として育っていくのだと思う。それは乳児期、幼児期だけでは完成せず児童期、思春期、青年期と続い

ていくのである。そのつながりを分断してはならない。子ども一人ひとりの人生は過去、今、未来とつながっていくのだ。

保育園、幼稚園の職員が幼児教育に対して小学校に送り出すまでが自分の職務責任などというちっぼけな見解は許されない。長い展望、つまりは子どもの将来を見据えて、大人がリレーでバトンを渡していくように子どもの育ちを支えていくことが役割だと思う。しかし、リレーのようにスタートラインから手前は幼児教育で向こうは小学校教育とはいかないのではと思う。「バトンゾーン」に大きな意味があるのではないだろうか。そのためには**連携**が必要だ。連携は相互の教育の質が良くなる事も狙っていくべきだ。小学校の先生が10年の免許更新の際幼児教育を体験するというのはどうであろう。もちろん、幼児教育の場からも小学校に行かせて頂くという人事交流は大きな成果が期待できる気がする。実際に子どもに関わらねば問題を実感できない。

小学校が主導ではなく、保育園も幼稚園も対等に平等な連携を模索していくべきだ。

そして大きな問題は小学校も幼児教育の現場もとても忙しい。現在の業務より厄介なことが増えるという認識では発展していかない。連携することで業務がカットしていける、そんな連携が望ましい。そこにヒントがあると思える。

保幼小の三位一体の連携には、「今後の課題」として挙げたような様々なハードルが横たわっている。しかし、多大な労力を必要とする交流会の実施を必ずしも開催しなくても、交流が実現できないだろうか。その一つとして「紙面や書面の交流」というものが考えられる。小学校からは『学校便り』『クラス通信』『PTA 新聞』、園からは『園便り』『学年便り』などの書面をお互いに取り交わすことでも、十分に交流をなしていくのではないだろうか。最近では、各小学校もグランドデザインという形で教育の内容を発信しているので、そういう内容を広く園の関係者に伝えるだけでも小学校への理解が深まるのではないだろうか。

また状況の改善をただ待つという姿勢ではなく、当園では視点を変え、保幼小だけの連携にこだわり過ぎず、「地域との連携」を考えることで、「保幼小の連携」に刺激を与えるための取組みを始めている。その一部を紹介すると、「子育てフォーラム」として学区の小学校長先生を講師に、地域の保護者やその他の方も参加できるフォーラムを開催している。

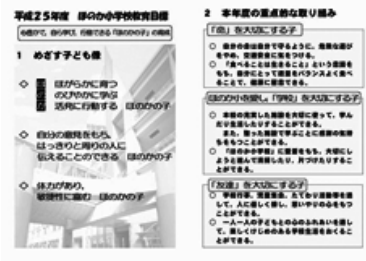
また、「地域の子育て会」として地域の関係者に声をかけ、「地域の中で子どもを育てていく」という思いを共有するための意見の交換会を開催している。安心して子育てのできる地域を作っていくことは魅力あるまちづくりにもつながると考えると、さまざまな立場の地域の関係者にとっても非常に貴重なテーマ内容である。地域に根差す保育園のような場所から発信していかななくてはならないテーマであると考えている。

子どもたちの乳幼児期は短い。できることからの積み上げによって、子どもたちの環境が整う一助になれば、それがたとえ小さな変化だとしても十分に価値のあることではないだろうか。

これまで述べたように、まだまだ保育所、幼稚園、小学校の連携は十分と言える状態ではないので、課題として明らかになった事を踏まえて、今後の連携のあり方をさらに検討していきたいと考えている。

<参照1> 書面・紙面の情報のやり取り

小学校からはグランドデザイン、学校便り、クラス通信、PTA 新聞など、園からは園便り、学年便り、などの書面の交流を行う。



グランドデザイン
各小学校がそれぞれ目指す子ども像、年度で力を入れる取り組みなどをわかりやすく掲げている。ホームページでも閲覧できる。

<参照2> 当園での取組み

(1) 子育てフォーラム

学区の校長先生が小学校に入学してくるまでの子育てがとても大事であることをテーマに、当園で「子育てフォーラム」を開催。地域の未就園児や保育園児、幼稚園児の保護者、地域の子育て会の方々、区内の公立保育園の園長先生、私立幼稚園の先生が参加して下さる。講演の間、子育てサークルの方々が託児を引き受けてくださる。

(2) 地域の子育て会

地域の区政協力委員長、小学校長、民生委員、主任児童委員、保健師、児童館職員、公立保育園長、民間保育園長、民間幼稚園長、地域の大学の幼児教育関係者による子育て会の開催（2ヶ月に1回）

地域で行っている子育て広場の計画、開催報告。保健師の保健報告。地域の子どもの情報交換。災害対策。各団体の相互理解、等



小学校の校長先生を講師に子育てフォーラムを開催

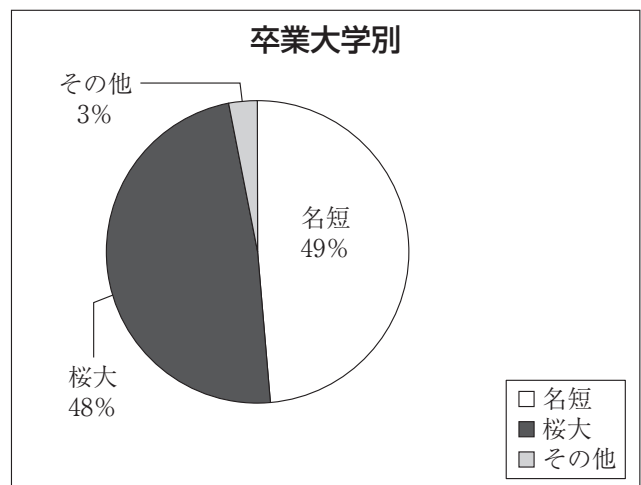
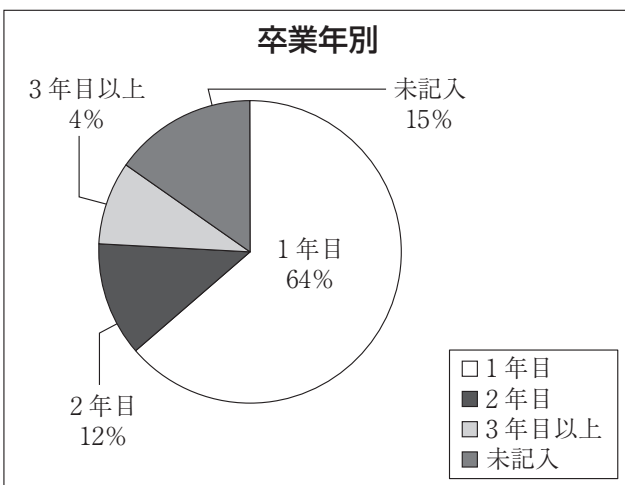
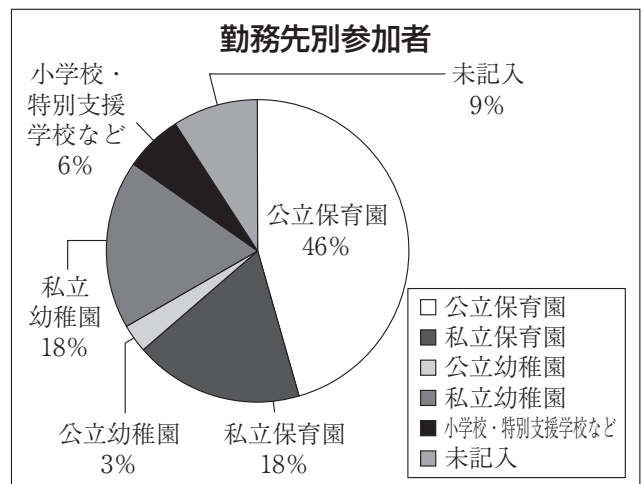
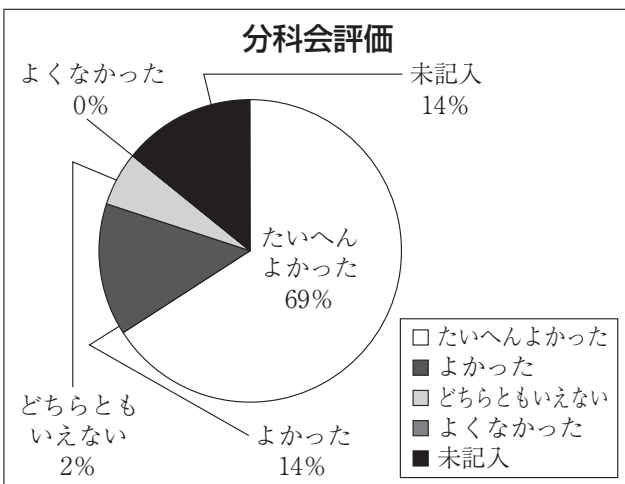
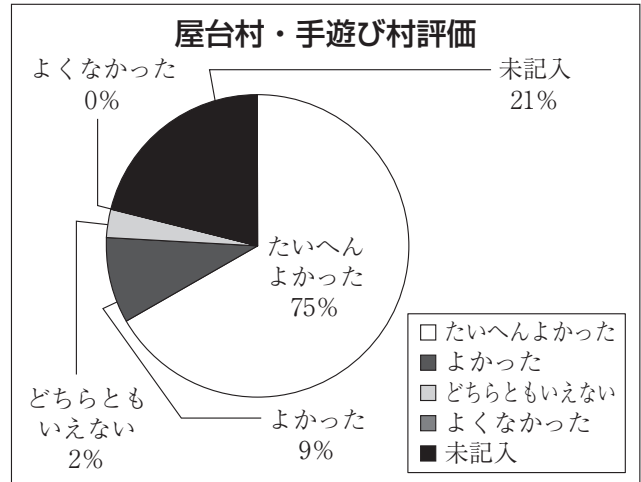
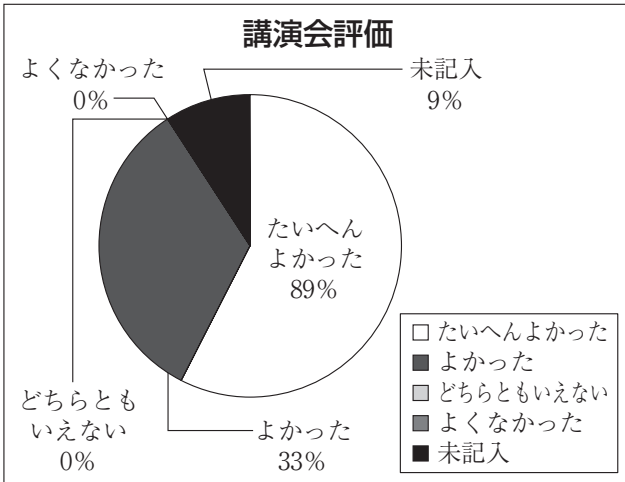


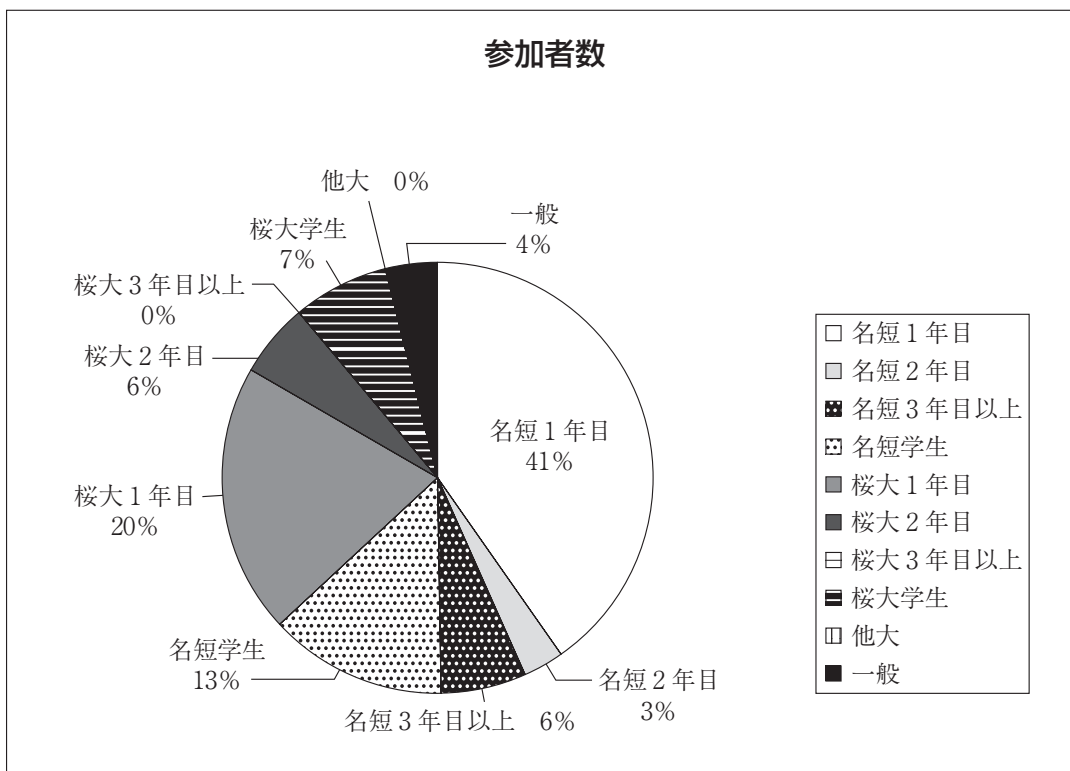
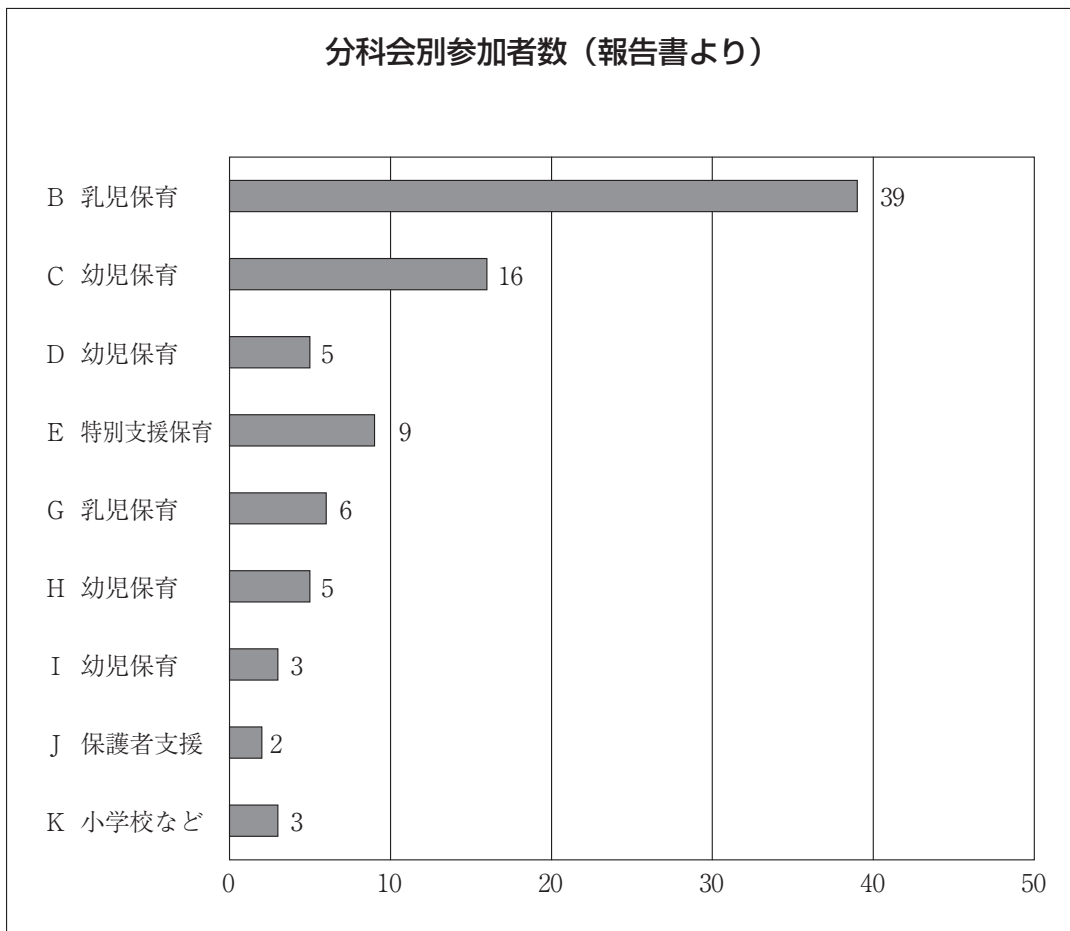
地域の関係者へ呼びかけて、「子育て会」を開催

資料

2013年度 事業報告

1. 第11回夏季保育研究セミナー





2013年度夏季保育研究セミナーのアンケートから（感想）

- ・分科会のディスカッション良かったです。ありがとうございました。
- ・ありがとうございました。
- ・もし自分が被災したとき、何ができるかな、自分の役割を考えながら聞きました。
- ・久しぶりに大好きな名短に来られて嬉しかったです。
- ・保育のネタや保育のこと学べて良かったです。
- ・講演会では、生の声が聞けて本当に良かった。
- ・参加したことで、いろいろな情報が得られ大変良かったです。
- ・中川先生の手遊びがとってもたのしく充実していました。分科会は、卒業生の方からの現在の実習生の様子や、保育現場、保護者の話が聞けてとても良かったです。お世話になりました。
- ・524教室で友だちと一緒に講演を聴けて、学生に戻った気分になりました。大学2年のときに参加して私も就職したらこのセミナーに参加したい、また桜花に戻ってきたいと思ったので、その思いが叶って良かったです。
- ・友だち、先生に会えて元気をもらえた。保育のネタも増えて、はやく子どもと一緒にやってみたい！
- ・久しぶりに集まれて良かったです。
- ・色々学ばせて頂き今後の保育の参考になりました。
- ・分科会では、先輩や先生方からたくさんお話をきくことができ、すごく勉強になりました。これから保育に生かしていきたいと思います。ありがとうございました。
- ・もっと時間がほしかったです。全然足りない！
- ・やっぱり自分の現状を話したり、相談のってもらったり、人の不安を聞くことは良いことだなと思いました。
- ・色々な職場で同じような悩みを持っている人のことを聞けたりアドバイスをいただけて良かったです。
- ・良かったです。学生に1日戻れました。

2. 2013年度 冬期講演会のまとめ

冬期講演会は、フリージャーナリストの猪熊弘子氏（東京都市大学人間科学部客員准教授）を迎え、「子どもの命を守る保育園の役割を考える」をテーマにお話しいただきました。

受講者は教職員を含めて194名で、ほぼ満席の盛況ぶりでした。講演会終了後のアンケートには165名の方が回答くださいました。集計結果を下表に示します。

集計からは、本学の卒業生よりも他大学出身の保育関係者が多いこと、また現役の学生においても他大学からの参加者が多いことが見て取れます。これは本学のセミナーが地域社会に貢献している証拠でもあります。しかし、母校が提供するスキルアップ、パワーアップのせっきくの機会を本学関係者にもっと活用してほしいと本研究所では願っています。それには本研究所も早期に準備を開始し、ご案内を早くすべきかと反省しています。来年度はさらに多くの方にご参加いただきたいと思います。

講演内容は、実際に起こった事故事例の紹介、家庭や保育園での事故防止対策、規制緩和による新制度の危うさ、など多岐にわたってのお話しでした（詳細については、猪熊氏自身が「講演会報告」で述べられています）。受講者の満足度は「大変良かった」「よかった」を合わせて95.8%と、大好評でした。

アンケートの自由記述欄には、「まあ、いいか」の油断が招く危険性に言及したものが多数ありました。中には“保育者になるのが怖くなりました”というものもあり、危機管理に目を向けるだけでなく、保育する責任の重大さを感じ取った学生もいたようです。

危険防止策としては“お散歩マップ作り（園外の危険場所を特定）”が多くの賛同を得ていました。また、東海地域でも心配される“震災に対する保育者の心構え”や“チームで共有し、危険を回避する”など保育者自身ができることを即時に実行しようとの建設的な意見も多々あり、頼もしく感じた次第です。その他、“民営化（認可保育所）の実態”“横浜市の待機児童0の実態”など、「聞くと見るとでは大違い」の報告に驚きの声も多く記されていました。これに関連して新制度の是非についての考え、行政の対応のあり方についても多くのご意見が寄せられました。数合わせだけの危うい制度ではなく、子どもや保護者のことを真に考えたより良き制度が望まれます。

90分の講話はあっという間に過ぎ、“もう少し話が聞きたかった”“時間が短く…”“後半部分を詳しく聞きたかった”との記述も多く、受講者の心に響いた講演でした。（中村淳子）

表) 2013年度 猪熊弘子氏 講演会アンケート集計

アンケート 回答者内訳	本学との関係	数	講演内容について				
			大変 よかった	よかった	普通	あまり よくなかった	未記入
保育所・幼稚園 関係者	本学卒業生以外	68	45	19	4	0	0
保育所・幼稚園 関係者	本学卒業生	43	37	3	0	0	3
教職員（小・中・高・大）		1	1	0	0	0	0
一般参加・その他		8	5	3	0	0	0
他大学学生		26	14	12	0	0	0
本学学生		14	11	3	0	0	0
本学教職員（非常勤講師の方を含む）		5	4	1	0	0	0
計		165	117	41	4	0	3
		100%	71.0%	24.8%	2.4%	0%	1.8%

3. 子育て支援講座の開催について

	講師の氏名	テーマ	日程	参加人数
保育科	高須 裕美	幼児の音楽あそび Part II	11月22日 午前中	46組 52名
保育科	岡林・神谷	子育ておしゃべり会	12月16日 午前中	6名
保育学部	石山 英明	はじめての合奏 2・3歳児	1月23日 午前中	25組 30名
保育学部	田端 智美	はじめてのえのぐあそび 2・3歳児	2月18日 午前中	23組 25名

4. 2013年度 子育て交流会・支援室開放の経過・参加人数・内容

月日	曜日	内容	天気
4月12日	金	第1回交流会(0歳児) 天気:晴 子ども6名 大人5名 わらべうた「ちょちちょちあわわ」 親子ふれあい「くつついた」「一本橋こちょこちょ」 ゆさぶり遊び「バスにのって」 絵本「くつついた」「いないいないばあ」 支援室での約束スタッフ紹介 (荒川)	
4月15日	月	第1回支援室開放 天気:晴 子ども9名 大人9名 自由遊び	
4月16日	火	第2回交流会(1歳児) 天気:晴 子ども22名 大人22名 親子ふれあい「ピットンコ」 手遊び「一本橋こちょこちょ」「アンパンマン」 集団遊び「大なみ小なみ」 絵本「くだものぱっくん」 支援室での約束 (水谷)	
4月18日	木	第2回支援室開放 天気:晴 子ども6名 大人6名 自由遊び	
4月19日	金	第3回交流会(2歳児) 天気:晴 子ども30名 大人25名 手あそび「パンダうさぎコアラ」 まねっこ遊び「こんなこと、できますか」 親子ふれあいわらべうた「あんたがたどこさ」 絵本「ノンタンぶらんこのせて」 支援室での約束 (荒川)	
4月22日	月	第3回支援室開放 天気:晴 子ども9名 大人9名 自由遊び	
4月23日	火	第4回交流会(3歳児) 天気:晴 子ども0名 大人0名 どなたも来られなかったのでいろいろなおもちゃを拭きました。 (水谷)	
4月24日	水	第5回交流会(2歳児) 天気:雨 子ども11名 大人10名 学生12名(保育学部2年布施ゼミ) 手遊び「アンパンマン」 パネルシアター「くだもの」(学生)	
		わらべうた「ひとりきな」「たんぼたんぼ」 ふれあい遊び 音楽「モミモミマッサージ」 「やさいのうた」「バスにのって」 絵本「ほんちんぱん」 ごあいさつ「さよならあんころもち」 (村井)	
4月25日	木	第4回支援室開放 天気:晴 子ども6名 大人6名 自由遊び	
4月26日	金	第6回交流会(1歳児) 天気:晴 子ども17名 大人17名 (あいさつ:支援室での約束) ゆさぶり遊び「おうまの親子」 あやし遊び「ちょちちょちあわわ」 絵本「だるまさんが」だるまさん遊び 子守歌「ゆりかごのうた」 (荒川)	
5月7日	火	第7回交流会(2歳児) 天気:晴 子ども21名 大人14名 手遊び「パンダうさぎコアラ」「一本橋こちょこちょ」 「りんごがコロコロ」 親子遊び「びったんこ」「アンパンマン」	

	絵本「もこもこもこ」 三つの注意事項 (水谷)				「アンパンマン」 絵本「ひよこ」 作って遊ぼう「紙パックと ストローのとんぼ」 (水谷)
5月8日	水	第8回交流会(0歳児) 子ども6名 大人5名 学生13名(保育学部2年中 村ゼミ) 手遊び「あたまかたひざぼ ん」「一本橋こちょこちょ」 親子遊び「バスにのって」 (CD利用) (学生) 絵本「よくきたね」 ふれあい遊び「ら、ら、ら、 ぞうきん」 わらべうた「ちょちちょち あわわ」 日焼け防止についての注意 事項 (荒川)	天気: 晴		
5月9日	木	第5回支援室開放 子ども6名 大人5名 自由遊び	天気: 晴		
5月10日	金	第9回交流会(3歳児) 子ども1名 大人1名 親子遊び「バスにのって」 手遊び「1本と1本で拍手」 絵本「がちゃがちゃどんど ん」「たまごのえほん」 (荒川)	天気: くもり		
5月13日	月	第6回支援室開放 子ども10名 大人9名 自由遊び	天気: 晴		
5月14日	火	第10回交流会(3歳児) 子ども0名 大人0名 色画用紙の整とんをしまし た。 (水谷)	天気: 晴		
5月16日	木	第7回支援室開放 子ども7名 大人7名 自由遊び	天気: 晴		
5月17日	金	第11回交流会(1歳児) 子ども22名 大人22名 ゆさぶり遊び「おうまのお やこ」 手遊び「ちょちちょちあわ わ」「むすんでひらいて」 「アンパンマン」 絵本「たまごのあかちゃん」 (荒川)	天気: 晴		
5月20日	月	第8回支援室開放 子ども10名 大人10名 自由遊び	天気: 晴		
5月21日	火	第12回交流会(2歳児) 子ども18名 大人15名 手遊び「パンダうさぎコ アラ」「一本橋こちょこちょ」	天気: 晴		
5月22日	水	第13回交流会(1歳児) 子ども12名 大人12名 学生12名(保育学部2年浅 野ゼミ) 歌「どんないろがすき」 (学生) わらべうた「たんぼたん ぼぼ」 音楽「びったんぱ」「ビスケ ットをやきましょう」 ふれあい遊び「バスにのっ て」 絵本「くだもの」 (村井)	天気: 晴		
5月23日	木	第9回支援室開放 子ども7名 大人7名 自由遊び	天気: 晴		
5月24日	金	第14回交流会(3歳児) 子ども0名 大人0名 玩具のアルコール消毒 布団、ぬいぐるみの日光消 毒 (荒川)	天気: 晴		
5月27日	月	第10回支援室開放 子ども15名 大人15名 自由遊び	天気: くもり		
5月28日	火	第15回交流会(1歳児) 子ども15名 大人15名 集団遊び「パンダうさぎコ アラ」 手遊び「一本橋こちょこち ょ」「りんごがコロコロ」 「アンパンマン」 絵本「あっ!」 作って遊ぼう「くるくるへ りコプター」 (水谷)	天気: くもり		
5月29日	水	第16回交流会(3歳児) 子ども1名 大人1名 学生28名(保育学部2年石 山ゼミ・基村ゼミ) 歌「どんないろがすき」お もちゃ、シフォン布 (村井) 大型絵本「三びきのこぶた」 歌、合奏つき (学生)	天気: くもり		
5月30日	木	第11回支援室開放 子ども11名 大人9名 自由遊び	天気: くもり		
5月31日	金	第17回交流会(2歳児) 子ども24名 大人18名 手遊び「手をたたこう」「じ ゃんけん」	天気: 晴		

		ペープサート「だれかなだれかな」 絵本「なにかななにかな」「だれかなだれかな」 (荒川)	
6月3日	月	第12回支援室開放 子ども15名 大人13名 自由遊び	天気：くもり
6月4日	火	第18回交流会（3歳児） 子ども1名 大人1名 作って遊ぼう「紙パックとストローのトンぼ」 「くるくるヘリコプター」 (水谷)	天気：晴
6月5日	水	第19回交流会（2歳児） 子ども15名 大人12名 学生14名（保育学部2年小嶋ゼミ） わらべうた「ひとりきな」 「きゃあろの目玉に」 うた「かえるのうた」 プラ プラ人形 音楽「ぎゅーぼん」「やさいのうた」 「バスにのって」 ペープサート「まんまるさん」 ごあいさつ「さよならあんころもち」 (村井) かえるのパペット大型絵本「びょーん」 歌「かえるのうた」 輪唱紙コップのかえる（プレゼント） (学生)	天気：晴
6月6日	木	第13回支援室開放 子ども12名 大人10名 自由遊び	天気：くもり
6月7日	金	第20回交流会（1歳児） 子ども18名 大人17名 ゆさぶり遊び「おうまのおやこ」「だっこしてぎゅっ」 手遊び「だんごだんご」「ちよちよちあわわ」 「アンパンマン」 絵本「はくしゅばちばち」「ママだいすき」 (荒川)	天気：晴
6月11日	火	第21回交流会（2歳児） 子ども16名 大人12名 集団遊び「ロンドン橋」 親子遊び「きゃあろの目玉に」 手遊び「パンダうさぎコアラ」「りんごがコロコロ」 「一本橋こちょこちょ」 絵本「ぼんぼんポコポコ」 (水谷)	天気：くもり時々雨
6月12日	水	第22回交流会（0歳児） 子ども14名 大人10名 おなまえ「はーい」 紙芝居「はーい」 こちょぐり遊び「ありさんの山のぼり」 さくらちゃんこんにちは 絵本「いないいないばあ」 手遊び「アンパンマン」 (荒川)	天気：晴
6月13日	木	第14回支援室開放 子ども9名 大人5名 自由遊び	天気：晴
6月14日	金	第23回交流会（3歳児） 子ども9名 大人7名 はじまりの手遊び「一本と一本で手をたたこう」 絵本「ぞうくんのさんぼ」 手遊び「キャベツはキャツキャツキャツ」 「あたまのうえでトン」 (荒川)	天気：晴
6月17日	月	第15回支援室開放 子ども15名 大人14名 自由遊び	天気：晴
6月18日	火	第24回交流会（1歳児） 子ども13名 大人13名 集団遊び「大なみ小なみ」 手遊び「きゃあろの目玉に」 「一本橋こちょこちょ」 「りんごがコロコロ」「アンパンマン」 絵本「おててがでたよ」 (水谷)	天気：晴
6月19日	水	第25回交流会（3歳児） 子ども6名 大人4名 学生14名（保育学部2年中ゼミ） 音楽「やさいのうた」 わらべうた「きゃあろの目玉に」 ふれあい遊び ごあいさつ「さよならあんころもち」 絵本「ぞうくんのあめふりさんぼ」 (村井) 手遊び「一番星キラキラ」 紙芝居「星の紙芝居」 製作「たなばたかざり」 (学生)	天気：雨のち曇り
6月20日	木	第16回支援室開放 子ども6名 大人5名 自由遊び	天気：雨
6月21日	金	第26回交流会（1歳児） 子ども12名 大人：8名 手遊び「くまさんとくまさんで手をたたこう」	天気：雨

		「アンパンマン」 紙芝居「はいーい」 絵本「だるまさんが じゃんけん遊び」「くまさん とくまさん」 さようなら (荒川)				うた「かえるの合唱」ブラ ブラ人形 わらべうた「きゃあろの目 玉に」 音楽「バスにのって」「やさ いのうた」 絵本「やさいじゃぶじゃぶ」 「ぞうくんのあめふりさん ほ」 (村井)
6月24日	月	第17回支援室開放 子ども7名 大人6名 自由遊び	天気：くもり			大型絵本「だるまさんと」 親子遊び「ら・ら・ら・ぞ うきん」 (学生)
6月25日	火	第27回交流会 (3歳児) 子ども8名 大人7名 集団遊び「あぶくたった」 親子遊び「きゃあろの目玉 に」「一本橋こちょこちょ」 エプロンシアター「3びきの 子ぶた」 (水谷)	天気：晴			7月4日 木 第18回支援室開放 子ども14名 大人10名 自由遊び 天気：くもり
6月26日	水	第28回交流会 (2歳児) 子ども8名 大人7名 学生14名 (保育学部2年辻 岡ゼミ) うた「かえるの合唱」 わらべうた「きゃあろの目 玉に」 音楽「たべちゃうぞ」「やさ いのうた」「バスにのって」 紙芝居「でんぐりがえる」 (村井)	天気：雨			7月5日 金 第32回交流会 (3歳児) 子ども6名 大人5名 手遊び「あたまのうえでト ン」 色水遊び 絵本「がちゃがちゃどんど ん」 (荒川)
		うた「おもちゃのチャチャ チャ」 紙芝居「ボールぼん」 親子遊び「むっくりくまさん」 (学生)				7月8日 月 第19回支援室開放 子ども12名 大人10名 自由遊び 天気：晴
6月28日	金	第29回交流会 (1歳児) 子ども20名 大人19名 手遊び「グーパッ!!」「だ んごだんごくっついた」 「ちょちちょちあわわ」「ア ンパンマン」 ゆさぶり遊び「おうまのお やこ」「バスにゆられて」 親子遊び「デパートに上が ります」 大型絵本「たまごのあかち ゃん」 (荒川)	天気：くもり			7月9日 火 第33回交流会 (2歳児) 子ども23名 大人18名 集団遊び「水あそび」 絵本「でてこいでてこい」 手遊び「アンパンマン」「一 本橋こちょこちょ」 (水谷)
		7月2日 火 第30回交流会 (1歳児) 子ども17名 大人16名 大型絵本「だるまさんが」 手遊び「一本橋こちょこち ょ」「アンパンマン」 「りんごがコロコロ」 (水谷)	天気：晴			7月10日 水 第34回交流会 (0歳児) 子ども5名 大人5名 学生13名 (保育学部2年古 畑ゼミ) わらべうた「ちょちちょち あわわ」 絵本「こねこがにゃあ」「も こもこもこ」 手遊び「アンパンマン」 (荒川)
		7月3日 水 第31回交流会 (2歳児) 子ども18名 大人14名 学生14名 (保育学部2年藤 田ゼミ)	天気：くもり			手遊び「あたまかたひざボ ン」 「きゅうりができた」 親子遊び「おうまのおやこ」 (学生)
						7月11日 木 第20回支援室開放 子ども4名 大人3名 自由遊び 天気：晴
						7月12日 金 第35回交流会 (1歳児) 子ども23名 大人21名 水遊びについて (気をつけ ることの話) 10:30～水遊び 天気：晴

		11:15～絵本「もこもこもこ」 手遊び「アンパンマン」 (荒川)			自由遊び
9月3日	火	第36回交流会(1歳児) 天気:曇り 子ども13名 大人13名 集団遊び「大なみ小なみ」「ロンドン橋」 手遊び「アンパンマン」 絵本「くつついた」 (水谷)		9月13日	金 第41回交流会(1歳児) 天気:晴 子ども20名 大人19名 手遊び「1本と1本で手をたたこう」 親子遊び:ゆうえんちへいこう「エレベータ」 「メリーゴーランド」 「ひこうき」「自販機」 絵本「だるまさんが」 (荒川)
9月4日	水	第37回交流会(2歳児) 天気:雨 子ども8名 大人7名 学生4名(保育科2年吉見ゼミ) 学生16名(保育科1年橋本ゼミ) わらべうた「ゆすらんゆすらん」「きゃあろの目玉に」 音楽「やさいのうた」「バスにのって」 絵本「ぞうくんのあめふりさんぽ」 (村井) 手遊び「アンパンマン」 絵本「だいすきぎゅっぎゅっ」 (学生)		9月17日	火 第42回交流会(3歳児) 天気:晴 子ども13名 大人9名 手遊び「アンパンマン」 作って遊ぼう「新聞紙のコマ」 絵本「へびのみこんだなのみこんだ」 (水谷)
9月5日	木	第21回支援室開放 天気:くもり 子ども15名 大人12名 自由遊び		9月18日	水 第43回交流会(1歳児) 天気:晴 子ども16名 大人14名 わらべうた「えっちらこ」 「きゃあろの目玉に」 音楽遊び「たべちゃうぞ」「バスにのって」 「やさいのうた」 絵本「どっちのてにはいつてるのか?」 「あぶくたった」 ごあいさつ「さよならあんころもち」 (村井)
9月6日	金	第38回交流会(3歳児) 天気:晴 子ども14名 大人9名 手遊び始まるよ「1本と1本で手をたたこう」 絵本「めのまどあけろ」 (荒川)		9月19日	木 第24回支援室開放 天気:晴 子ども5名 大人5名 自由遊び
9月9日	月	第22回支援室開放 天気:晴 子ども7名 大人7名 自由遊び		9月20日	金 第44回交流会(2歳児) 天気:晴 子ども7名 大人6名 手遊び「かにさんジャンケン」「まねっこあそび」 「これはなあに?」中からでてくるものはなあに? 絵本「ノントンおねしよでション」 (荒川)
9月10日	火	第39回交流会(2歳児) 天気:曇り 子ども11名 大人9名 作って遊ぼう「新聞紙のコマ」 絵本「ポケット」 手遊び「アンパンマン」 (水谷)		9月24日	火 第45回交流会(1歳児) 天気:晴 子ども12名 大人12名 作って遊ぼう「新聞紙のコマ」 手遊び「アンパンマン」「一本橋こちょこちょ」 絵本「くだものパッケン」 (水谷)
9月11日	水	第40回交流会(0歳児) 天気:晴 子ども5名 大人8名 手遊び「ちょちょちあわわ」 ひざにのせてゆらゆら「ゆりかごのうた」 ゆさぶり遊び(バスタオルを使って) 絵本「だるまさんが」 さよなら「アンパンマン」 (荒川)		9月25日	水 第46回交流会(2歳児) 天気:晴 子ども7名 大人6名 学生13名(保育学部2年太田ゼミ) わらべうた「きゃあろの目玉に」「えっちらこ」
9月12日	木	第23回支援室開放 天気:晴 子ども9名 大人8名			

	音楽カセット「たべちゃうぞ」 手遊び「やさいのうた」 ごあいさつ「さよならあんころもち」 (村井) 手遊び「かいだん登って」「もしもね」 カップシアター「3匹の子ぶた」 手作りおもちゃで遊ぶ(プレゼント) (学生)		学生17名(保育科1年岡林ゼミ) 自由遊び 手遊び「アンパンマンのおでかけ」 「パンダうさぎコアラ」 (学生)
9月26日 木	第25回支援室開放 子ども6名 大人7名 自由遊び	天気:晴	10月10日 木 第51回交流会(3歳児) 天気:晴 子ども6名 大人5名 作ってあそぼう「サル山のほり」 手遊び「アンパンマン」 絵本「とりかえっこ」 (水谷)
9月27日 金	第47回交流会(3歳児) 子ども20名 大人13名 手遊び「1本橋こちょこちょ」 「1本と1本で」 絵本「さつまのおいも」「やきいもやきいも」 さよなら「アンパンマン」 (荒川)	天気:晴	10月16日 水 第52回交流会(0歳児) 天気:台風 本日台風の影響で大学休校の為、支援室の交流会は中止にしました。 (村井)
9月30日 月	第26回支援室開放 子ども9名 大人7名 自由遊び	天気:晴	10月17日 木 第53回交流会(1歳児) 天気:晴 子ども15名 大人15名 集団あそび「大なみ小なみ」 「おうまのおやこ」 手遊び「アンパンマン」「りんごがコロコロ」 「一本橋こちょこちょ」 大型絵本「だるまさんの」 (水谷)
10月2日 水	第48回交流会(3歳児) 子ども15名 大人9名 わらべうた「えっちゃんこ」 音楽あそび「やさいのうた」 「バスにのって」 絵本「グリーンマンのピーマンマン」 ごあいさつ「さよならあんころもち」 (村井)	天気:晴	10月18日 金 第54回交流会(2歳児) 天気:晴 子ども12名 大人10名 手遊び「かにさんじゃんけん」 ボーリング作り 絵本「こねこがにゃあ」 おわりのあいさつ「アンパンマン」 (荒川)
10月3日 木	第49回交流会(1歳児) 子ども15名 大人15名 手遊び「パンダうさぎコアラ」 「1本橋こちょこちょ」 「りんごがコロコロ」 「アンパンマン」 絵本「でてこいでてこい」 (水谷)	天気:晴	10月21日 月 第28回支援室開放 子ども4名 大人3名 自由遊び
10月4日 金	第50回交流会(2歳児) 子ども14名 大人12名 手遊び「かにさんじゃんけん」 親子あそびひこうき→ロボット→てつぼう→ゆりかご 絵本「だれかなだれかな」 ペーパークラフト「だれかなだれかな」 おわりのあいさつ「さよならアンパンマン」 (荒川)	天気:くもり	10月22日 火 第55回交流会(1~3歳児) (幼稚園ホール) 天気:くもり 子ども45名 大人38名 作ってあそぼう「紙玉おとし」 手遊び「パンダうさぎコアラ」 「一本橋こちょこちょ」 「どんぐり」 「アンパンマン」 絵本「たまごのあかちゃん」 大型絵本「だるまさんが」 (水谷)
10月9日 水	第27回支援室開放 子ども14名 大人11名	天気:くもり	10月23日 水 第56回交流会(3歳児) 天気:くもり 子ども15名 大人11名 学生17名(保育科1年鏡ゼミ) わらべうた「ひとりきな」 音楽「やさいのうた」「たべちゃうぞ」 「バスにのって」

		絵本「アリのおでかけ」「ねないこだれだ」 あいさつ「さよならあんころもち」 (村井) 手遊び「グットパン」 親子あそび「つんつんつんとんとん」 (学生)			子ども14名 大人10名 作ってあそぼう折り紙ドミノ「コットントン」 手遊び「どっこやがいん」「りんごがコロコロ」 「アンパンマン」 絵本「つみき」 大型絵本「だるまさんの」 (水谷)	
10月24日	木	第29回支援室開放 子ども8名 大人7名 自由遊び	天気：くもり	11月6日	水	第62回交流会(3歳児) 天気：晴 子ども17名 大人12名 学生16名(保育科1年小川雄ゼミ) わらべうた「しんわりたんわり」 音楽「たべちゃうぞ」「やさいのうた」「バスにのって」 パネルシアター「バナナのおやこ」 あいさつ「さよならあんころもち」 (村井)
10月25日	金	第57回交流会(1歳児) 天気：晴 子ども13名 大人12名 手遊び「ちょちよちあわわ」「いとまきまき」 親子あそび「バスにのって」 大型絵本「だるまさんの」 絵本「てんてんてん」 おわりのあいさつ「アンパンマン」 (荒川)		11月7日	木	第31回支援室開放 天気：くもり 子ども5名 大人5名 自由遊び
10月28日	月	第30回支援室開放 天気：晴 子ども4名 大人3名 自由遊び		11月9日	土	第32回(大学祭)支援室開放 天気：晴 子ども8名 大人12名 自由遊び
10月30日	水	第58回交流会(2歳児) 天気：晴 子ども16名 大人14名 学生17名(保育科1年高須ゼミ) わらべうた「かくかく」「えっちらこおっちらこ」 うた「どんな色が好き」 絵本「アリのおでかけ」「ねないこだれだ」 (村井) 体あそび「パイナポー体操」 歌「ぞうさん」「アンパンマン」「とんぼのめがね」 (学生)		11月10日	日	第33回(大学祭)支援室開放 天気：雨 子ども2名 大人3名 自由遊び
10月31日	木	第59回交流会(3歳児) 天気：晴 子ども13名 大人8名 作ってあそぼう折り紙ドミノ「コットントン」 絵本「ねずみくんのチョッキ」 手遊び「アンパンマン」 (水谷)		11月12日	火	第63回交流会(1歳児) 天気：くもり 子ども13名 大人13名 作ってあそぼう折り紙ドミノ「コットントン」 手遊び「どっこやがいん」「りんごがコロコロ」 「一本橋こちょこちょ」「アンパンマン」 絵本「いないいないばあ」 (水谷)
11月1日	金	第60回交流会(1歳児) 天気：晴 子ども15名 大人13名 お返事「はーい」 手遊び「かいぐり」「どんぐり」 親子あそび「あんたがたどこさ」 絵本「どこへいくの」 紙芝居「ワンワン」 終わりのあいさつ「アンパンマン」 (荒川)		11月13日	水	第34回支援室開放 天気：晴 子ども2名 大人2名 学生17名(保育科1年山下ゼミ) 自由遊び 手遊び「むすんでひらいて」 「焼き芋グーチャーパー」 (学生)
11月5日	火	第61回交流会(2歳児) 天気：晴		11月14日	木	第35回支援室開放 天気：晴 子ども10名 大人9名 自由遊び
				11月15日	金	第64回交流会(2歳児) 天気：雨 子ども10名 大人9名

	手遊び「かにさんジャンケン」「一本と一本で手をたたこう」 絵本「パンだいすき」「だるまさんと」 親子あそび「〇〇ちゃんと△△」 さよなら「アンパンマン」 11 / 22について (荒川)		紙芝居「あそぼうあそぼう」 落ち葉のソリ遊び (村井) 手遊び「あたまかたひざぼん」 「アンパンマン」「どんぐり」 「むすんでひらいて」 (学生)
11月18日 月	第36回支援室開放 天気：晴 子ども7名 大人6名 自由遊び	11月28日 木	第39回支援室開放 天気：くもり 子ども8名 大人7名 自由遊び
11月19日 火	第65回交流会 (3歳児) 天気：晴 子ども11名 大人8名 集団遊び「大なみ小なみ」 手遊び「いわしのひらき」「パンダうさぎコアラ」 「アンパンマン」 絵本「大きなかぶ」「なんでやねん」 (水谷)	11月29日 金	第70回交流会 (3歳児) 天気：晴 子ども12名 大人8名 手遊び「1本と1本で手をたたこう」 絵本「きんぎょがにげた」 落ち葉拾い (3枚) こすり出し 落ち葉のソリ遊び 手遊び「アンパンマン」 (荒川)
11月20日 水	第66回交流会 (0歳児) 天気：晴 子ども2名 大人2名 それぞれ興味のある事で遊んでもらった お母さんの子育ての話を聞く (村井)	12月2日 月	第40回支援室開放 天気：晴 子ども8名 大人7名 自由遊び
11月21日 木	第37回支援室開放 天気：晴 子ども9名 大人7名 自由遊び	12月3日 火	第71回交流会 (1~3歳児) 幼稚園ホール (クリスマス会) 天気：晴 子ども58名 大人51名 学生16名 (保育学部4年基村ゼミ、専攻科1年) 手遊び「パンダうさぎコアラ」「りんごがコロコロ」 「一本橋こちょこちょ」「アンパンマン」 (水谷) 音楽あそび「100%勇気」「夢をかなえよう」 手遊び「おもちゃのチャチャチャ」 (学生)
11月22日 金	第67回交流会 (1~3歳児) 幼稚園ホール 天気：晴 子ども52名 大人46名 学生18名 (専攻科2年高須ゼミ) あいさつ 親子遊び「お船にのって」 手遊び「パンダうさぎコアラ」「1本と1本で」 (荒川) 「幼児の音楽遊び」 (学生)	12月4日 水	第72回交流会 (0歳児) 天気：晴 子ども4名 大人4名 学生17名 (保育科1年上野ゼミ) わらべうた「ひとりきな」 わらべうた「にぎりばっちり」「じーじーば」 シフォン布を使って 音楽「かしてかして」ふれあい遊び (村井) ふれあい遊び「きゅうりができた」 (学生)
11月25日 月	第38回支援室開放 天気：くもり 子ども4名 大人4名 自由遊び	12月5日 木	第73回交流会 (1歳児) 天気：晴 子ども16名 大人16名 親子あそび「りんごがころん」「おうまのおやこ」 手遊び「あたまかたひざぼん」
11月26日 火	第68回交流会 (1歳児) 天気：くもり 子ども8名 大人8名 落ち葉のソリ遊び 絵本「だるまさんの」 手遊び「りんごがコロコロ」 (水谷)		
11月27日 水	第69回交流会 (2歳児) 天気：晴 子ども17名 大人13名 学生17名 (保育科1年近藤ゼミ) 音楽「バスにのって」		

	絵本「こねこがにゃあ」「しあわせなら手をたたこう」 さよなら「アンパンマン」			
12月6日 金	第41回支援室開放 子ども6名 大人6名 自由遊び	天気：晴	12月11日 水	第43回支援室開放 子ども24名 大人20名 学生8名（保育学部4年） 自由遊び 学生人形劇「もうすぐクリスマス」
12月9日 月	第42回支援室開放 子ども8名 大人7名 自由遊び	天気：晴	12月12日 木	第44回支援室開放 子ども23名 大人20名 学生8名（保育学部4年）
12月10日 火	第74回交流会（2歳児） 子ども12名 大人11名 学生8名（専攻科1年） 手遊び「アンパンマン」「一本橋こちょこちょ」 絵本「おすわりくまちゃん」 学生 手遊び「アンパンマン」「いわしのひらき」 絵本「おすわりくまちゃん」 音楽「きよしこの夜」ハンドベル演奏	天気：くもり	12月13日 金	第75回交流会（3歳児） 子ども12名 大人7名 手遊び「くるくるで拍手」「ずっとあいこ」「アンパンマン」 絵本「クリスマスのころわん」 (荒川)
				1月9日、10日、14日、15日、16日、17日、20日、21日、22日、23日、24日、27日、28日、29日、30日 2月3日、4日、5日、6日、10日、12日、13日、14日、17日、18日、19日、21日、24日、25日、26日、27日、28日 3月4日、5日、6日、7日、10日、11日、13日、14日



< 2013年度 研究所役員体制 >

教育保育研究所

所長 布施 佐代子
主任研究員 中村 淳子
主任研究員 今野 正良

事務局 稲垣 正義・本多 美須子

保育子育て研究所

所長 野津 牧
主任研究員 岡林 恭子
主任研究員 神谷 妃登美

教育保育研究所
保育子育て研究所 年報第11号

執筆者	野津 牧	名古屋短期大学保育科	准教授
	岡林 恭子	名古屋短期大学保育科	教授
	猪熊 弘子	ジャーナリスト・東京都市大学人間科学部	客員准教授
	太田 早津美	桜花学園大学保育学部	教授
	原田 明美	名古屋短期大学保育科	准教授
	山下 直樹	名古屋短期大学保育科	助教
	小川 絢子	名古屋短期大学保育科	助教
	田端 智美	桜花学園大学保育学部	准教授
	嶋守 さやか	桜花学園大学保育学部	准教授
	伊藤夏実・加藤由美	桜花学園大学保育学部	学生
	奥村 紀子	名古屋市稲葉地保育園	園長
	中村 淳子	桜花学園大学保育学部	教授

(掲載順)

編集後記

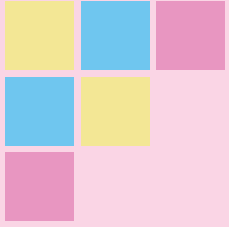
2012年4月1日より桜花学園大学に教育保育研究所が設置されることとなりました。2013年度、保育子育て研究所と教育保育研究所は、名古屋キャンパスの教職員・学生・卒業生・ボランティアスタッフが連携して活動を進めてきました。

2013年8月の夏季保育研究セミナーでは、NPO法人にじいろクレヨン代表の柴田滋紀氏から「震災被災地の保育に学ぶ」と題して、石巻の子どもたちとの関わりについてお話をいただきました。実践屋台村、各分科会でも、卒業生の笑顔がみられました。また、卒業生等が参加して行われた講演会ではジャーナリストの猪熊弘子氏に、子どもの命を守る保育園の役割について貴重なお話を伺うことができました。

ご執筆いただいた各先生方の研究報告、実践記録には、保育に関わる世界がいきいきと描かれているところがたくさんあります。ぜひ御一読ください。

教育保育研究所 年報 第11号 (2013年度) 保育子育て研究所

発行者	桜花学園大学 教育保育研究所 名古屋短期大学 保育子育て研究所
発行年月日	2014年3月31日
住所	〒470-1193 愛知県豊明市栄町武侍48 桜花学園大学 名古屋短期大学内
電話	0562-97-1306
FAX	0562-98-1162
HP	http://www.ohkagakuen-u.ac.jp/koso/home.html
印刷	(株) シイエム・シイ



桜花学園大学教育保育研究所
名古屋短期大学保育子育て研究所

